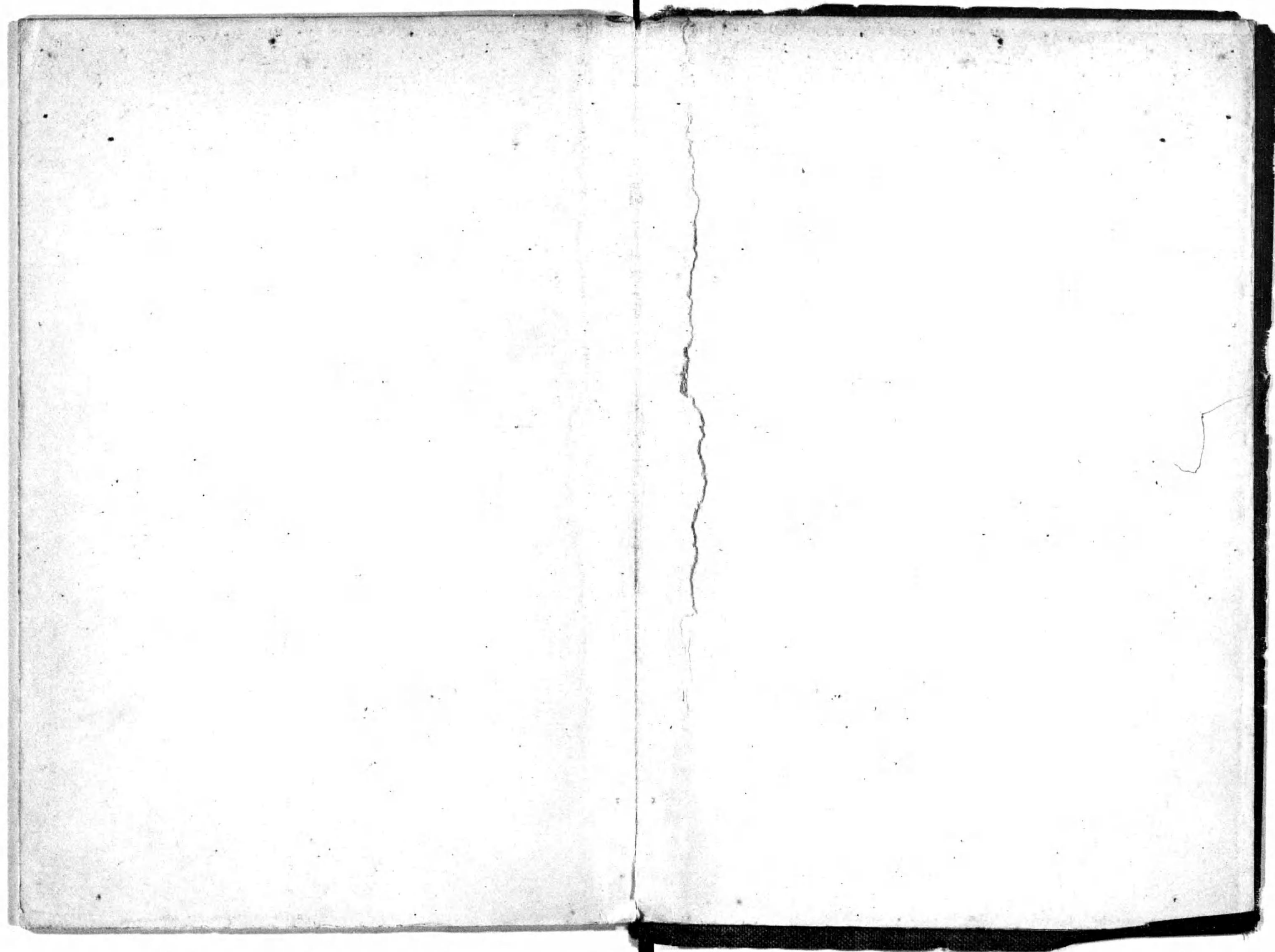


330  
a  
484



始





法學博士福田德三著  
經濟學全集  
第二集

國民經濟講話

法學博士福田德三著

廉刷版

經濟學全集

第二集

東京

株式會社  
同文館藏版

330  
484




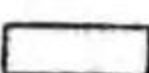


~1327

南露西亞タウリア縣  
パフロフカ村散圃圖

(斜線は一農民の耕  
す散圃を例示す)



パフロ  
カ村

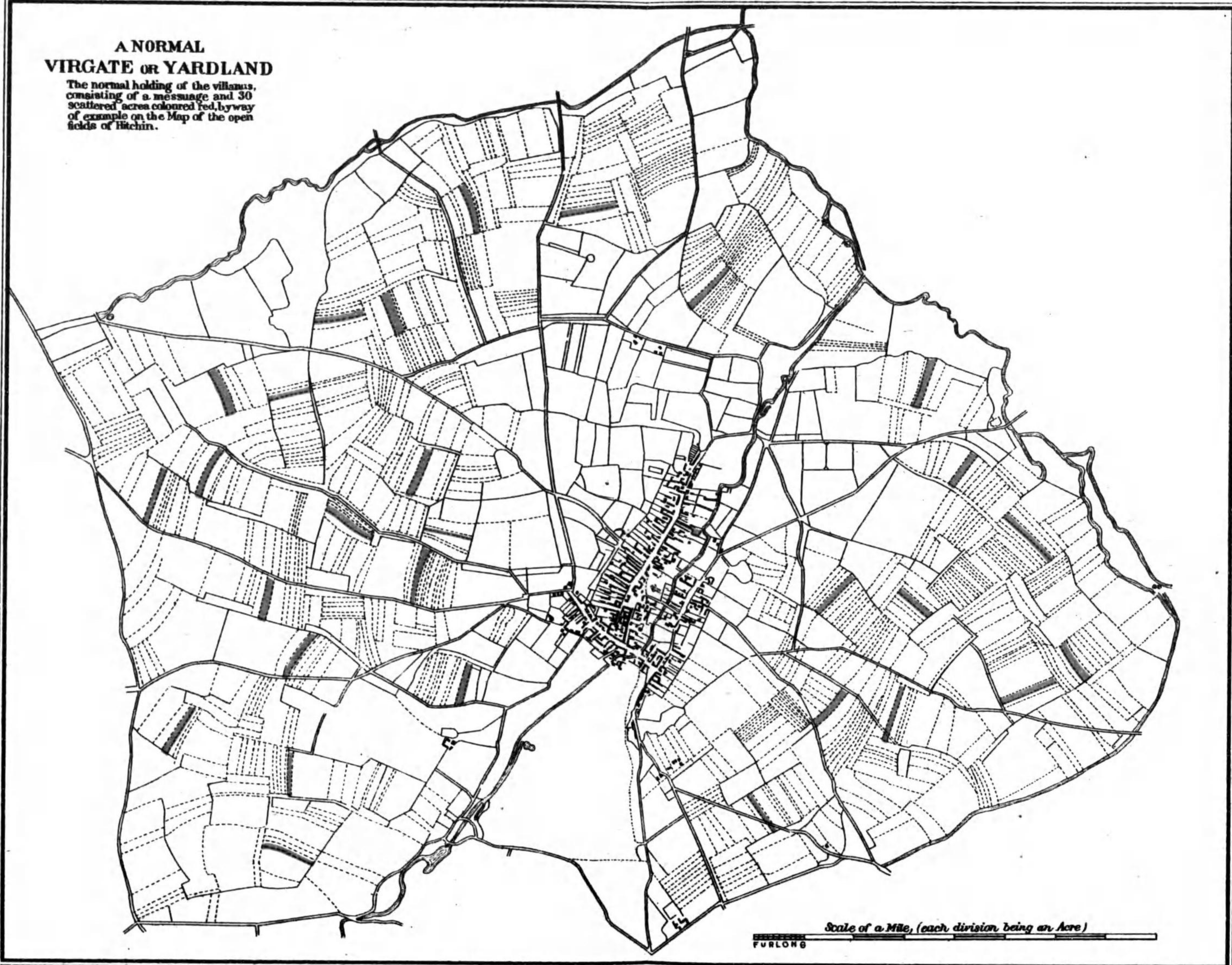
-  住地
-  耕地
-  牧場
-  道路

(本書第四五四  
頁説明参照)

(レヴンスキイ氏『財産起源史論』より取る)

**A NORMAL VIRGATE OR YARDLAND**

The normal holding of the villanus, consisting of a messuage and 30 scattered acres coloured red, by way of example on the Map of the open fields of Hitchin.



英國ヒッチン村耕地圖

赤色は一農民の耕す散圃を例示す

(本書第四五四頁説明参照)

巻頭ノ二

(シーボーム氏『英國村落共產體史論』より取る)

Scale of a Mile, (each division being an Acre)  
FURLONG

(シーボーム氏『英國村落共產體史論』より取る)

HITCHIN PURWELL FIELD	
PROPRIETORS NAMES WITH THEIR NUMBERS	
Byde, Esq.	1
Carter, Esq.	2
Mrs. Simpson	3
Rev. Mr. Whitehurst	4
Mr. Rd. Tristram	5
Late Mr. Gravelly Hurst	6
Mr. Charles Baron	7
<b>Jno. Radcliffe, Esq.</b>	<b>8</b>
Wm. Lucas Brewer	9
Late Thomas Smith	10
Mrs. Ann Newman	11
Thomas Goldsmith	12
Thomas Lyle	13
Francis, Thatchor	14
Mr. Jno. Foster	15
Mrs. Field	16
Mr. Vincent	17
Mr. Wm. Malein	18
<hr/>	
Benjn. Dobbs	20
Mr. Ransom	21
Mr. Warbe	22
Late Widow Paternoster	23
James Joyner	24
Mr. James	25
Mr. Jno. Collinson	26
Late Andrew Oakley	27
Wm. Dimsey	28
Mr. Collins	29
Mrs. Barrington	30
Charity Land	31
Mr. Bradley	32
Mr. Capreol	33
Mr. Cooper	34
Mr. Lane	35
Mr. Peirson	36
Late Mr. Turner	37
Mr. Jno. Turner	38
Mr. Gray	39
Widow Jervis	40
Mr. Jno. Overitt	41
Mr. Palmer	42
Mr. Warner Green	43
Mrs. Flach	44
Late Hurst	45
Widow Dobbs	46
Mr. Hatton	47
Mr. Wm. Thomas	48



N.B. The original of this Map was evidently not drawn to a scale. It was made early in this Century.

英國ヒツチン村散圃の圖

(地主四十八人ありて、赤色は第八號ラドクリフなる人の所有地、藍色は第十九號ルカスなる人の所有地なり。共に各區に散在せる様を示す)

(本書第四五四頁説明参照)

## 經濟學全集 第二集序

此第二集に收めたのは大鑑閣版改訂増補國民經濟講話を所々に亘つて訂正したものの此れであります。但し訂正と申しても、説を改めた箇所は殆どありません。訂正の大部分は、事實、年紀、統計等を微力の及ぶ限りアップトゥーデートにして新刷の趣意に副ふ様にしたのであります。索引は全く新たに大野隆君に作成して頂きました。舊索引は煩雜に過ぎて却つて不便でありましたから、今回の出来る丈け簡明にすることにしました。

猶此書の續篇たる流通經濟講話は甚だ不出來なものではありますが、兎に角流通論の大部分に就て講述したものを暫稿の一書として、近々大鑑閣から刊行することになつて居ります。此書は唯今の計劃では、經濟學全集中には入れません。他日十分に改訂し又た増補した上で、改めて編入することにし



たいと存じて居ります。

大正十四年一月三十一日

福田徳三

記す

二

第二集 總目

國民經濟講話

國民經濟講話 刊行一覽

乾 卷

(佐藤出版部)

大正六年二月廿五日發行  
 同 年三月廿日再版  
 同 年四月一日三版  
 同 年五月一日四版  
 同 年六月十五日五版  
 同 年八月三日六版  
 同 年八月八日七版  
 同 年二月七日八版  
 同 年三月十五日九版  
 同 年五月卅日十版  
 同 年六月十五日十一版  
 同 年十月一日十二版  
 同 年十月廿五日十三版  
 同 年十一月十五日十四版  
 同 年二月一日十五版  
 同 年二月十五日十六版  
 同 年四月十日十七版  
 同 年五月廿日十八版

坤 卷一

(佐藤出版部)

同 年六月十五日十九版  
 同 年九月十五日廿版  
 同 年九月卅日廿一版  
 大正七年二月七日發行  
 同 年二月十二日再版  
 同 年二月十七日三版  
 同 年三月五日四版  
 同 年三月十五日五版  
 同 年三月廿五日六版  
 同 年四月五日七版  
 同 年九月廿日八版  
 同 年十月五日九版  
 同 年二月一日十版  
 同 年二月十五日十一版  
 同 年五月五日十三版  
 同 年五月十五日十四版  
 同 年五月廿五日十五版

坤 卷二

(佐藤出版部)

同 年八月十日十六版  
 同 年八月廿日十七版  
 同 年九月十八日十八版  
 同 年十一月十九日十九版  
 同 年二月十日廿版  
 大正八年十一月十一日發行  
 同 年十一月十五日再版  
 同 年十一月廿日三版  
 同 年十一月廿五日四版  
 同 年十一月廿八日五版  
 同 年十一月卅日六版  
 同 年十二月五日七版  
 同 年十二月廿五日八版  
 同 年一月五日九版  
 同 年一月十五日十版  
 同 年一月廿五日十一版

合冊版

(大 登 閣)

大正十年二月十七日發行  
 同 年二月廿日再版  
 同 年二月廿三日三版  
 同 年二月廿五日四版  
 同 年二月廿七日五版  
 同 年三月二日六版  
 同 年三月五日七版  
 同 年四月七日八版  
 同 年五月十日九版

同 年六月廿五日十版  
 同 年九月廿日十一版  
 同 年十月十五日十二版  
 同 年十一月十五日十三版  
 同 年十二月廿五日十四版  
 同 十一年一月十五日十五版  
 同 年二月十日十六版  
 同 年二月廿五日十七版  
 同 年三月五日十八版

同 年三月十五日十九版  
 同 十二年五月五日廿版  
 同 年五月十日廿一版  
 同 年五月十五日廿二版  
 同 年五月廿五日廿三版  
 同 年六月二日廿四版  
 同 年七月三日廿五版

## 分冊 第一刷序

六

普通の教育あり常識を具へた人ならば、誰が讀んでも諒解することが出来て、而も最新の學問進歩の程度に十分應じた經濟原論の書物を著はし度いと、私が兼てより抱いて居る考であります。尤も數年前經濟學教科書と名くる一小冊を公けには致しました。同學の方からは多少御讚めの言葉も頂きましたが、考へて見ますに、簡単な教科書や讀本を出した許りでは、私の考を十分諒解して頂くことは六ケしいのです。普通に行はれて居る學説を其儘に述べるのなれば、他に澤山參考書がありますから、簡単な讀本だけを出しても、其れ相應に役に立ちませうが、新しい研究の結果を成るべく網羅しようとするれば、先づ少し詳細に説明した書物を出して置いてからでなければ、簡単な小冊子丈けを公けにしたとて殆んど用を爲さないことゝ存じました。私の經濟學教科書を精讀して呉れた友人中には、同時に其解説書の様なものを世に出さなければ、折角の苦心も何にもならぬとて忠告して呉れた方もありました。是は如何にも御尤も千萬な事と思ひました。

經濟學講義と申す拙著は、マーシャル先生の説と自分の説とを併せ述べたもので、正確に申せば私の著作とは見ることは出来ませんし、又た兩人の説を並べた爲め、大

分混雜したものになつて、初めての人に讀んで頂ける性質のものではありません。ソコデ私は閑があり次第、先づ少し詳しく而も通俗的に最新の經濟學理を解説した一書の著作を是非試みねばならぬと發心して、三四年來始終其事を問題として居たのですが、さて著手しようとなると、思つたよりも困難で、却つて六ケしいと云はれる様な文を作る方が樂でもありませんし、又た右様の通俗書を編むことは餘程時間が掛ること、容易に進行いたしませんでした。

其内に私自身も種々の點に於て持説を變へる必要を見ましたし、又た著述や講義に少し經驗を得て來ました結果、今まで世に出したものは如何にも不親切なもので讀者の了解力を全く度外に置いて自分の勝手許りを本位としたものであることを染々と感じました。又たアントン・メンガー先生の感化によつて、今までの學問は甚だ貴族的であつて、餘裕のある上流社會のみに多く獨占せられ、下層社會の餘裕のない人には没交渉で殊に六ケしい文字を並べて國民の多數が學問に近づくを却つて疎外する傾きのあるは、現代の一大缺陷であることを深く悟りました。殊に經濟學の様な國民の日常生活に密接の關係ある學問、文明國の市民には普く知つて居て貰はねばならぬ學問は、之を民衆化し之を通俗化する必要の甚だ大なるを痛切に感じました。社會政策杯と申しても先づ國民の經濟知識の向上から著手せねば何にもなりません。「走る者猶ほ讀み得る」と云ふことが善き經濟書を目指す所であれば

七

なりません。今までの様に難解な文字許りを並べて居たのでは、何時まで経つても経済學進歩の恩澤を國民一般に及ぼすことは出来ないかと考へ付きました。所が幸ひ十年間かゝつて居ました経済大辭書も漸く全部完成致し、學校の講義も追々講案の整理が就き、擔任時間數も減じて、勉強の餘時が殖えました。兼ての考を實現するのは此時だと存じて一昨年の秋から少しづつ草稿を起して見ました。然るに幸にも昨年の夏石川縣廳から縣下の中等學校教師の全部を金澤へ集めて講習會を開くから、經濟學の大意を講述して貰ひ度いと云ふ御依頼を受けました。誠に願ってもない善い機會と存じ喜んで御引受致して毎日四時間づつ一週間、外に追加三時間都合三十一時間かゝつて兎に角全體に渉る講話を終りました。其節嘗つて國民經濟原論著述のとき私の口授を速記して呉れたことのある荒浪市平氏に同行を請ひまして、右講話の全部を速記して貰ひました。右講習は石川縣下の中學校、高等女學校、男女師範學校、農工商業學校に現に職を奉ぜらるゝ諸君に對して致したもので、すから餘程都合が宜くありました。諸君は經濟學と云ふものは大抵始めて聴かざるゝのでありますが、學問上の素養は十分に具へた方々でありますから、用語を平易に術語には一々解説を下しさへすれば、可なり込入つた事の御話を致しても善く分つて頂けたので、恰も私が通俗經濟原論の讀者となつて頂きたいと思ふ其階級の方々を前にして御話を致した様な譯で、此機會を與へられた石川縣の當局者に對して

は、深く感謝致す次第であります。

ソコデ右の連記文を土臺として之に筆を加へました。成る可く速記文を生かす方針でありましたが、實際著手して見ると三分の二は新たに書き改めたり書き加へたりする必要がありまして、約三分の一許り右速記文を添削して入れることになりました。斯くして出來上つたのが此國民經濟講話であります。私は出来る丈け口述の調子を失はない様、金澤の諸君が善く分ると申された其程度に外れない様にと心掛けましたから、所によると少し諄過ぎて冗長散漫に涉つた部分はあるかと存じます。併し、其代り分らないと云ふ非難は先づ以て免れ得たかと存じて居ります。併しイクラ分り易いと云ふ一事を本位とするからとて、説明を要することを省略したり、事柄が込入つて居るからとて飛ばしたりして、普通有り來りの學說丈けで済ませて置くこと云ふことは私の良心が許しません。必竟分り易いと云ふことは形式の上の話で、内容は十分學問上の要求に應ずるものとしなければならぬと存じました。唯だ込み入つた學理を出来る丈け分り易く説くこと、殊に今日現在の實際問題と始終接觸を保つて、活きた生活の解釋を勉め讀者の常識に訴へること、其爲めには肝要な點は繰返して説明するを厭はざることの方針としました。又た出来る丈け廣く内外學者の著書を參考して重要な學說は勉めて之を紹介し兼て自分の研究の結果を述べるに方つては、自分に於て多少の定説に達したと信ずる所を詳しく記す

様にと心掛けました。即ち形式の上に於ては飽迄通俗であると共に、學問上多少註文を持つて居る讀者にも讀んで頂けるものとすることを期したのであります。以上は私が本書著述の心掛であります。但て實際出来上つた本書が果して之に應じたものなるか否かは、一に讀者諸君の教を待つて知る外はありません。形式上にも實際上にも缺點や誤謬は必ず多々あることゝ存じます。先覺諸君が斟酌遠慮なく御叱正下されんことを切望するものであります。

大正六年一月十四日

於千駄ヶ谷三素書房

## 合冊 改訂増補 第一版題言

本書は、従來國民經濟講話乾卷、坤卷（一）勞働經濟講話、坤卷（二）資本經濟講話の三冊として、佐藤出版部から刊行致したものを一冊に纏めて改版したものであります。右三冊何れも大方の愛讀を忝しまして、乾卷は、大正八年九月第二十一刷、坤卷（一）は、同九年二月第二十刷同（二）は大正九年一月第十一刷を刊行するに至りました。然るに出版元に種々都合があつて、其後重刷を見合せて居りました故、残本皆無となり、新しき讀者の需めに應ずることが出来ぬ爲、直接私に書を寄せて、重刷を求めらるゝ方が尠からずありました。併し右三冊は夫々時を異にして公けに致したもので、爲めに其間多少統一を缺く點があるのを見出しましたから、若干訂正を施して、首尾一貫した一書としたいと思ひ立つたのは、昨年一二月の頃でありました。依つて時々少閑を偷んで初から讀み直して少しづつ筆を加へて見ました。殊に乾卷は最初に執筆したものですから、不満足を感じる箇所が少からずありました。ソコで出来るだけ其等の點を除き、全三冊を通じて、甚しい不統一のないやうにと心がけつゝ添削の業を終りましたのは、昨年の秋でありました。生憎印刷の都合が意の如く運びません結果、漸く今日になつて刊行を見ることになつたのは残念に存する所ですが、全部ポイント活字に組直して紙数を減じ挿畫等も改められるだけ改め、兎に角一の

纏つた單行本として、多少體裁の整つたものとして、茲に公けにすることの出來たのは私に於て満足に存ずる所であります。殊に從來重刷毎に誤植・誤謬を象嵌で直しては居たのですが、何れも不十分でありました。其れをスツカリ原版に就て改めることの出來たのは愉快に感ずる次第です。是れに就ては、大野隆君は始から終まで、絶えず多大の勞を費されましたは深く感謝する所であります。殊に私の最も喜に堪へない事は、帝國圖書館司書官村島文學士が、私の懇願を御聞入れ下さつて、本書のために、甚だ詳密な件名・人名索引を作成して下さいましたこと、是れであります。村島學士の索引は舊版三冊を原本とせられたものでありましたが、更らに大野隆君に御頼して新版に於て追加した部分の件名・人名を加へて頂き、頁數も此改版の頁數を太文字で入れることにしました。即ち舊版三冊を御所持の讀者諸君は普通活字で示した頁數を、此改版の讀者諸君は、太文字の頁數を御檢索下さらば、何れも所要の件名・人名を見出さるゝことが出來るやうに致して置いたのであります。且又舊版の讀者のために、此索引丈けを別刷として刊行するやう大體閣に依頼して置きました。是れで新舊兩版の讀者に普く索引を提供するを得ることとなりまして、私は安心する次第であります。我邦の出版書に索引のないのは誠に遺憾な事と私は痛切に感じて居りまして、自分の著書には、出來る丈け索引を添へて、少しでも讀者諸君の勞を省くやうにしたいとは、兼て志して居る所でしたが、今漸く此望を達することの出來

たのは、實に村島司書官の御好意の賜であります。特書して厚く御禮を申し上げて置きます。

從來三冊に分けた爲め、甚だ煩雜となり、讀者中には、坤卷は未だ出版しないのかと御尋下さる方もあり、又は坤卷は何冊に分けてあるのか分らないと御叱り下さる方もありました。此度此等の煩はしい卷冊分けを全廢致して、單に『國民經濟講話』のみ稱する一卷の單行書と致しましたから、最早右様の疑惑は起らないと存じます。其内容は、經濟學總論と生産經濟論との全部より成るのであります。其結果、流通經濟論と結論とは、全く別の書物に譲ることとなり、致しました。但し此の國民經濟講話と合せ讀むに適するやう、體裁は全く同じに致し、書名を『流通經濟講話』と命じ内容を流通の原理、貨幣論、價格論、所得論、結論の五部に分ち、三冊に分けて順次刊行する積りで、第一冊は今年末か來年初には公けにし得るかと存じて居ります。此段豫め御諒察を乞ひ置きます。

大正十年一月十五日 中野常願寺の傍にて

經濟學全集 第二集 國民經濟講話 目次

第一卷 總論……………自 至 一一二九

第一編 序論……………一一五

第一章 今日の文明生活に於ける經濟の意義……………一一六

立憲政治は豫算政治なり(1) 家族經濟も豫算政治なり(3) 歐洲大戰は豫算生活を破壊せり(4)  
國家の經濟と個體の經濟(5) 今日の經濟は孤立せず(7) 立憲國民と經濟學の知識(9) 英國に  
於ける經濟知識の普及(9) 帳簿は淨玻璃の鏡(11) 會計監督と國の政治(13) 會計監督と家政(16)  
金錢問題は高尚なる道德問題なり(17) 英國の經濟道德(17)

第二章 經濟の本質……………一九—三三

經濟の定義(19) 經濟は有形物にのみ限らず(21) 經濟の本則に關する誤解を釋く(23) 技術と經  
濟の異同(24) 價値の略解(25) 經濟の目的も手段も共に價値なり(26) 貨幣價値の説明(28) 經濟組

織と經濟行爲(27) 行爲の學と組織の學(30) 經濟單位及經濟主體の略義(31)

### 第三章 自足經濟と流通經濟……………三—四六

兩語の意義並に説明(33) 自然經濟と云ふ語は不適當(36) 實物經濟又は物々交換は特色にあらず(37) 自足と云ふことが特色(38) 農家は主として自足經濟を營む(38) 昔は皆自足經濟なり(39) 自足的ならざる英國と自足的なる獨逸(40) 獨逸の強みは經濟上にもあり(42) 東洋の英國は御免を蒙る(43) 我日本の經濟上の強み(44)

### 第四章 經濟と云ふ語と思想の成立……………四七—六〇

國家自足經濟の理想(47) 侵略的の國家自足經濟即ち植民地帝國(48) 國民經濟と云ふ思想の起り(49) 東洋に於ける經濟てふ思想の發達(50) 家政と經濟(52) 西洋に於ける經濟なる語の變遷(52) 拉丁系統の經濟なる語(53) 獨逸語にての經濟(55) 世界經濟の思想(57) 聯合國經濟同盟の事(58)

### 第五章 流通經濟の本質……………六〇—八二

經濟の獨立は孤立にあらず(60) 流通經濟は大勢なり(62) 物に付ての收支適合(62) 支那の平準

の政(63) 調節の今昔(66) 金錢上の收支適合(66) 收支適合の眞意(70) 支なければ收なし(75) 農民と流通經濟(77) 舊藩の經濟(79) 今日の農村生活の矛盾(81)

### 第六章 貨幣經濟及營利經濟……………八三—一〇七

貨幣經濟の説明(83) 今日の生活は萬事を貨幣に見積る(84) 法律も亦た貨幣見積を本位とす(85) 貨幣見積りと經濟道德(86) 今日の經濟道德の見方(87) 働く貧者は働かざる富者に勝る(88) 拜金主義は蔑む可し(90) 流通經濟と貨幣經濟(91) 營利經濟の説明(92) 營利經濟に於ける收支適合の意味(93) 複式簿記に表はれたる營利經濟(95) 資本の選増が生命なり(98) 一家經濟も道理は同じ(99) 最大餘利を得る爲めの選擇(100) 人の必要は夫々に異なる(103) 株式相場の一例(103) 賣買交換は價異なる物に就て行はる(105) 賣手の餘利と買手の餘利(106) 他人の考へ及ばざる利用を案出す(107)

### 第七章 經濟學の意義・分科・研究法及發達……………一〇八—一五六

經濟の研究は過去・現在・將來の三に分る(108) 過去の經濟研究の必要(109) 經濟學史の研究(110) 將來の經濟の研究(111) 現在の國民經濟の研究(112) 經濟學の分科(113) 學問は統一的知識(117) 經濟



學の意義<sup>(121)</sup> 貨幣・自足兩經濟を統一するは困難<sup>(118)</sup> 經濟政策の説明<sup>(120)</sup> 政策の意義<sup>(12)</sup> 全體の利益と部分の利益とを混す可からず<sup>(122)</sup> 政策の目的は全體の利益<sup>(123)</sup> 八方美人主義は不可<sup>(123)</sup> 關稅政策の一例<sup>(124)</sup> 政策の考は昔より在り<sup>(125)</sup> 王安石太湖開墾の話<sup>(125)</sup> 『レッセ・フェール』の由來<sup>(127)</sup> 謬れる政策<sup>(127)</sup> 新らしい意味の經濟政策<sup>(128)</sup> 獨逸の經濟學は政策に偏す<sup>(129)</sup> 國民經濟學の内容<sup>(130)</sup> 國家・企業及家計經濟學の略解<sup>(131)</sup> 財政學と經濟學との關係は極めて密接<sup>(133)</sup> 國家財政と地方財政<sup>(134)</sup> 義務教育實は權利教育<sup>(135)</sup> 國民教育の負擔を全部地方財政に課するは非<sup>(137)</sup> 統計學の意義及必要<sup>(138)</sup> 網羅的と云ふが統計の生命<sup>(138)</sup> 人口調査の急要<sup>(139)</sup> 經濟史の必要<sup>(141)</sup> 經濟學の研究法<sup>(142)</sup> 演繹法の及ばぬ所<sup>(143)</sup> 歸納法の必要<sup>(143)</sup> 今日の實際家は却て演繹論者<sup>(144)</sup> 米價調節論<sup>(145)</sup> 在外正貨問題<sup>(145)</sup> 歴史派の意義<sup>(148)</sup> 國民經濟思想の變遷<sup>(150)</sup> 商賣は平和の戰爭なりとは謬想<sup>(151)</sup> 商賣と戰爭とは全く別物<sup>(151)</sup> 二宮翁の名言<sup>(152)</sup> 武士道は非常道<sup>(154)</sup> 自由主義經濟學の起り<sup>(154)</sup> 反動起る<sup>(155)</sup> 歐洲大戰の齎らせる一大轉機<sup>(155)</sup>

第二編 國民經濟の組織……………一五七—二四五

第八章 國民經濟を組織なりと云ふことの眞意……………一五七—一六六

誤解多し<sup>(157)</sup> 組織と有機體との差違<sup>(157)</sup> 兩者に共通の點<sup>(159)</sup> 大なる組織の國民經濟に主體

なし<sup>(160)</sup> 社會主義の國民經濟改造論にも一理なきにあらず<sup>(161)</sup> 個人主義の國民經濟觀<sup>(162)</sup> 自然法説は革命論なり<sup>(163)</sup> 現状維持と現状打破<sup>(164)</sup> 『メルカントリズム』に對する反動<sup>(164)</sup> 有權體説の國民經濟觀<sup>(166)</sup> 個人無視の謬想<sup>(167)</sup> 正しき國民經濟觀<sup>(167)</sup>

第九章 國民經濟の成立……………一六八—二〇〇

歴史的觀察の必要<sup>(168)</sup> 孤立の個人なし<sup>(169)</sup> 孤立經濟に關する誤<sup>(169)</sup> 原始の經濟組織に關する二個の説<sup>(171)</sup> 群團説<sup>(171)</sup> 無婚亂交の時代<sup>(172)</sup> 氏の起源<sup>(173)</sup> 母權制度<sup>(174)</sup> 其説は誤り<sup>(174)</sup> 婚姻なき社會なし<sup>(175)</sup> 飛驒白川の大家族<sup>(176)</sup> 其の系圖調<sup>(177)</sup> 其家族の員數<sup>(181)</sup> 一戸平均の口數<sup>(182)</sup> 最も著しい點<sup>(185)</sup> 婚姻なきに非ず<sup>(186)</sup> 母權の實なし<sup>(187)</sup> 資本制以上の労働掠奪<sup>(188)</sup> 群團説を打破る一例<sup>(188)</sup> 生理上不可能<sup>(189)</sup> 原始民族の婚姻制度<sup>(189)</sup> 家族と氏族<sup>(191)</sup> 招婿婚と嫁娶婚<sup>(191)</sup> 曹族阿里山蕃の婚姻<sup>(192)</sup> 臺東廳アミス族の婚姻<sup>(193)</sup> 臺東廳ブヌマ族の婚姻<sup>(193)</sup> 阿眉族馬蘭社の婚姻<sup>(194)</sup> 卑南族卑南社の婚姻<sup>(194)</sup> 阿眉族奇密社其他の婚姻<sup>(194)</sup> タイヤル族の婚姻<sup>(196)</sup> 女の經濟上の價值に依つて異なる<sup>(195)</sup> 鎖封的家屬經濟<sup>(196)</sup> 莊園經濟の事<sup>(197)</sup> 共同經濟起る<sup>(197)</sup> 都市經濟の事<sup>(198)</sup> 國家自足經濟<sup>(199)</sup> 國民經濟完し<sup>(199)</sup>

第十章 經濟の種類……………二〇〇—二二二

二様の種類分け(200) 特殊經濟(201) 個體經濟(201) 家族は不可分の單位(202) 歐洲も家族本位(203)  
 企業經濟(204) 特殊經濟としての國家經濟(215) 共同經濟としての國家經濟(206) 國家經濟の三方  
 面(207) 其他の共同經濟(208) 國民經濟は綜合經濟なり(208) 國民經濟と國家經濟とを混同するは  
 不可(209) 實例を以て説く(210) 兩者調和の必要(211)

### 第十一章 國家と國民經濟……………二二—二四五

國家は國民經濟の地盤(212) 國家の制度と國民經濟(213) 行政組織と國民經濟(214) 行政の範圍(215)  
 財政制度(215) 私法制度と國民經濟(217) 自由起源説(217) 歴史派の見解(219) 兩説共に誤れり(219) 獨  
 逸民族の原始的自由(220) 奴隸制度(221) 農奴制度(222) 農民解放(223) 工業勞働の今昔(223) 職業の自  
 由完し(224) 形式上の自由と實質上の自由(225) 政治上の自由と經濟上の自由(226) 私法と實際生  
 活(227) 私有財産制度(229) 財産法治國(230) 是又歴史的産物(231) 私有財産の起源(232) 原始共產制度  
 論必ずしも信じ難し(233) 權力財産説(234) 私有財産の二種(235) 不動産の發達(235) 大寶令の制度(236)  
 支那の井田法(236) 所有權の主體(237) 生産能率増進の必要(238) 私有財産制完し(239) 相續制度(239)  
 兩制度に對する攻撃(240) 私有財産制度の理論(241) 理論よりも事實(242) 兩制度の缺點尠からず(244)

### 第三編 經濟行爲の根本觀念……………二四六—二九八

#### 第十二章 目的行動と風俗習慣……………二四六—二六八

本編の内容(245) 目的行動の意義(247) 例を以て説明す(248) 目的により意味異なる(249) 目的の内容(250)  
 目的行動の妨げらるゝ場合(250) 必ずしも目的を立てざる行爲(251) 流行の變遷(251) 人間の模倣  
 の動物(252) 習慣は自己模倣(252) 習慣は元勞を省く(253) 食事時間は生活の區劃(254) 一定の服装(254)  
 婦人の服装は原始的(255) 衣服は裝飾より起る(256) 野蠻人は裝飾家(256) 文明生活は反つて簡單(257)  
 風俗の變化(257) 歐洲大戰の經驗(258) 獨逸の皮剝訓令(258) 移風易俗の困難(259) 保守的なる英吉利  
 人(260) 英吉利相場(261) 大陸に於ける英人の生活(262) 質素に慣れたる者は移り易し(262) 固定的生  
 活は考物(263) 政治家の苦心(263) 特別行事の意義(264) 目的行爲力説の必要(264) 收支適合の一點に  
 あり(265) 收支適合には目的の確立が必要(267) 金錢の事柄は他人(267)

#### 第十三章 價值・價格及貨幣價值……………二六八—二九八

物の蓄積は價值の蓄積に非ず(269) 其の一例(269) 愚なる米穀貯藏(270) 物を亡ぼして價值を造る  
 ことあり(271) 價值餘剰の累積(272) 價值と價格(273) 價格の説明(274) 代と云ふ字は甚だ適切(275) 人  
 事關係に於て物を動かす爲めの代價(275) 人をも代價にて言表す(276) 經濟上の價值と其以外の  
 價值(277) 價值は自然事實にあらず(278) 目的と手段との對照比較に基く(278) 主觀的判斷の度盛

り(279) 價值判斷の標準(281) 實際の一例(281) 價值判斷は常に相對的なり(282) 社會的判斷に一致するを要す(283) 正確に言表し得る價值(284) 善惡を正確に言表すは困難(284) 點數は不正確(285) 經濟價值は正確に度盛せらる(286) 欲望の觀念より出立する通説(287) 通説取る可からず(288) 循環論法に陥る(288) 經濟行爲の特色は物質に關するにありとの説明(289) 欲望充足には物質を缺く可からず(290) 經濟行爲の特色は他に在り(291) 善と財に共通の點(292) 判斷の錯誤尠からず(293) 日露協約の嬉喜び(294) 個人に付ての錯誤(295) 富潤屋徳潤(295) 善と財とは終に一致す(295) 貨幣價値の眞意義(297) 一の方法に過ぎず(298)

## 第二卷 生産論……………二九九—一三四八

### 第四編 企業・土地及人口……………二九九—五六二

#### 第十四章 經濟本論の内容……………二九九—三二七

總論と本論(299) 從來の分け方(300) 經濟學四分法の起り(300) ジアン・バチスト・セーが唱道者(301) ジエームス・ミルの追加(302) 其長所は簡單明瞭(303) 一種の論理練習法(304) ミルの經濟原論の成立(306) 四分法は英國特有の狀態に適す(307) 四分法の缺點(308) 例を以て説明す(309) 區別の標準

は何(310) 貨幣價値が其標準(310) 必ずしも墨守を要せず(313) 其不可なる點(313) 二分法を取る理由(314) 生産と流通の自ら異なる點(315) 貨幣價値と人(316)

#### 第十五章 生産の意義及形態……………三七—三六

生産とは貨幣價値を作り出すこと(317) 價值を作ることには必ずしも貨幣價値を作ることにあらず(319) 生産制限の實例(320) 極端なる生産獨占の弊害(321) 技術的生産と經濟的生産(322) 區別する必要なし(323) 費用も貨幣價値なり(324) 生産は流通の支配を受く(325) 營利生産と非營利生産(326) 生産の三形態(327) 廣き意味の生産(327) 自己生産(328) 自己生産廢すべからず(329) 註文生産(330) 註文生産は工業發達の起り(331) 西洋でも同様(332) 註文生産は絶滅せず(333) 註文生産の特色(334) 商品生産(334) 商品生産全盛の勢(335) 機械的生産の發達(336) 市場生産(337) 商品生産は廢す可からず(338)

#### 第十六章 營利・營業及職業……………三九—三七九

營利と生産(339) 營利の意義(340) 職業の意義(340) 營業と職業の異同(341) 其の實例(343) 職業は人の身分を定む(344) 職業なる觀念の由來(345) 職業意識(346) 職業と社會問題(347) 有職者と無職者(349) 職

業統計<sup>(350)</sup> 國民の職業別<sup>(352)</sup> 我邦の職業分類<sup>(354)</sup> 第一回國勢調査の職業分類<sup>(355)</sup> 助業家族<sup>(361)</sup>  
 無職業者問題<sup>(362)</sup> 助業家族の獨立傾向<sup>(365)</sup> 婦人賃銀は何故に低きや<sup>(365)</sup> 婦人の職業は補助的  
 と看做さる<sup>(368)</sup> 低級労働の競争<sup>(370)</sup> 職業に取つての大問題<sup>(371)</sup> 安き労働は却つて高し<sup>(372)</sup> 根本  
 的の憂<sup>(372)</sup> 營利の得失<sup>(373)</sup> 營業と家計の分離<sup>(376)</sup> 所謂家庭主義却つて弊害多し<sup>(378)</sup> 家庭より營  
 利を遠ざくること<sup>(378)</sup> 職業の眞使命<sup>(379)</sup>

**第十七章 企業の意義及任務**……………三七九—四〇一

營利生産の主宰者並に責任者<sup>(380)</sup> 企業は生産の根本動力<sup>(380)</sup> 企業存在の理由<sup>(381)</sup> 危険の負  
 担と利潤の收得<sup>(383)</sup> 統一的意思の主體<sup>(383)</sup> 企業の定義<sup>(384)</sup> 企業は一の經濟なり<sup>(384)</sup> 純營利組織  
 なり<sup>(385)</sup> 營利のみを以て特徴とする説<sup>(386)</sup> 更に一の特色あり<sup>(387)</sup> 一切を背負つて立つこと<sup>(388)</sup>  
 危険負擔の意義<sup>(389)</sup> 資本冒險の説<sup>(390)</sup> 此説不十分なり<sup>(391)</sup> 寧ろ利潤冒險にあり<sup>(392)</sup> 利潤冒險の  
 特殊なる點<sup>(394)</sup> 企業固有の任務<sup>(395)</sup> 企業者は資本主を兼ね<sup>(396)</sup> 雇主たる任務<sup>(397)</sup> 雇主たること  
 資本主たるよりも重し<sup>(398)</sup> 企業廢止は不可能<sup>(400)</sup>

**第十八章 土地の不變性と可變性**……………四〇一—四三八

生産の三要素<sup>(401)</sup> 土地の技術的性質<sup>(402)</sup> 土地の經濟上の性質<sup>(403)</sup> 土地の延長即ち面積<sup>(403)</sup> 地位  
 と氣候<sup>(405)</sup> 有限不足に打克つ必要<sup>(406)</sup> 恢復し得ざる可變性<sup>(406)</sup> 恢復し得る可變性即ち豊度<sup>(409)</sup>  
 土地の物理的性質<sup>(409)</sup> 土地の化學的性質<sup>(410)</sup> 豊度の減退<sup>(412)</sup> 土地の固有性と資本性<sup>(413)</sup> 土地は  
 一の資本なり<sup>(414)</sup> リカルドの土地論<sup>(415)</sup> 其の由來<sup>(416)</sup> 英國の土貴族政治<sup>(417)</sup> ハリングトンの財  
 産均衡論<sup>(417)</sup> 英佛戦争と地主政治<sup>(418)</sup> リカルドは地主を敵視す<sup>(420)</sup> 其説を承繼する英國派經濟  
 學<sup>(420)</sup> 地主本位の米價調節論<sup>(421)</sup> 地租輕減論<sup>(422)</sup> 土地には本來不可壞の力なるものなし<sup>(422)</sup> 面  
 積と地位のみ不變的なり<sup>(423)</sup> 有限と無限の調和<sup>(424)</sup> 土地私有制度より來る困難<sup>(424)</sup> 土地公有  
 論<sup>(425)</sup> 土地私有は普通の大勢<sup>(426)</sup> 土地自然増價税のこと<sup>(427)</sup> 豊度増進の工夫<sup>(428)</sup>

**第十九章 耕作法及土地改良**……………四三八—四五〇

粗放耕作より集中耕作へ<sup>(429)</sup> 集中耕作の二手段<sup>(429)</sup> 狩獵と遊牧<sup>(430)</sup> 野生穀物耕作法<sup>(430)</sup> 焼田耕  
 作並に焼沼地耕作<sup>(431)</sup> 我邦に於ける焼畑の事<sup>(432)</sup> 永久牧地・耕地併存法<sup>(431)</sup> 三圃農法<sup>(436)</sup> 交錯  
 圃の説明<sup>(437)</sup> 三圃農法は粗放的<sup>(439)</sup> 調節穀物耕作法<sup>(440)</sup> 稍々集中的となる<sup>(441)</sup> 休耕地の利用<sup>(441)</sup>  
 改良三圃農法<sup>(442)</sup> 改良穀物耕作法<sup>(443)</sup> 輪栽農法<sup>(444)</sup> 甚だ集中的<sup>(444)</sup> 英國が本家本元<sup>(446)</sup> 自由農  
 法<sup>(445)</sup> 土地改良の要點<sup>(446)</sup> 一定面積の土地が養ふ人口數比較<sup>(448)</sup>

**第二十章 土地收穫の増加殊に收穫遞減の法則**……………四五〇—四八〇

二個の問題<sup>(450)</sup> 土地收穫の増加は無限に可能なりや<sup>(451)</sup> 偏農論者の謬想<sup>(451)</sup> チュルギーの土地收穫有限説<sup>(452)</sup> 千八百十三年に於ける英國の穀價調節論<sup>(453)</sup> マルサス、ウエスト、リカルドの土地收穫遞減論<sup>(451)</sup> 土地收穫遞減法則の定義<sup>(456)</sup> 土地收穫遞減圖<sup>(457)</sup> 一の前提あり<sup>(457)</sup> 栽培物の變換は此法則を中止す<sup>(459)</sup> 猶一つの方法あり<sup>(461)</sup> 以上を要言すれば<sup>(461)</sup> 第一の問題に對する結論<sup>(462)</sup> 純收穫を増すには如何なる條件必要なりや<sup>(463)</sup> 同一豊度の土地に就ての原則<sup>(464)</sup> ロッシアアー氏の用ひたる一例<sup>(464)</sup> 右より得る結論<sup>(466)</sup> 土地の豊度が異なる場合<sup>(473)</sup> 豊度高き土地ほど集中耕作に進み易し<sup>(472)</sup> 生産費減少の行はれ得る場合<sup>(472)</sup> 右の説明<sup>(473)</sup> 市場に近きほど集中耕作行はれ易し<sup>(476)</sup> 全體の結論<sup>(478)</sup>

## 第二十一章 人口の増加殊にマルサス氏人口の法則 四二—五六三

土地と人口<sup>(481)</sup> マルサス人口論の由來<sup>(482)</sup> 誤解謬傳甚だ多し<sup>(482)</sup> 反對論者無數<sup>(483)</sup> マルサス人口論當時の英國の國情<sup>(484)</sup> ゴドウィン現はる<sup>(486)</sup> マルサス起る<sup>(488)</sup> マルサスのゴドウィン評論<sup>(489)</sup> 人口論第一版の要領<sup>(490)</sup> 二個の前提<sup>(491)</sup> 幾何級數的と算術級數的<sup>(492)</sup> 豫防的抑制と積極的抑制、窮困と罪惡<sup>(496)</sup> 第一版の結論<sup>(497)</sup> 極めて悲觀的なる自然黨能論<sup>(497)</sup> 人口論第二版の要領<sup>(498)</sup> 二種の抑制<sup>(500)</sup> 第二版の結論<sup>(502)</sup> 第一版と第二版との比較<sup>(503)</sup> 永久不易の大真理<sup>(505)</sup> マルサスの所説に三部分あり<sup>(506)</sup> マルサス説の批評<sup>(508)</sup> 人口二倍年數のこと<sup>(509)</sup> 二倍年數算出

表<sup>(511)</sup> 人口二倍年數表<sup>(514)</sup> マルサス説の價値は減ぜず<sup>(516)</sup> 我邦人口増加の概要<sup>(517)</sup> 英國人口増加の概要<sup>(520)</sup> 北米合衆國人口増加の概要<sup>(522)</sup> 道德的抑制の事<sup>(523)</sup> 歐洲に於ける出生率の減少<sup>(524)</sup> 英獨出生率の比較<sup>(526)</sup> 其他諸國に於ける出生率<sup>(527)</sup> 我邦の出生率<sup>(528)</sup> 最近の生産率<sup>(530)</sup> マルサスの政策、道德論は取る可からず<sup>(531)</sup> 出生率減少の原因<sup>(532)</sup> 歐洲並び本邦に於ける結婚率<sup>(532)</sup> 一配偶産兒數の減少<sup>(539)</sup> 結婚數減少の原因<sup>(539)</sup> 配偶間産兒數減少の原因<sup>(541)</sup> 罪惡と窮困の増進を意味す<sup>(542)</sup> 人口過超の杞憂<sup>(543)</sup> 死亡率の減少を尙とす<sup>(544)</sup> 我邦の死亡率<sup>(545)</sup> 人類進化の爲めの犠牲<sup>(546)</sup> 生存競争は自然の大則<sup>(547)</sup> 贅澤なる天然<sup>(547)</sup> 嬰兒死亡數大なり<sup>(548)</sup> 其他の淘汰作用<sup>(549)</sup> 優生學<sup>(550)</sup> 自然淘汰の外に文化淘汰あり<sup>(550)</sup> 生活の程度<sup>(551)</sup> 認識の衝動<sup>(552)</sup> 社會問題は文化淘汰より起る<sup>(554)</sup> 失職、無職者問題<sup>(555)</sup> 其の起る所以<sup>(556)</sup> 工場法の影響<sup>(557)</sup> 苦汗制度<sup>(558)</sup> 離職の不安の特質<sup>(558)</sup> 今日生活の保障一もなし<sup>(558)</sup> 例を以て説明す<sup>(560)</sup> 人口の法則の文化的擴張<sup>(61)</sup> 土地と人口との不調和を取除く工夫<sup>(561)</sup>

## 第五編 勞働……………五六三—八五八

### 第二十二章 生産の自然要素と文化要素……………五六三—五七七

生産の自然的根本事實<sup>(563)</sup> 生産要素に自然的と文化的とあること<sup>(565)</sup> 生産の「ファクトル」と

「エレメント」(566) 人口論の取扱ひ方(566) 一貫せる経済の本質(567) 経済と節約(568) 手近な一例(569)  
経済は有限、稀少の資料の取扱(571) 経済的活動は天の吝なるより起る(572) 英國の「國民節儉  
野戦」(572) 節儉は唯だ一面のみ(573) 收支適合は一の文化事實なり(573) 以上複説の理中(574) 文化  
的要素の意義(574) 國家を以て例示す(575) 経済生活の文化的要素(576) 文化要素にも自然的方面  
あり(576)

## 第二十三章 労働の意義……………五七七—六〇六

労働とは骨の折れることの謂(577) 苦痛を伴ふ力作(578) 苦痛とは主観的の感情(579) 遊戯と労働(580)  
生理的苦痛は兩者に共通(587) 生理的苦痛と心理的苦痛(582) 在內目的と在外目的(583) ジェヴォ  
ンス氏労働の定義(583) セーの定義(584) 労働は努力なり(584) 樂其外に在り(585) 富士登山客と強  
力の例(587) 労働は目的行爲なり(588) 在外目的と苦痛(587) 力作は必ずしも人の厭ふ所に非ず(588)  
労働に伴ふ苦痛の特色(589) 在外の目的は賃銀(583) 苦痛と賃銀の交換(590) 賃銀は利用、苦痛は  
費用(590) アダム・スミスの言「労働は最初の代價なり」(591) ロビンソン・クルソーの一例(592)  
今日の生活も理は同じ(592) 労働を代價と云ふ意味(593) 得る利用が忍ぶ苦痛より大なるを要  
す(593) シーガラの圖解(594) ジェヴォンスの圖解(595) 労働も必竟は一の流通行爲(597) 労働は價值  
の唯一の形成分なりと云ふ謬説(598) マルクスの「労働即價值」の論(599) 冠履顛倒の論(600) 労働

は價値の源に非ず、價値が労働の源なり(600) マルクスの自家撞著(601) 費用對利用の理に支配  
せらる(602) 費用は價格の一要素に過ぎず(603) 費用は供給の側の一要素のみ(603) リカルドの明  
解(604) 費されたる労働は過去に屬す(604) 労働の價値は生産品の價値に依る(605) 労働偏重の誤  
に陥る可からず(605)

## 第二十四章 労働の種類……………六〇七—六三八

無用なる種類分けあり(607) 精神的労働と肉體的労働の別(607) 肉體的労働者も全心を傾注する  
こと多し(608) 精神的労働にも心を勞せざるものあり(608) 實際上重要ならざる區別(609) 指導的  
労働と執行的労働の別(609) 労働は皆執行的なり(610) 労働より創意を奪ひ去れる今日の産業組  
織(611) 従つて苦痛を増大す(612) 向後労働問題解決上の一要点(612) 獨立労働と雇傭労働の別(613)  
獨立労働は殆んど存せず(613) 労働對企業の問題(614) 精練労働と不精練労働の別(614) 労働には  
必ず多少の熟練を要す(615) 特殊技能の要否(616) 轉業の難易(616) 之に對する待遇の厚薄(617) 必要  
の程度甲乙す可からず(617) 労働の要否は労働者の要否とは異なる(618) 機械の及ぼす影響(619) 需  
要増減の問題(620) 精練労働の需要減ず(620) 不精練労働の需要亦た減ず(621) 進歩の爲めの犠牲(621)  
偏重偏輕憂ふ可し(622) 英獨學者の見解(623) 右の實現に要する條件(623) 生産的労働と不生産的  
労働の別(624) 不生産的と云ふは輕視の意を免れず(624) 物質的富の生産的・不生産的(624) 右の

解釋非なり(626) 労働は皆生産的なり(625) マーシャルの説(627) ミルの説(627) 著者の斷案(628)

## 第二十五章 労働力の大小………六三九—六三九

労働は資本より重し(629) 蓄積の富と毎年の所得(629) 富國とは所得の大なる國の謂(630) 労働力の  
の大なることが第一の要件(631) アダム・スミス國富論の立點(631) 大資本國よりも大労働國  
(632) 労働力を定むる條件表解(633) 數量上の要件・人口總數及年齢別(631) 人口の體性別(635) 人口  
の健康別(636) 品質上の要件(636) 技術は熟練を非人格化する(636) 有機より無機へ(637) 教育の重要(638)  
傳統の關係(638) 最も肝要なる條件(639)

## 第二十六章 労働能率(効程)の根本要件………六三九—六七七

労働能率は國富の源泉(639) 『科學的經營法』の流行(640) 『労働經濟論』今昔の感(641) 『効程』及『能  
率』の字義(641) 例を以て説明す(642) 労働能率の第一次條件(643) 力作とは熱を變じて働きとす  
ること(644) 物質と運動(644) 動態と靜態(645) 現勢力と潜勢力(645) 現勢力の一形態たる熱と働き(646)  
働きの單位、熱量の單位(647) 勢力不滅の法則(647) 有機體及び有機作用(648) 人體の生産的經濟(649)  
人間一日の物質收支の比較(649) 人體は自ら熱を作り出す(651) 熱を作るには何かを燃す必要あ

り(652) 物質の補填即ち營養(653) 人體の要する熱量(654) 人體の要する熱量比較表(654) 労働は營養  
中の潜勢力を現勢力に變ずる行程(655) 營養が能率の最 本的要件(656) 次には労働時間(656) 時  
間の過長は能率を低下す(657) 此の原理經濟界に無視せらる(658) 馬匹に就ての一例(658) 人馬に  
劣る(659) 労働時間長き所勞銀亦た低し(661) マルクスの言(661) 英・獨・瑞・米能率の比較(661) 米・  
白營養及時間の比較(662) 一大矛盾行はる(663) 奴隸時代には此矛盾却つて存せず(663) 矛盾の起  
る所以(664) マルクスの極論(665) 向上の曙光(666) 矛盾一掃の急務(666) 謬れる學說の由來(667) 二個  
の謬説(667) 勞銀と能率に關する謬説(668) 右説の正しき場合もあり(668) 通理は之に反す(669) アダ  
ム・スミス謬説を一掃す(671) マカロック及シーニョア之を祖述す(670) 労働の價は常に同じ(671)  
其の後の研究(672) 生理の通則を裏書す(673) 我邦に行はるゝ謬想(674) 其妄を辯ず(674) 能率増進一  
切の根柢(675) 労働時間と能率に關する謬説(676) 學者の謬説(676) 謬想の根柢を要す(677)

## 第二十七章 労働時間と能率………六七八—七三五

休息、睡眠の必要(678) 休息の必要は人間の弱點にあらず長所なり(678) 人體と機械(679) 休息の  
必要なる三個の理由(680) 第一、體內物質の消耗に限度あり(680) 第二、消耗の補填は労働中に  
は行はれず(681) 第三、疲勞を醫す必要(682) 標準労働時間(682) 經濟上の實驗(684) ツァイス工場  
の實例(684) ツァイス工場に於ける時間短縮前後の比較表(686) 我邦企業家の現在(687) 労働者の側

に於ける謬想<sup>(688)</sup> マルクスの謬説<sup>(688)</sup> 暴を以て暴を制す<sup>(689)</sup> 學説は不偏不黨ならざる可から  
 ず<sup>(689)</sup> マルクスの謬説を根本的に打破するの急要<sup>(690)</sup> マルクス説の要領<sup>(692)</sup> 必要的労働時間  
 と餘剰労働時間<sup>(692)</sup> 絶對的餘剰價值と相對的餘剰價值<sup>(693)</sup> 絶對的餘剰價值の説明<sup>(693)</sup> 餘剰價  
 値率<sup>(694)</sup> 一日の労働時間<sup>(695)</sup> マルクスの出立點<sup>(695)</sup> 相對的餘剰價值の説明<sup>(693)</sup> マルクスの説と  
 シーニョアの最終時間説<sup>(696)</sup> マルクスの根本的誤謬<sup>(699)</sup> マルクスの二前提<sup>(700)</sup> 労働力の價值<sup>(700)</sup>  
 労働の價值<sup>(702)</sup> マルクスの非難當れり<sup>(703)</sup> リカルドは夙に之を看破せり<sup>(703)</sup> リカルドはデレ  
 マに陥る<sup>(704)</sup> マルサス終にリカルドに勝つ<sup>(705)</sup> 労働の生産費、労働力の生産費共に無意義な  
 り<sup>(706)</sup> 労働の價值の正しき解釋<sup>(707)</sup> 一般商品と労働との根本的差違<sup>(707)</sup> 労働の價值は労働時  
 間に反比例す<sup>(708)</sup> 労働の高は時間に反比例す<sup>(709)</sup> 右に對するマルクスの解釋<sup>(709)</sup> マルクスの  
 捻出したる大矛盾<sup>(710)</sup> 矛盾を指摘すれば<sup>(711)</sup> 労働の價值と時間との反比例は生理の原則より  
 起る<sup>(711)</sup> 労働時間長短の意味を誤解す可からず<sup>(712)</sup> マルクス餘剰價值説の批評<sup>(712)</sup> (甲)絶對  
 的餘剰價值説<sup>(713)</sup> 能率は時間に正比例すと云ふ前提<sup>(713)</sup> 労働力の價值を一定不變なりとする  
 は誤なり<sup>(714)</sup> 労働時間と労働物とを混同す<sup>(714)</sup> (乙)相對的餘剰價值<sup>(717)</sup> 生活必要品の價の  
 下落は労働の下落を伴ふと云ふ説<sup>(717)</sup> マルクス謬説の根柢は時間と能率の關係を誤るに在  
 り<sup>(718)</sup> 社會主義者も資本家も共に誤れり<sup>(719)</sup> 時間短縮が能率増進を喚起すに要する前提<sup>(719)</sup> 力

の支出と其恢復<sup>(720)</sup> アッペの斷案<sup>(721)</sup> 時間短縮に關する異論<sup>(721)</sup> 第一の必要條件<sup>(722)</sup> 其他の必  
 要條件<sup>(722)</sup> 労働時間の制限<sup>(723)</sup> 我邦工場法の規定<sup>(721)</sup>

### 第二十八章 労働能率の第二次要件並に労働最能

限率……………七三五—七九三

本章の問題<sup>(726)</sup> 平面的陳列は無意味なり<sup>(726)</sup> 手近き例を以て説明す<sup>(727)</sup> 第二次要件に重要劣  
 る<sup>(728)</sup> 氣候の影響<sup>(728)</sup> 微妙なる體溫調節作用<sup>(729)</sup> 氣候の關係偏重す可からず<sup>(730)</sup> 遺傳の關係<sup>(730)</sup>  
 労働心の強弱を々配する條件<sup>(731)</sup> 學者の説<sup>(731)</sup> 平面的陳列たるを免れず<sup>(732)</sup> 津村博士説を  
 評す<sup>(732)</sup> 労働の欲と名譽<sup>(733)</sup> 労働者の利害の念<sup>(734)</sup> 難者に答ふ<sup>(735)</sup> 労働心の測定<sup>(735)</sup> 労働全  
 收權論<sup>(737)</sup> 歸着する所は労働と時間<sup>(738)</sup> 労働の最能限率<sup>(739)</sup> 其の意義及び單位<sup>(740)</sup> 一日労働  
 時間過少なる可からず<sup>(741)</sup> 労働全收率と實際の割合<sup>(741)</sup> プッフ氏の測定算式<sup>(742)</sup> 其の説明、  
 全收率を得る場合<sup>(743)</sup> マルクスの研究に基く計算<sup>(743)</sup> 時間能率の計算<sup>(745)</sup> 右算式と實際の事  
 實<sup>(746)</sup> 向後研究の要<sup>(747)</sup>

### 第二十九章 労働制度……………七四七—七九三



社會的事實としての勞働<sup>(747)</sup> 社會的事情と能率<sup>(748)</sup> 社會的關係の二種<sup>(748)</sup> 勞働は社會的關係の下に營まる<sup>(749)</sup> マルクスの勞働行程三要件論<sup>(749)</sup> 勞働目的及び原料<sup>(750)</sup> 勞働要具<sup>(750)</sup> 生産要具<sup>(751)</sup> 勞働行程とは天然と人間との間の行程なり<sup>(751)</sup> マルクスの價值行程論不十分なり<sup>(751)</sup> 勞働の社會行程は資本制社會に限らず<sup>(752)</sup> 餘剩價值を掠奪物と見るは誤<sup>(753)</sup> 勞働制度の實義<sup>(754)</sup> 勞働制度の内容<sup>(754)</sup> 右の説明<sup>(755)</sup> マルクスの言理あり<sup>(755)</sup> 勞働制度は勞働の販賣事情<sup>(755)</sup> 勞働販賣に特有なる現象<sup>(757)</sup> 勞働種類の決定<sup>(758)</sup> 勞働條件の決定<sup>(758)</sup> 報酬の決定<sup>(759)</sup> 勞働期限の決定<sup>(759)</sup> 勞働制度の種類<sup>(759)</sup> 非自由勞働制度<sup>(760)</sup> 奴隸制度<sup>(760)</sup> 奴隸制度必ずしも殘忍一方のみならず<sup>(761)</sup> 奴隸制度にも種々あり<sup>(762)</sup> 奴隸制度は能率甚だ低し<sup>(762)</sup> マルクスの引例<sup>(763)</sup> 半奴隸制度<sup>(764)</sup> 自由勞働制度<sup>(764)</sup> 自由、對等の關係を前提とす<sup>(765)</sup> 勞働は契約關係<sup>(766)</sup> 民法の雇傭契約<sup>(766)</sup> 勞働報酬に關する規定<sup>(767)</sup> 勞働の期限に關する規定<sup>(768)</sup> 勞働條件に關する規定<sup>(769)</sup> 賃銀制度に關する規定<sup>(770)</sup> 勞働者は勞働を前渡するものなり<sup>(771)</sup> 獨逸民法の規定<sup>(772)</sup> 瑞西新債務法の規定<sup>(772)</sup> 勞働者保護に關する規定<sup>(774)</sup> 公法上の諸規定<sup>(775)</sup> 今日の私法規定不十分なり<sup>(776)</sup> 經濟上の實質は更に劣る<sup>(777)</sup> プレンタノ先生の勞働關係論<sup>(777)</sup> 勞働問題の起る所以<sup>(778)</sup> 勞働と商品と異なる點<sup>(779)</sup> 勞働給付は人格を拘束す<sup>(780)</sup> 勞働供給調節の困難<sup>(780)</sup> 雇主は強者、勞働者は弱者<sup>(782)</sup> 矛盾一掃の急要<sup>(782)</sup> 契約自由の原則破る可からず<sup>(783)</sup> 要は眞正の自由、對等の實現<sup>(784)</sup> 團結

は力なり<sup>(785)</sup> 團結の自由<sup>(785)</sup> 更に一步を進む<sup>(786)</sup> 協約勞働制度<sup>(787)</sup> 勞働協約の説明<sup>(788)</sup> 協約制度の缺點<sup>(789)</sup> 協約主義の普及<sup>(791)</sup> 協約に關する法律上の規定<sup>(791)</sup> 契約より協約へ<sup>(792)</sup> 契約より協約へ<sup>(792)</sup>

### 第三十章 勞働の組織……………七九三—八五六

本章の問題<sup>(793)</sup> 分業論の由來<sup>(793)</sup> 『國富論』以前の分業論<sup>(794)</sup> スミスの分業論は他人の説を取ったりとの説<sup>(795)</sup> 『蜜蜂物語』の分業論<sup>(796)</sup> スミス以後の分業論<sup>(797)</sup> マルクス新紀元を開く<sup>(798)</sup> マルクス分業論の着想<sup>(799)</sup> 資本主は絶對價值を目的とせず餘剩價值を目的とす<sup>(800)</sup> 資本主が能率増進を欲する動機<sup>(800)</sup> マカロック等の言<sup>(801)</sup> 能率増進の手段としての協業<sup>(801)</sup> 協業と資本制組織とは因縁深し<sup>(802)</sup> 分業論の二大典型<sup>(803)</sup> マルクス以後の分業論<sup>(804)</sup> シュモラー分業論の弱點<sup>(804)</sup> ブニヒアー勞働組織論を大成す<sup>(805)</sup> 勞働組織の分類<sup>(806)</sup> 勞働の組織と土地の耕作法<sup>(808)</sup> 分量的不調和と品質的不調和<sup>(809)</sup> 分量的不調和の第一種<sup>(809)</sup> 分量的不調和の第二種<sup>(810)</sup> 兼業と協業の異なる點<sup>(811)</sup> 分業的産業と合業的産業<sup>(811)</sup> 兼業の實例<sup>(812)</sup> 手工業の兼業<sup>(813)</sup> 我邦の例<sup>(813)</sup> 兼業は今日も絶えず<sup>(814)</sup> 協業の意義及其の種類<sup>(815)</sup> 社交協業の説明<sup>(816)</sup> 蠻民の共同作業場<sup>(817)</sup> 曹族阿里山蕃の集會所<sup>(817)</sup> 臺東廳ブニマ族の集會所<sup>(818)</sup> 其の他の臺灣蕃族間に於ける集會所<sup>(819)</sup> 怠惰を戒むる作用<sup>(820)</sup> 社交協業の効果<sup>(821)</sup> 集業の説明<sup>(821)</sup> 花蓮港廳アミス族の勞働共済組織<sup>(822)</sup> 頼まれ仕事と響應<sup>(823)</sup> 集業は粗末なる勞働に行はる<sup>(825)</sup> 單純集業と連鎖

集業<sup>(820)</sup> 連鎖集業の種類<sup>(826)</sup> 交調連業<sup>(826)</sup> 労働と韵律<sup>(827)</sup> 同調連業と交調連業との比較<sup>(828)</sup> 結  
 合協業の説明<sup>(829)</sup> 結業の實例<sup>(829)</sup> 結業に於ける労働者の從屬關係<sup>(830)</sup> 結業も技術の進歩に従  
 ひ漸く廢る<sup>(831)</sup> 兼業も協業も資本乏しき時代に行はる<sup>(831)</sup> 品質的不調和を取除く必要起る<sup>(832)</sup>  
 資本時代起る<sup>(833)</sup> アダム・スミスの分業論の要點<sup>(833)</sup> ビン製造の例<sup>(834)</sup> 第二種の例<sup>(835)</sup> 分業の  
 利益三ヶ條<sup>(836)</sup> 第一、熟練を増す。釘製造の例<sup>(837)</sup> 第二、時間の浪費を省く<sup>(837)</sup> 第三、機械の  
 發明、労働の節約<sup>(837)</sup> 分業の起源は人間の天性に存す<sup>(838)</sup> スミス分業論の三弱點<sup>(838)</sup> 分業の  
 概念明かならず<sup>(839)</sup> 三種の分業を同一視す<sup>(839)</sup> プヒアアの補正説<sup>(840)</sup> 分業の意義を明かに  
 す<sup>(840)</sup> 分業に五種あり<sup>(842)</sup> 職業分業の説明<sup>(842)</sup> 奴隸制度と關係あり<sup>(843)</sup> 我邦上古の『部』<sup>(844)</sup> 生  
 産、消費漸く分立す<sup>(845)</sup> 專業分業の説明<sup>(845)</sup> 生産分業の説明<sup>(846)</sup> 企業發生を促す<sup>(848)</sup> 作業分  
 業起る<sup>(848)</sup> 『マニユファクチュア』と工場の異同<sup>(848)</sup> 『ミル』と云ふ英語<sup>(848)</sup> 作業分業のみが分  
 業に非ず<sup>(849)</sup> 作業分業が分業中の分業たる理由<sup>(850)</sup> マルクスの道破したる其必然的前提<sup>(851)</sup> 移  
 動分業の説<sup>(851)</sup> 分業の起源は能率増進の必要に在り<sup>(852)</sup> 作業分業は雇傭労働を前提す<sup>(853)</sup> 作  
 業分業の發達と労働者人格の拘束<sup>(854)</sup> スフキンクスの謎<sup>(855)</sup> 謎の解答果して如何<sup>(855)</sup> 残る所  
 の大問<sup>(856)</sup> 先づ資本と組織との研究<sup>(857)</sup>

第六編 資本及組織……………八五九—一三四八

第三十一章 資本の意義及本質……………八五九—九七八

資本本來の意義<sup>(859)</sup> 資本は猶母の如し<sup>(860)</sup> 利息を離れて資本なし<sup>(861)</sup> 子を生まぬ女・利息を  
 生まざる富<sup>(861)</sup> 利息は化して資本となる<sup>(862)</sup> 資本利息を生むか・利息資本を生むか<sup>(862)</sup> 常に  
 止まらざる利潤の運動<sup>(863)</sup> 資本は土地労働とは大に異なる<sup>(864)</sup> 生産要素としての資本の特別な  
 る地位<sup>(864)</sup> マルクスの説不十分なり<sup>(865)</sup> 特別な働は流通上に存り<sup>(865)</sup> 土地と資本との比較<sup>(866)</sup>  
 労働と資本との比較<sup>(867)</sup> 文化現象としての労働と資本<sup>(869)</sup> マルクスの解説<sup>(870)</sup> 資本の本質は  
 純文化的なり<sup>(871)</sup> 生産要素の異同比較<sup>(872)</sup> 右の説明<sup>(873)</sup> 地代は地面より生ぜず<sup>(875)</sup> 絶對的生  
 産要素と相對的の生産要素<sup>(875)</sup> 絶對的範疇・相對的範疇<sup>(876)</sup> 資本は決して絶對的範疇に非ず<sup>(877)</sup>  
 異論を排す<sup>(877)</sup> 労働の補助を資本の本質とする説<sup>(878)</sup> 右説は誤謬なり<sup>(879)</sup> 例を以て説明す<sup>(879)</sup>  
 アダム・スミス此理を看破す<sup>(880)</sup> 資本は生産せられたる生産要具なりとの説<sup>(881)</sup> 通説の資本  
 の定義<sup>(881)</sup> 右の定義謬れり<sup>(883)</sup> 資本なる語の實際上の用法<sup>(884)</sup> 經濟學之を轉用す<sup>(886)</sup> 資本意義  
 轉用の三期<sup>(886)</sup> 轉用の第一期<sup>(888)</sup> 轉用の第二期<sup>(889)</sup> バーボン及ヒニームの資本論<sup>(890)</sup> チュルノー  
 の資本論<sup>(891)</sup> 轉用の第三期<sup>(892)</sup> スミス説の長所<sup>(893)</sup> スミス説の短所<sup>(894)</sup> スミスの短所累を爲す<sup>(895)</sup>  
 資本概念紛亂の原因<sup>(896)</sup> 資本は生産す、故に利息を生ずと云ふ謬説<sup>(898)</sup> 兩觀 混同す可から  
 ず<sup>(899)</sup> 備を作るものはセーなり<sup>(899)</sup> スミスの短所は恕す可き事情あり<sup>(900)</sup> 協業を可能ならし

むるものは資本なり<sup>(901)</sup> スミス之れを看破す<sup>(902)</sup> 資本のみにては生産は起らず<sup>(902)</sup> スミス以後の學者之を忘る<sup>(903)</sup> 兩頭の蛇<sup>(904)</sup> 資本生産力説と資本収益力説<sup>(905)</sup> マルクス蛇の兩頭を挫斷す<sup>(906)</sup> マルクス『資本論』の成る所以<sup>(907)</sup> メンガーの資本論一頭地を抜く<sup>(907)</sup> マルクスとメンガーの差異<sup>(908)</sup> ボエム・バヴェルクの資本論<sup>(910)</sup> クラークの説<sup>(911)</sup> ボエム・バヴェルク説の功過<sup>(912)</sup> 資本を財の蓄積なりとする謬想<sup>(914)</sup> 實際生活に於ける資本の觀念<sup>(915)</sup> 株式會社に於ける一例<sup>(916)</sup> 富と資本とを同一視する誤謬<sup>(917)</sup> 限局せられたる財の蓄積<sup>(917)</sup> ジェヴォンスの奇抜なる資本論<sup>(915)</sup> 通説と右説との比較<sup>(919)</sup> ジェヴォンスとマルクスの默契<sup>(920)</sup> ジェヴォンス説捨つ可からず<sup>(921)</sup> 通説維持し難し<sup>(922)</sup> ボエム・バヴェルクの價值時差説<sup>(923)</sup> 右説は生産力説の維持し難きを示す<sup>(925)</sup> 時差説の積極的効績は認め難し<sup>(926)</sup> 収益と生産とは必しも相伴はず<sup>(927)</sup> 國民經濟的資本必ずしも生産せず<sup>(928)</sup> 資本の補助的任務の謬想<sup>(929)</sup> 生産を補助するものは財の蓄積なり資本に非ず<sup>(931)</sup> 單に現在に於て一致するのみ<sup>(932)</sup> フィッシャーの復古的資本論<sup>(933)</sup> 資本たるや否やは主觀的にのみ定めらる<sup>(934)</sup> 従つて具體的列擧は無意味<sup>(933)</sup> 例を以て説明すれば<sup>(936)</sup> ミルの資本區別論<sup>(937)</sup> 財の蓄積ならざる資本<sup>(938)</sup> 生産の用の眞意<sup>(939)</sup> 貨幣價値に見積らるゝ利用<sup>(940)</sup> 資本と私有財産制度<sup>(942)</sup> 貨幣は資本に非ず<sup>(943)</sup> 資本には數量的増減あるのみ<sup>(944)</sup> マルクスの語を以て言へば<sup>(945)</sup> 實際の事實を以て説明す<sup>(945)</sup> 貨幣價値額の

増殖が資本の本質<sup>(947)</sup> 換言すれば利殖即ち資本の本質<sup>(948)</sup> 利殖と生産<sup>(949)</sup> 利殖本位の經濟組織<sup>(949)</sup> 今日生産を利殖の附帶事實とす<sup>(951)</sup> 生産資本なるもの無し<sup>(951)</sup> 資本は必ず私有財産なり<sup>(952)</sup> 私有財産なければ資本なし<sup>(953)</sup> 國有財産も私有財産なり<sup>(954)</sup> 私有財産の二種<sup>(954)</sup> 營利財産の意義<sup>(955)</sup> 貨幣價値見積りの可能・不可能<sup>(956)</sup> 富の増殖の眞義<sup>(958)</sup> 富の増殖は多くは一部の<sup>(958)</sup> 社會的資本の増殖なし<sup>(961)</sup> 資本に下す最終の定義<sup>(961)</sup> 財産と云ふこと<sup>(961)</sup> 財産は即ち能力<sup>(962)</sup> 無能階級と有能階級<sup>(963)</sup> 財産の能力は實物に非ず<sup>(963)</sup> オッペンハイマーの説<sup>(964)</sup> マルクス説を評す<sup>(965)</sup> マルクス説の修正<sup>(966)</sup> 資本生産力の眞相<sup>(967)</sup> 此働きは今日の資本組織に必然的なり<sup>(968)</sup> 資本は協業を可能ならしむ<sup>(968)</sup> 資本たらざる生計維持資料<sup>(969)</sup> 資本の指導・監督<sup>(970)</sup> 例を以て説く<sup>(971)</sup> 資本主任務の代理者<sup>(972)</sup> 何故に資本主は引率者たりや<sup>(972)</sup> 資本の偉大なる能力<sup>(973)</sup> マルクスの説明<sup>(975)</sup> 此状態は萬古不易に非ず<sup>(975)</sup> 可能なる變化<sup>(976)</sup> 資本と労働との主客顛倒<sup>(977)</sup>

### 第三十二章 資本の起源・増殖及種類……………九七九—一〇三五

資本化と資本形成<sup>(979)</sup> 賃貸資本・信用資本・企業資本<sup>(979)</sup> 資本起源の二要點<sup>(980)</sup> 資本は貯蓄より起るとの説<sup>(981)</sup> 此説アダム・スミスに起る<sup>(981)</sup> 右説より生じたる謬想<sup>(982)</sup> 貴ぶ可きは勞働にして資本に非ず<sup>(983)</sup> 唯物觀の弊害<sup>(984)</sup> 資本は貯蓄より起らず資本より起る<sup>(985)</sup> 外資輸入論

の看過せる點(986) 資本化の心理的要素(987) 貯蓄の眞意義(987) 資本は營利の機會の増進より起る(988) 營利の機會の増進必ずしも最善ならず(989) 過資本化の弊害(989) 資本化の行程(990) 資本循環行程に關する諸説(991) マルクスの資本循環行程論(992) 資本循環行程の公式(994) 資本の回轉時間(995) 生産時間と流通時間(995) 労働時間(995) 回轉時間長短の論争(996) 資本の種類 固定・流通兩資本の別(997) アダム・スミスの説明(998) スミス説の轉化(1000) マルクスの修正説(1001) 生産行程を標準とする區別非なり(1002) 價値の消費(1003) 寧ろ價値の回收(1004) スミス説反つて取る可し(1004) 生産は資本のみにては起らず(1005) マルクスの不變・可變兩資本の區別(1006) 右説の略評(1007) 其理由の大要(1008) 収益は地面より生ぜず社會より生ず(1009) 不變・可變資本説の取る可き場合(1010) マルクス説とスミス説の接近(1011) 固定・流通兩資本の別寧ろ捨つ可し(1012) 獨立・從屬兩資本の區別(1013) 融通・不融通兩資本の區別(1014) 投下・經營兩資本の區別(1014) 最も重要な區別(1015) 循環行程に對する關係より區別す(1016) 商品取引資本(1017) 商品取引資本獨立の二方法(1017) 其の利と其の弊(1018) 貨幣取引資本(1019) 利付資本(1021) 貸貸(利付)資本と企業資本(1021) 企業資本の特色(1022) 貸貸資本及信用資本の特色(1023)

### 第三十三章 經營の大小 …………… 一〇二六—一〇四一

組織中心の經濟生活(1026) 營利の組織(1026) 營利の組織と作業の組織(1027) 經營の形態と企業の形

應(1027) 規模の大小より見たる經營の分類(1028) 從業者數による區別(1028) 耕作面積による區別(1031) 經濟的實質より見たる區別(1033) 其の理由(1033) 經營單位と所有單位(1034) 大所有は却つて害あり(1036) 所有は砂漠を化して樂園となす(1037) 土地は死物に非ず(1038) 中・小農の必要(1039) 畜産に就ての一例(1040) 經營を大にし所有を小にす(1040) 工業に就ては大經營(1042) 大經營の適せざる工業(1042) 大經營の普及悲觀を要せず(1043) 所謂小工業の保護(1044) 商業に於ける經營の大小(1044) 小賣業者過多なり(1045) 鎖國時代の産物(1046) 小賣組織改善の必要(1047) 丁稚制度廢す可し(1047) 小賣業の前途(1049) デパートメント・ストアの弊(1050) 經營大小研究の必要(1050)

### 第三十四章 經營の形態及其發達 …………… 一〇五一—一〇九

ゾムバルトの分類(1051) 右説を評す(1052) フェヒアアの分類(1053) 賃仕事(1054) 出仕事と宅仕事(1055) 工業(1056) 手工業は親方工業(1057) 手工業者の組合(1059) 我邦の座(1061) 徳川時代の組合・仲間(1061) 所謂我邦特有の工業状態(1062) ギルドの起る所以(1063) ギルドの起源(1063) ギルドの全盛(1064) ギルドの末期(1065) 京都に於ける組合の實例(1066) 江戸に於ける組合の實例(1068) 大阪に於ける組合の實例(1069) 左官業に就ての實例(1070) 鑄物師及髮結職の文書(1071) 商業の組合・問屋(1071) 家内工業起る(1072) 前貸制工業(1073) 即ち資本的工業經營(1073) 我邦は其實例に富む(1075) 家内工業の特色(1077) 家内工業以前に企業なしとの説(1077) 此説マルクスより出づ(1079) ソ氏の説必ずしも妥當ならず(1080) ソ氏説

に基く論争(1080) 家内工業と名くる所以(1081) 我邦の用語精確ならず(1082) 家内工業の問題(1083) 苦汗  
 制度(1085) マニユファクチュア起る(1086) 其特色(1087) マニユファクチュアと工場との異同(1088) 散  
 居式より集居式への進化(1089) 二種の起源(1090) 織物業を以て例示す(1091) 技術上統一の利益(1092) 我  
 邦はマニユファクチュアを缺く(1093) 西洋にても寧ろ短期の現象(1094) 工場工業(1094) 大體に於て  
 妥當なる我工場法の規定(1096) 工場の學問上の意義(1097) 工場なる名稱の由來(1098) ユーアの解説(1100)  
 工場制度二様の定義(1100) 從屬的協業(1101) 機械と原動力(1103) 有機力よりの解放(1104) 經濟的中心  
 原動力(1106) 産業革命の動因(1106) マルクスの卓見(1107) 經營形態より企業形態へ(1108)(1104)

第三十五章 經營と企業……………二〇九—二二八

ゾムバルト問題を提出す(1109) ソ氏說マルクス説に劣る(1110) 作業の組織・價值増殖の組織(1110) 關  
 博士の說(1111) ソ氏說の重きを置く點(1111) 勞働行程(1112) 使用價值と交換價值(1113) 價值回收の行  
 程(1113) 價值増殖の行程(1114) ソムバルトと右說を敷衍す(1115) 右に對する私見(1116)(1113) 在內目的・在  
 外目的を以て分つ(1117)

第三十六章 企業の形態及其發達……………二二八—二四三

二種の大分類(1118) 區別の標準(1119) 企業の主體は單位(1120) 團集企業の細別的形態(1120) 個人企業の

方古し(1121) 企業の起源(1122) 家長企業・君主企業(1123) 合名會社の成立(1124) 合資會社の成立(1126) 其  
 他の會社(1127) 代表的なるは個人企業と株式會社(1128) 個人企業の株式會社改造(1129) 株式會社と  
 個人企業との適不適(1129) 純粹の商業は株式會社に適せず(1130) 株式會社に適する企業(1131) 工業  
 と株式會社(1132) 農業と株式會社(1133) 漁業と株式會社(1133) 奇妙な株式會社(1134) 各種會社形態の比  
 較(1134) 各國に於ける各形態の分布(1135) 有限責任・無限責任(1137) 資本・勞働の出資關係(1138) 人格  
 會社(1139) 資本會社(1140) 單なる資本の集りに非ず(1141) 合資會社は經濟上にも間の子(1141)(1138) 株式  
 合資會社は無用の長物(1142)

第三十七章 株式會社の本質・起源・機關・任務及利

害……………二四三—二五七

株式會社研究の必要(1143) 法律に偏せり(1144) 法律は有限責任を最重要視す(1145) 法律上の株式會  
 社(1145) 我商法の規定(1146) 沿革上の有限責任(1147) 形式に過ぎず本體に非ず(1149) 經濟上より見たる  
 有限責任(1150) 萬一の場合の債權者保護(1152) 家族會社と有限責任(1153) 消極的作用(1154) 大株主と小  
 株主(1155) 要は多數の小資本を集めんが爲(1156) 變態會社は虚偽の株式會社なり(1156)(1154) 株式資本の  
 特殊なる冒險(1157) 今日と雖も理は同じ(1158) 法律は經濟上の實質の反面を表はす(1159) 形式に拘

泥するより起る誤 (1161) 聖チヨルヂヨ銀行と其『マオナ』 (1162) 債権者の團體 (1163) 希臘の租稅請負團 (1165) 羅馬のソチエタス・プブリカノールム (1166) 其の仕組 (1167) 形式は似たり (1168) 羅馬には今日の勞働の觀念なし (1169) エンデマンの説 (1171) 株式會社の實を缺く (1172) ソチエタスは會社に非ず (1172) マオナの語に囚はる (1174) コムメンダを株式會社とする説 (1174) 鐵山・船舶共有團體 (1175) 種々の起源説 (1176) 均一分割の事實は昔より有り (1178) 更に言葉の上より見れば (1179) 株式制度は和蘭に起る (1180) 利子券と利潤券 (1181) 利潤券の本質 (1182) アクチは利潤券 (1183) 利潤券の起り (1184) 特殊危険を冒す企業 (1185) 株式の自由買買 (1186) 上田博士の説 (1186) 利潤券に必須の條件 (1187) 所謂重役制度 (1188) 和蘭式と佛蘭西式又は團體式と法人式 (1189) 所謂企業任務の分割 (1190) リーフマンの説 (1191) 株主總會 (1191) 誰が企業者なりや (1192) 株主か重役か (1192) 重役が企業者なりとの説 (1194) 株主が企業者なりとの説 (1194) 二者共に企業者なりとの説 (1195) 會社其者が企業者なり (1196) 企業者は自然人たるを要せず (1197) 經濟生活の非人化 (1198) 機關の分掌 (1200) 家計と經營の分離 (1201) 法人格の認承によつて分離全し (1202) 最も純粹なる資本的企業 (1203) 資本の力 (1204) 株式會社と資本組織 (1205) 資本危険の性質の變化 (1206) 資本は人身御供 (1206) 物の冒險より價の冒險へ (1207) 之に應ずる企業の變化 (1209) 他人に託するの危険 (1210) 本質の變化に伴ふ形式 (1211) 投機的となる (1212) アダム・スミスの株式會社攻撃 (1213) 嚴重なる取締 (1214) 資本の動員 (1214) 專制式と民主式 (1216) 大陸式會社も實際は專制政

治 (1217) 企業利潤の民衆化 (1219) 對勞働關係 (1220) 株式會社の弊害 (1222) 資本人を壓す (1224) 愈々無政府 (1224) 株式會社に代はらんとする企業形態 (1226)

### 第三十八章 公企業 附 公經濟及公營造物……………一三七—一三六七

企業に對抗する諸形態 (1227) 其種類三あり (1228) 公企業 (1228) 公法人と營利事業 (1229) 美濃部博士の公企業論 (1229) 右説を評す (1231) 電車賃金の問題 (1232) 電車は公營造物なりとの論 (1232) 行政法學者の議論 (1233) 其經濟上の研究の必要 (1234) 公法人の營む事業。公經濟 (1236) 公經濟の實例 (1236) 無償主義に支配せらる (1237) 實費支辨主義 (1238) 收益主義 (1239) 公經濟と私經濟 (1241) 公法人に私經濟なし (1241) 公法人の經濟の特色 (1242) 不足經營と餘剩經營 (1243) 目的と結果とを混同すべからず (1245) 公企業と公營造物は嚴別を要す (1246) 生硬難澁な譯語 (1246) 美濃部博士の意を忖度すれば (1247) 『アンシユタルト』と『ベトリープ』 (1248) 全體的實費支辨主義 (1249) 公經濟、公營造物、公企業の比較 (1250) 郵便。電信・電話の性質 (1250) 水道の性質 (1252) 鐵道と市街電車 (1253) 交通機關の要素と其本質 (1253) 無償主義が理想なれども實際は然る能はず (1254) 均一主義の漸増 (1255) 手數料主に近づく (1256) 市營電車の性質 (1257) 市營電車と都市社會政策 (1259) 都市社會政策は財源を要す (1260) 其財源として市の市營事業 (1261) 營利企業不可ならず (1261) 公法人の企業寧ろ擴張せん (1262) 之を非とする論 (1263) 公營造物論の弊 (1263) 公企業と私企業 (1264) 兩端の謬想を排す (1265) 公企業價格の觀念を要す (1266)

### 第三十九章 組合の意義・任務及種類……………一三六七—一三〇四

組合企業とは不正確<sup>(1267)</sup> 我産業組合法の規定<sup>(1268)</sup> 獨造の組合法の定義<sup>(1269)</sup> 組合は企業に代らず之を助成す<sup>(1269)</sup> 營利組合と經濟組合<sup>(1270)</sup> 我邦の所謂産業組合<sup>(1271)</sup> 會社企業と組合<sup>(1272)</sup> 組合は企業の一部の事に當る<sup>(1273)</sup> 其特色は合同にあり<sup>(1274)</sup> 獨立人格としての會社と組合<sup>(1274)</sup> 形式上の組合と實質上の組合<sup>(1275)</sup> 一二の實例<sup>(1276)</sup> 生産組合は眞の組合に非ず<sup>(1277)</sup> 組合は寧ろ弱者の合同<sup>(1278)</sup> 資本の要素と人格の要素<sup>(1279)</sup> 會社と組合との區別の標準<sup>(1280)</sup> 人的關係薄ければ組合消滅す<sup>(1280)</sup> 其の實例<sup>(1281)</sup> 組合の責任制度<sup>(1282)</sup> 其の説明<sup>(1283)</sup> 其他の規定<sup>(1284)</sup> 組合と營利<sup>(1285)</sup> 我邦の組合多く其實なし<sup>(1287)</sup> 組合の發達國によつて異なる<sup>(1289)</sup> 英國の消費組合<sup>(1289)</sup> 獨逸に於ける信用組合<sup>(1290)</sup> 佛蘭西に於ける生産業組合<sup>(1290)</sup> 畢竟は實際の必要による<sup>(1291)</sup> 組合の分類<sup>(1291)</sup> 經濟組合の二種類<sup>(1292)</sup> 同業組合のこと<sup>(1293)</sup> 現在の經濟生活に於ける組合の地位<sup>(1294)</sup> 企業組合の種類<sup>(1295)</sup> 借入組合の種類<sup>(1296)</sup> 生産組合のこと<sup>(1297)</sup> 生産業組合のこと<sup>(1298)</sup> 生産組合と生産業組合とは區別を要す<sup>(1298)</sup> 生産組合は頭の產物<sup>(1299)</sup> 其思想の起る所以<sup>(1299)</sup> 當時に於ては無理ならず<sup>(1300)</sup> 百年の經驗其不可能を示す<sup>(1301)</sup> 社會民主黨と生産組合<sup>(1301)</sup> 失敗の理由<sup>(1302)</sup> 重なる三箇條<sup>(1303)</sup> 部分的成功の例<sup>(1304)</sup> 望ある組合<sup>(1304)</sup>

### 第四十章 經濟組合と企業組合……………一三〇五—一三〇七

消費組合の偉大なる發達<sup>(1305)</sup> ロバート・オーエンの爲人<sup>(1305)</sup> 彼の主張<sup>(1307)</sup> 消費組合の起源<sup>(1308)</sup> 其の仕組の概要<sup>(1309)</sup> 現在に於ける消費組合<sup>(1310)</sup> 英國に於ける消費組合<sup>(1310)</sup> 白耳義及獨逸の消費組合<sup>(1311)</sup> 政府の壓迫却つて消費組合を盛ならしむ<sup>(1311)</sup> 獨逸の組合が廉賣主義を取る理由<sup>(1312)</sup> 店舗制と指定商制<sup>(1312)</sup> 懸賣の廢止<sup>(1313)</sup> 獨逸の消費組合聯合會<sup>(1314)</sup> 建築組合の種類<sup>(1315)</sup> 經濟組合の社會的任務<sup>(1317)</sup> 殊に中流階級の福音<sup>(1318)</sup> 企業組合の三種<sup>(1319)</sup> 信用組合<sup>(1320)</sup> 小商工業者の助成<sup>(1321)</sup> 聯帶責任の力<sup>(1321)</sup> シュルツェ・デーリッチ<sup>(1322)</sup> ライフアイゼン<sup>(1323)</sup> 小商工業と小農とは一にし難し<sup>(1324)</sup> 營利的要素の有無<sup>(1325)</sup> 之に伴ふ内容の差違<sup>(1325)</sup> 農業組合聯合會と中央信用組合<sup>(1326)</sup> 組合の機關銀行<sup>(1327)</sup> 重要な一問題<sup>(1328)</sup> 購買組合と販賣組合<sup>(1329)</sup> 我邦の組合製絲<sup>(1330)</sup> 農業に於ける販賣組合<sup>(1331)</sup> 家畜販賣組合<sup>(1332)</sup> 農業に於ける購買組合<sup>(1333)</sup> 自己賣買と依託賣買<sup>(1334)</sup> 其他の農業組合<sup>(1335)</sup> 商工業に於ける購買・販賣組合<sup>(1335)</sup> 其不振の主要原因<sup>(1336)</sup> 人の保護と業の保護とは同じからず<sup>(1337)</sup> 生産要具借入組合<sup>(1338)</sup> 貯藏場共同組合<sup>(1339)</sup> 販賣組合<sup>(1339)</sup> 共同仕入組合<sup>(1340)</sup> 之を要するに<sup>(1340)</sup> 國民經濟組織の將來<sup>(1341)</sup> 營利主義の弊を矯正す<sup>(1342)</sup> 生産的消費者としての對抗<sup>(1343)</sup> 信用組合は過去に屬す<sup>(1344)</sup> 組合制度發達の限界<sup>(1345)</sup> 營利一點張よりの解放<sup>(1345)</sup> 獨占到對する獨占<sup>(1346)</sup> 企業聯合及合同は後日に讓る<sup>(1347)</sup>

人名・書名索引  
件名索引

一八  
九一

三

經濟學全集  
第二集

國民經濟講話 目次終

肖像及挿繪目次

- 一 南露西亞タウリア縣パフロフカ村耕地地圖 (レヴキンスキー氏『財  
産起源史論』より取る) 卷 頭
- 二 英國ヒツチン村耕地圖 (シーボーム氏『英國村落  
共產體史論』より取る) 卷 頭
- 三 同上散圖の圖 (同上) 卷 頭
- 四 大正十一年死亡者男女年齢別圖表 (統計局編纂『日本帝國人  
口動態記述篇』より取る) 七四—七五
- 五 明治四一年末調性別各年齢級死亡率圖表 (統計局編纂『日本帝國人口靜態  
人口動態統計描畫圖』より取る) 七六—七七(前)
- 六 本邦肺結核死亡數及年齢別圖 (統計局編纂『日本帝國人  
口動態記述篇』より取る) 七六—七七(後)
- 七 アダム・スミス (私藏タシ作メダイヨ  
ン複製石膏像を寫眞す) 一五四—一五五
- 八 同母 (武井大助君持  
來私藏寫眞) 一五六—一五七
- 九 飛驒國白川村大家族の圖 (私藏  
寫眞) 一八二—一八三
- 一〇 ジアン・バチスト・セー (『ギョーマン全  
集』より取る) 三〇〇—三〇一
- 一一 ジェームス・ミル (ペーン氏『ミル  
傳』より取る) 三〇四—三〇五
- 一二 ジョン・スチュアート・ミル (『ミル書簡集』  
より取る) 三〇六—三〇七



一三	カール・ブヒアト	(千八百九十八年萊府にて撮影せられたる寫眞)	三三六—三三七
一四	各國人口百中有業者圖	(統計局編纂「抽出方法に依る第一」 「回國勢調査結果の概観」より取る)	三五〇
一五	本邦の職業別人口圖	(同上)	三六〇—三六一
一六	デウキツド・リカルド	(マカロック版「リカ ルド全集」より取る)	四一四—四一五
一七	ルヨ・ブレンタノ	(千九百十三年頃 「撮影私藏寫眞」)	四二八—四二九
一八	耕作法一覽圖		四三〇—四三一
一	第一 野生穀葛耕作法	第二 三圃農法	四四〇—四四一
二	第三 調節穀葛耕作法	第四 改良三圃農法	四四二—四四三
三	第五 改良穀葛耕作法	第六 輪栽農法	四四四—四四五
四	第七 自由農法		四三五
一九	永久牧地、耕地併存法の圖		四三六
二〇	三圃農法説明圖		四三八
二一	交錯圃の圖		四五二—四五三
二二	アンマ・ロベール・ジャック・チュルゴー	(スチーヴンス氏「チュ ルゴー傳」より取る)	四六四—四六五
二三	ヴェルヘルム・ロツシアー	(ポエルマン氏編「ロツシアー」 「經濟原論」第廿二版より取る)	

二四	市場、耕作法關係説明圖		四七七
二五	トマス・ロバート・マルサス	(「ギョーマン全 集」より取る)	四八二—四八三
二六	ウキリアム・ゴドウキン	(ケガン・ポール氏「ゴド ウキン傳」より取る)	四八六—四八七
二七	本邦婚姻、離婚、出生、死亡、死産及出生死亡差増率圖	(統計 局編纂「日本帝國人口動 態記述篇」より取る)	五三一—五三三
二八	カール・マルクス	(私藏マルクス死 去前年の寫眞)	五六二—五六三
二九	ウキリアム・スタンレー・ジェヴオンス	(未亡人編「ジェヴオ ンス」より取る)	五七八—五七九
三〇	各國人口の年齢及體性構成圖	(統計局編「抽出方法による第一回」 「回國勢調査結果の概観」より取る)	六三六—六三七
三一	ウキリアム・ベテリ	(「ベテリ傳」より取る)	六六六—六六七
三二	アーサー・ヤング	(「自叙傳」 より取る)	六六八—六六九
三三	ブラツツセイ	(ヘルプス氏「ブラツ ツセイ傳」より取る)	六七〇—六七一
三四	エルンスト・アッペ	(アウエルバツハ著「ツァイス工場とツア イス財閥誌」(一九〇七年刊)より取る)	六八四—六八五
三五	臺灣バイワン族卑南蕃の共同勞作所(少年公廨)屋内	(臺灣蕃族圖 譜「第一卷第	

三六	同上(左側面全形)(同上)	八二八
三七	同上(正面全形)(同上第一卷 第六十六版)	右 同
三八	ロドベルトス <small>(ロドベルトス著『土地所有現在の信用』 缺乏の釋明及救済』第二版より取る)</small>	八七四—八七五
三九	アドルフ・ワグナー <small>(私藏寫)</small>	八七六—八七七
四〇	トマス・ダキノ <small>(コンウェイ氏『トマス傳』より取る)</small>	八八六—八八七
四一	デヴキッド・ヒューム <small>(バートン氏『ヒューム傳』より取る)</small>	八八八—八八九
四二	ケネー <small>(ラルース『新百科』 字典より取る)</small>	九九〇—九九一
四三	我邦中古の手工業者(其一) 鍛冶職人と其徒弟 <small>(『異本職人畫歌』 合より取る)</small>	一〇五六—一〇五七
四四	同(其二) 壁塗(左官) 職人と其徒弟(同上)	一〇五八—一〇五九
四五	鑄物師文書 <small>(私藏古文 書複寫)</small>	一〇六〇—一〇六一
四六	鑄物師職座法之掟(同上)	一〇六三—一〇六三
四七	英國に於けるギルド會館の典型 <small>(アーミテイチ氏『英國古 代のギルド』より取る)</small>	一〇六四—一〇六五
四八	髮結職分謂所之事 <small>(私藏古文 書複寫)</small>	一〇七〇—一〇七一

四九	ミルの典型 <small>(ハリオーク氏『組 合史』より取る)</small>	一〇九八—一〇九九
五〇	グスタフ・シュモラー <small>(私藏寫 眞複寫)</small>	一一〇〇—一一〇一
五一	千五百九十九年末日英國東印度會社創立總會の光景 <small>(ウキルソン 氏『元帳と 劍』より 取る)</small>	一一二六—一一二七
五二	ジェノア港灣と聖ヂョルヂョ銀行 <small>(私藏地 圖複寫)</small>	一一六〇—一一六一
五三	ジョン・ロー <small>(セルフリッチ氏『商業』 ローマンズ』より取る)</small>	一一二〇—一一二一
五四	フェルヂナンド・ラサルレ <small>(リンダウ編『ラサルレ レ日記』より取る)</small>	一一三〇—一一三一
五五	ロバート・オーエン <small>(シモン氏著『オー エン傳』より取る)</small>	一一三〇—一一三五
五六	世界最古の消費組合店舖 <small>(ハリオーク氏『組 合史』より取る)</small>	一一三〇—一一三七

統計表 目次

一 死亡者男女年齢別(大正十一年)

- 二 東京市の職業分類百分比 三五五
- 三 第一回國勢調査本業者・無職業者及從屬者百分比 三五八
- 四 第一回國勢調査業主・職員及勞務者百分比 三五九
- 五 人口二倍年數算出表 五二一
- 六 歐洲各國及我邦新領土の出生率（一九二二年） 五二二
- 七 人口二倍年數表 五二四
- 八 本邦人口數（『本朝古來戶口考』より載録） 五二七
- 九 全上（『大日本古來人口考』より載録） 五二八
- 一〇 全上（『徳川幕府の米價調節』より載録） 五二九
- 一一 英吉利の人口數（一八〇一—一九二二） 五三〇
- 一二 北米合衆國人口數（一七九〇—一九二〇） 五三二
- 一三 佛蘭西の出生率（一八〇六—一九二〇） 五三四
- 一四 英・獨の出生率（一八四一—一九一六） 五三六

- 一五 澳・匈・瑞・伊・濠・日の出生率（一八七一—一九二二） 五三七
- 一六 歐洲並に本邦の結婚率（一八四一—一九〇五） 五三三
- 一七 濠洲及北米の結婚率（一八六一—一九〇五） 五三四
- 一八 本邦の結婚率（明治十七年—四十三年） 五三四
- 一九 英・獨・佛の嬰兒死亡率 五四八
- 二〇 日・英・獨・佛・米・伊の人口年齢別百分比 六三四
- 二一 獨逸の職業調査による從業者數及經營數（一八八三、一八九五、一九〇七年） 一〇三九
- 二二 本邦耕作地の廣狹による農家戸數分布百分比（大正十一年） 一〇三三
- 二三 本邦耕作地所有者總戸數所有單位・經營單位の百分率（大正十一年） 一〇三六
- 二四 本邦農家數及自作・小作の百分比 一〇四一
- 二五 本邦各種産業組合現在數（大正二年以降十一年迄） 一三八八

國民經濟講話

# 第一卷 總論

## 第一編 序論

### 第一章 今日の文明生活に於ける經濟の意義

#### 立憲政治は豫算政治なり

經濟學の意味は一の學問としてのみで無くして、我々日々の實際生活に重大な關係の有るものであります。殊に今日の立憲政體の下におきましては我々の公の生活も我々の私の生活も、多くの點に於て共に經濟と云ふものを土臺として居ります。第一我々は生れる時に、必ず家即ち家族の中へ生れて來る。其家といふものは一つの經濟上の團體である。家族は倫理上の團體でもあり又道德上の團體でもあります。之と共に家族は經濟上の團體であります。此家族は必ず又國家の下に在つて初て存在して行くことが出來

るのであります。國家と云ふものは統治の組織であると共に、一つの經濟の團體であります。殊に立憲政體と云ふのは、此國家の運用を經濟と云ふことを土臺として行く處の一つの政體であります。立憲政治に於て何が一番肝要な問題であるかと言へば、豫算即ち是である。新聞を御覽になると何時も議會の開會の時に、豫算の問題が議會に關する議事の大部分を占めて居る。豫算の討議が終つて了ふと、議會は最早旬を過ぎて了つて居る、跡は議會が有つても餘程注意が減じて来る。議會に於て大問題が起るとなれば、それは必ず豫算に關聯した問題です。國の政府の政策の當否を判定するのも、先づ豫算に於て捉へるのであります。反對黨と政府黨と争ふ時でも、他の事でも争ひますけれども、他の事の争ひは死命を制すると云ふ譯にいかない、唯だ獨り豫算の問題で以て初て死命を制することが出来る。随つて政府の方におきまして、亦た豫算編成と云ふことに非常な力を盡して、先づ今年度も無事に編成が出来、議會の協賛も得たとなると、其年の政治の仕事の大部分を過ぎた様に思ふのであります。善い政治と云ふのは半ば善い豫算、正しい豫算と云ふことに歸着するのであります。我々が立憲政體に於て、憲政或は憲政思想と云ふことを言ひますが、それは何であるか。國民は皆日本國家と云ふ大きな經濟の豫算を定めるに付て、無關係では無い、我々は皆之に與かる權利を有し、亦義務をもつて居る。即ち日本國の所帯は我々が集つて立て、居つて、其大體の方針・計劃は獨り當局者のみが獨斷で定むるのでなく、我々國民は皆之に參與すると云ふ

ことが、立憲政體の本旨であります。衆議院議員を選出する爲に投票一票を投ずると云ふことは、詰り豫算の審議、日本の所帯の張り方に對して我々が間接に力を持つて居ると云ふことであつて、我々の選出する代議士が立派な人で有るならば、國家の豫算を審議する上に於て、亦立派な成績を擧げるし、反對な場合には反對の結果を生ずる。であるから、代議士其人の適否を見るのにも、豫算に通じて居るか否か、豫算に對して正しい判斷の下せる人であるか否かと云ふことが、一番大事な資格としてあります（但し我邦の實際は中々左様理想通りには行つて居りませんが）。議會の事を立法部と申す爲に法律を作ることが其主たる事業の様に心得るのは間違つたことであります。議會は一つの臺所會議であります。是れ即ち立憲政治と云ふは豫算政治であり、豫算政治と云ふことは經濟政治であると云ふことの意味であります。

### 家族經濟も豫算政治なり

之を小にして我々の家に付ても、亦同じことであります。一の家族には倫理上社會上其他様々なる仕事がありすが、此等高尚なる仕事を遺憾なく十分に盡して行かうと云ふには、其家には必ず適當に作られたる豫算が有つて、其家の一ヶ年の收支經營が豫算通りに行く事が肝要であります。家政學・家計簿記はその道行を立てるものであります。即ち家計簿によつて運用せられ、家政學の教ゆる所を實現するものは家

計豫算であります。家計豫算は國家の歲計豫算と相對して居るので、國家は大きな歲計豫算を以て正しく之を運用して行く、家族は小さいが又それ自らの家計豫算を以て正しく遂行して行く。我々は退いて家に在る時には家計豫算の下に行動し、進んで公の生活に於て、國家の一員としては、直接又は間接に大きな國家の歲計に關係して居る。故に今日の文明國民、立憲政治の下に在る我々、殊に我邦の如く近年色々政治上の問題、社會上の問題は有るけれども、大體に於て豫算の遂行上、最も圓滿に行つて居る國におきましては、我々の生活は十分なる意味に於て豫算生活であります。

### 歐洲大戰は豫算生活を破壊せり

今歐羅巴に於ては大戰爭の後始末に苦心して居ります。戰に當りましては平常の豫算は到底執行することが出来ない、非常特別の豫算が行はれて居ります、全く平生の豫算とは性質が違ふ。隨つて歐洲交戰諸國の國民は、我々日本の臣民が持つて居る様な豫算生活は、現在は持つて居らない。丸で違つた經濟上の生活をなして居るのであります。隨つて彼等の國民心理の上にも社會道德の上にも、私的生活の上にも種々違つたことが起つて來て居る。若し是れが二百年・三百年の昔であつたならば、國家は戰爭をして居つても、國民は國民で平常と少しも變らない生活をなすといふ事が随分有り得る。或は多少影響

響を被つても今日のやうな影響を被ることは無くて済む（支那は或意味では此状態に近いのであります）、個人の生活と國家としての生活とは縁が遠い、脈絡相通じて居るので無い。二つの者がバラバラになつて居るのであります。然るに今日の歐羅巴文明國、又我が日本國の如く進んだ國に於てはさう云ふことは出来ない。國家の歲計豫算上の變調は、直ちに我々の各豫算上の變調となります。國の歲計豫算が變調を呈すれば、それは帳面上の支拂の語で無くして、我々國民の全生活、靈的の生活も・肉的の生活も共に亦、變調を來すことになる。其働きは甚だ微妙なものであります。

### 國家の經濟と個體の經濟

分り易く一例を以て申して見ますと、昔の國家の生活と云ふものは、極く下等な動物の生活、蚯蚓の如きものである。一匹の蚯蚓を首尾兩端に分つても、頭は頭、尻は尻で、尙多少は活動する。之に反して今日の國家の生活は最も發達した組織を組立て、居るものであります。若し之を斷ち放せば、其生命は大なる變化を受ける。複雑になればなる程、其組織は分離した生活を營むことは出来ない。今日の國家と國家の中に住んで居る我々との關係は、組織體と其の各器官のやうなものである。其中で殊に國家の生命を司つて居る處の機關は、歲計豫算である。國民各自の家計豫算は其下に立つて居る。而して兩者相合して所

謂國民經濟なるものを形作つて居るのであります。従つて國家の豫算が變調を呈すれば、家計豫算も其影響を被る。又其反對に我々家計豫算の運用が拙く、其道を誤れば、是が積り積つて、直ちに國家豫算の運行上にも妨げとなるのである。昔に在つては一個一人が如何に浪費濫費しても、如何に經濟が拙であつても、それは其人一人の損に止り、其人一人の災に止つて居つて、直ちに國家の運用の上に又國民經濟の全體の上に影響を來す譯では無かつた。今日はさうで無い。我々の僅か一ヶ年數百圓に出でない、或は數千圓に出でない處の小さい家計でも、其運用を誤るといふことは、極めて小ではあるけれども、國全體の經濟の上に影響を及ぼす。是れが澤山重なれば重なる程、全體に及ぼす影響が大きくなつて來るのであります。此意味に於ては昔とは丸で違つた意味に於て、我々の生活は直ちに國民並に國家の生活である。我々如何に微小な者と雖も、國民と國家を構成して居る要素であつて、之を打捨て、宜いものは一つも無いといふことになる。

一人の爲す處の事の當否は、極めて微小ではあるが國全體の生活に關係を及ぼす。何故かといふと國の富と云ふものは國に在るので無い、我々が皆分有して居る、我々銘々が持つて居る富の外に富は無い。日本の富といふものは、我々日本人それだけの持つて居る富の總計の意に外ならない。其富の極く微小の部分でも拙く使はれ、拙く運用せられて是が減少すると云ふは、即ち日本の富が夫丈減ると云ふもので

す。反對に我々の爲す處が自分の富を殖せば、即ち日本の富が僅ではあるが殖えることになるのであります。

### 今日の經濟は孤立せず

さうして今日の經濟は、孤立した經濟（即ち自足經濟、後に詳述す）と云ふものは殆ど無い。多少とも他人と相交渉するを本領とする經濟（即ち流通經濟、後に説く）であります。我々の身を見ても朝目覺めてから夜寝るまでに、我々の要する處の物を悉く自分で作るの無い。有らゆる地方の有らゆる産物を集めて、初て我々一人の生活が立つ。極めて貧しい生活であつても其道理は變らない。我々の身に纏ふ處の着物でも、我々の食する處の食料品でも、朝起きて味噌の汁を吸へば、其味噌は滿洲の大豆から造つたものであります。我々は滿洲の物産を以てなければ朝飯が食へないといふことになる。我々が食ふ處の砂糖は或は臺灣或は瓜哇の産物である。我々が食ふ處の魚飯は、日本米もあれば、又朝鮮米もあるし、臺灣米もある、更に進んで蘭貢米も喫べて居る。幾百里の遠方から舶載した處の米を喫べて居る。僅かに味噌汁一椀、米飯一椀を以て立て、居る我々の經濟でも、既に數百哩に亘つた産物が、小さな購の上に集積せられて居る。我々が一圓足らずの木綿の着物を纏ふて一夏を過して居る。其木綿の着物を作つた材料の木綿は、多くは日本では出來ない。印度の綿であるか、亞米利加の綿である。三國傳來四國傳來の産



物を以て我々の衣料が出来て居る。古へは非常に貧乏なる人の生活を名づけて、山海の産物を集めると言つて居るが、今日は賤が伏家の貧民でも、山海の産物を集めなければ、其の生活は成立たない。さうして夫等の物は、己自ら作るものもあるけれど、多くは他處から買ふ。即ち唯だ一碗の飯でも之に干與した人の数は非常に多い。米屋もあれば米問屋もあり、運送人もあれば汽船會社もある、蘭貢の百姓も有るだらうし支那人の苦力もあるだらう。色々なものが關係して初て我々の用を達すまでになつて居る。我々の纏ふ處の着物が着物になるまでには、印度の綿を作る百姓から、之を買ひ集める商人から、孟買の綿問屋から之を船積する郵船會社の船、此船を動かす處の何十人かの船員、石炭を積む者もあれば船長もある色々な者がある。此綿を紡いで糸にする爲には、澤山の工女があり職工が掛かつて居る。之を染める爲にも大勢の人が掛かつて居る。之を織る爲にも大勢の人が掛かつて居る。是れが出来上つた上では又た呉服問屋、又は小賣屋があり、最後に我々の手に這入るまでは、何十人何百人の人が干與して居るか知れない。我々が一反の木綿を買ふと言つても、詰り何十人かの働きの結果を消費することである。其やり方如何は段々積つて行けば、跡へ戻つて行つて何十人かの人に影響を與へることになる。我々の生活を維持するには、衣食の料ばかりで無く、色々な物がある、我々の家計豫算の執行運用といふものは、其全體に關係して居る。それを巧みに切り盛りするか拙く切り盛りするかといふことは、眼に見えないけれど、暗々の裡に非常に複雑な關係を持つて居るものであります。

立憲國民と經濟學の知識

經濟學は、此微妙複雑な人間の生活の方面を捉へて、其の間から成るべく總ての場合を網羅して、箇々の場合に當嵌めて直ちに真相を得ることの出来るやうな法則を見出し、之を述べる學問であります。故に唯だ専門家が學ぶ學問としてのみならず、國民として一般に知つて居る必要のある知識であります。無論何事も知らないで宜いものは無い、知つて居るに越したことはありませぬが、今日立憲政體の國々の臣民として、是非無ければならぬ知識の一つは、經濟學上の知識である、而して實際世界の諸國民に就いて見ると、世界中文明に於て一番發達し、富の力に於て一番強い國におきましては、又た經濟の知識が最も富んで居るのであります。それは言ふまでも無く英吉利であります。

英國に於ける經濟知識の普及

英吉利におきましては學問と云ふ學問の中で、經濟學位一般に普及して居る學問は無い、上は國の宰相から下は商館の手代に至るまで、經濟學の公けに認められた處の原理原則だけは、之を知つて居る可きものと

推定せられて居る。知らないは恥と云ふことになつて居る。殊に議會に於て政治家が、國務大臣でも代議士でも、他の學問の事に付て無知識を表明しても、それは唯一時の笑を買ふに止るが、經濟上の原理原則に付ての無知識を表明すれば、其人は最早、議會に居るに堪へない人と認められる、少くとも英吉利の經濟學に於て一般に認めて居る處の原理原則と云ふものだけは、是非之を知つて居らなければならぬ。英吉利の豫算政治の運用が分らないものは政治を談ずる資格がない。だから其を知つて居らないといふことの直ちに分るやうな言を發すれば、營に笑を買ふに止まらず、其人は議席に居るに堪へない。日本の議會には随分珍談奇聞少からずで、或代議士が、伊太利のジェノアの事を英吉利のジェノアと言つて、一時新聞で大變な物笑ひになつて居つた。是れは地理の無知識を意味して居るのであります。是れは無論御話にならない無知識だが、併ながら偶々伊太利のジェノアの事を英吉利のジェノアと言つたから、無知識と云ふことが、直ぐに表明せられたけれども、我邦の議會に出る議論を見ると、英吉利のジェノアどころで無い、實に驚く可き間違つたことが、平氣で述べられて居る、併し日本では些ともそれが爲に、其人の議員としての資格を議せられる事が無くして済む。英吉利に於ては決してさうで無い。是れは佛蘭西や獨逸や露西亞などになりますと、英吉利程では無い。隨分國の政治に與かる者でも、經濟上の極めて簡單な知識さへも持つて居ないで、敢て恥として居らない者もある。獨り英吉利だけは斷じてさうで無い。何故かとい

ふと、英吉利は憲法政治の國の中でも、殊に豫算政治の發達した國で、豫算と云ふものが非常に長く討議せられる、非常に綿密な知識を以て吟味せられる。處が豫算と云ふものは直ぐ見て直ぐ分るものでありませぬ。日本の豫算でも、之れを理解するのに、多少の豫備知識が要る。豫算を了解せずして國の公の問題を論ずると云ふことは、英吉利に於ては丸で無法なこと、看做されて居る。全然人が相手にしないのであります。

### 帳簿は淨玻璃の鏡

豫算といふと唯算盤上の數字のみに止るやうに思ふが、決してさうで無い。數字は結果である。其數字を生み出した基が即ち國の大きな問題である。けれども其基の問題を知るには、表の上に現はれた數字から這入つて行かなければ、這入る道が無い。又その位確かな這入り口は無い。昔は佛の顔も三度と言つた。佛は一度は欺くことが出来るが三度欺くことは出来ぬと言つたが、今日は豫算の面は一度限り三度などといふ猶豫はして呉れない。豫算を胡魔化するのは唯だ一遍で直ぐに責任を負はなければならなくなる。國の豫算もそうだが一軒の家計豫算もさうであります。又會社の帳簿の面といふものがそれでありませぬ。曾て大日本精糖會社の大失態問題がありまして澤山の代議士が獄に繋がれたり、政治家が失脚して甚だ

しい失態を暴露し、社長は割腹して責を負ふて死なれました。是れは帳簿の顔に幾度も泥を塗つたからです。即ち佛の顔は三度、帳簿の面は一度、實業上に於て簿記を胡魔化すといふ事は、簿記の見えない人なら役に立つけれども、簿記を知つて居る人なら、簿記の上で胡魔化すといふことは、到底出来ない。恰かも帳面と云ふものは浮玻璃の鏡のやうなもので、少しでも汚染があれば、直ぐに帳面の上に出る。現はれるやうに出来て居るのが簿記であります。殊に單式簿記で無くして、複式簿記は必ず一つ一つの取引を貸と借と兩方に分けて記ける、其記け方で行きますと、少の胡魔化しても胡魔化せば胡魔化したやうに帳面に載る。改竄することは出来ない。眼の見える人があつて之を見ると、直ぐに改竄したことが分る。必らずしも帳面の上に違算は無く帳面は綺麗に行列して居つても、各勘定を段々叩いて行くと、胡魔化したものは必ず何時か現はれる。それが複式簿記の妙であります。其妙が無ければ古來數百年來用ひ來つた處の大福帳を捨て、了つて、横の帳面など記けるには當らない。商法は帳簿を非常に嚴重に規定しまして、帳簿を完全に保管して居らないと、破産の時に方つて、之を犯罪破産とするまでに嚴重な制裁を加へる、と云ふのは帳面さへチャンと出来て居れば、胡魔化した積りでも、何時でも其胡魔化した跡から分る。今日の所謂豫算と云ふのはそれでありませう。國の豫算でも家の豫算でも、一會社一商店の豫算でも、一點一畫腰味を許さぬやうに出来て居る。之を離れて事の當否を論ずるは、非常に迂遠な仕方である。之を學ぶには少し骨が折れるけれども、之を學んで通曉しさえすれば、此位間違の無い正確なものはないのであります。

### 會計監督と國の政治

故に唯だ徒らに政治家の責任だとか國民の公徳だとか、抽象的のことを言つて居つても始まらない。それより豫算でキツチリと押へるが一番好い押へ方である。少しく俗に涉る諺だが、無いが意見の總仕舞と云ふ諺があります、其意味は詰り子供が身持が悪い、幾ら小言を言つても聴かない。が子供が請求する金をやらない。是が一番好い意見だ。小言を言ひつゝア仕方が無い今度だけやるから、此次からはぬやうにしろと言つたのでは、親の意見が意見にならぬ。今日の立憲政體の妙味は、矢張り無いが意見の總仕舞であります。政府が斯う云ふ新事業を始めたい、ア、云ふ新しい計劃をして見たい、何のかんと言つて豫算を作つて議會に之を出す、無いが意見の總仕舞で、豫算を否決して了へばそれ切り、政府は手も足も出やうがない。それが條件付協賛だのと言ひまして、今度だけは仕方が無い負けて置く、併し來年からはどうかさうで無いやうにして貰ひたいと言ふ風では利目が薄いのであります。一例をあげて見ませう。嘗て我邦の議會に於て減債基金の還元問題といふ喧しい問題がありました。これはどう云ふ事かと

いふと、日露戦争の跡で日本は大變に借金が出来ました、斯うどうも借金が出来ては國家の財政上の信用が無くなると云ふので、減債基金を桂さんの時に拵へた。之を返せるやうな積金をして、其利息を以て返して行かう、年々の豫算中から必ず減債基金中に何分か宛繰入れる。その集つた金は終ひまで借金を返す爲に、必ず強制的に幾分か割くといふ事にしたのが、減債基金と云ふ制度です。處がさうは定めて見たけれども、何時の間にかそれが出来なくなつた、減債基金に大分手が附いた。借金を返さぬのみならず、返す爲の積金迄も手を附けるやうになつた。處が此頃になつて日本の豫算は聊か餘裕が出来た、日本の財政は樂になつて來た。そこで起る問題は何を一番先にやらうかといふことで、貴族院に於きましては、減債基金を還元しろ、元々減債基金と云ふ制度がチャンとあるのに、それに手を付けて減じて居るのを、元へ還す是が何よりの急務である、之を元へ還せ、その元へ還す減債基金を殖さうとは言はない、元定めた丈の基金を積んで行くやうにしろと云ふのであります。政府の方では必ずしも、それは主義として嫌ふ譯ぢや無いが、何もさう拘子定規に還元をしなくとも、未だ他に利益の有る使ひ方が有るから、其方が先きで、減債基金の還元は後廻しにせやう、殊に今還元しても又た直きに其れに手を付ける様では何にもならないと云ふのが、去年の政府の方針であつた。そこで兩者が衝突して危く破裂になりさうな處を、どうにかかうか調停が出来て、一時延ばした。他日復た此問題が出るかも知れませぬが、若し政府を何處までも

追窮すると云ふならば、減債基金を還元しなければ断じて承知しない、豫算に協賛を與へないと言へばそれ切りであります、所が豫算には協賛を與へる、併し減債基金は還元して貰ひたい、それも今年出來ないならば希望として成る丈け早くやつて貰ひたいものであると、斯う云ふ事になつて居るが、是れは意見の總仕舞としては不可い、所謂半殺しであります。故に後日又た紛争が起るに極まつて居ります。どうも困るが併しモウ此次はいけない、今度丈けは仕方が無いと承諾した。丁度友達に金を十錢借りて氷水を呑んで了つた子供に、阿父さんが、今度丈けは十錢出してやるから友達に返しなさいと言つて渡したやうなもので、子供は此次果して阿父さんが呉れるか呉れぬか問題だ。ア、は言ふけれども、多少は緩急が有るだらうなどと考へるかも知れぬ。國會に於ては、豫算をスツカリ了解しまして、政府がどう云ふ計劃を立て居るかを見て、之を押へると云ふことが、國民參政權の骨髓であります。他の色々な事、外交が何とか内治がかんとか言ひましても詰りはシツカリ終まで押へられない。ギョツと云ふ音を出させる處にいかぬ、何時も半殺しに終るのです。諸君が新聞を御覽になると、色々政府攻撃などするけれども、其れは唯ワイ／＼言ふ丈けの話で、言ふ方もそれを以て、本當に攻撃し得ると思つて居るのでも無ければ、又た攻撃される方でも、何だ蒼蠅い位に思ふ、唯ださう云ふ丈けの話であつて敢て急所を押さへるのではない。處が事が豫算となると小さな事でも、飛んでも無い事が起つて、二進も三進も行かないことになるのである。

ります。

### 會計監督と家政

一家でもさうであります。一家を掌つて居る家長が細君をして正しく家計の切り盛をせしめやうとするには、豫算で押さへるのが一番であります、無いが意見の總仕舞で愚圖々々小言を言つたり、徒らに夫權を振廻すよりは、豫算を多くやらない。お前はさう着物ばかり買つちや不可いさう活動意ばかりを見に行つちや不可ぬと言ふよりも、お前の小遣金は月に是れ切り、どうしてもモウ増額しないと云ふのが、一番有力な、一番合理的な押へ方でありませう。それでも押へられないものは是れは合理的動物でない、問題外であります。處が日本では其點は餘程緩慢です。一軒の家長にして細君に帳面を嚴重に記けるを命じ、細君の記けた帳面を毎月必ず検査をやるやうな夫は、割合に少い。ガミ／＼小言は言ふけれども、其小言たるや豫算抜きの小言であります。矢張り政府の政治が失敗だとワイ／＼言つて居る間は、餘り痛痒を感じない。感じないと同時に、折角働いても働き甲斐がない。國の政治の運用の巧いのは、詰り豫算が巧く出来、而して正しく運用せられると云ふ事である。一軒の家計の切り盛の巧拙も又豫算の運用如何にあります。即ち第一は豫算の立て方の巧拙、第二は豫算を運用執行する巧拙であります。決算と豫算と

合ふのが其れです。細君が如何に骨折つて豫算の運用を巧くしても、亭主が會計検査をして呉れないと、ナニ目前で少し御機嫌さへ取つて置けば宜い、随分無駄な事をして居つても、それは注意されない、どうしても陰日向をする。人間同士が互に合理的の附合をすることがないことになる。是が詰り家政學とか、家計簿記とかいふものが肝要なる所以であります。此等の問題が段々喧しくなつて來るといふことは、大に祝す可きことでもあります。

### 金錢問題は高尚なる道德問題なり

昔流の考へを脱しないで、政治問題を金錢問題にしてしまひ、一軒の家の切盛の中心を金錢問題とするとは、けしからぬと考へる人もある様であります。然しそれは未だ眞に、今日の經濟から出て來る處の道德の高尚なる味を悟らない人であります。本當の道德、本當の社會心理、家族心理に於ては皆計數の中から生れ出る帳面の中に、最高の道德が有り、最高の倫理が包含せられ居るのであります。

### 英國の經濟道德

英吉利は此意味に於て、甚だ理想的の國であります。英吉利の國全體の立て方、其立憲政治と云ふもの

は、即ち此豫算政治であります。總て豫算を中心として國民は政府を見る、政府が國民に對して盡す所の善政といふのは、善き豫算を作り之を好く執行することに在る。だから偶々先年のやうな戦になると一番困るのは英吉利である。一錢一厘も無駄なものを使へない、一錢一厘も常道を外れた使ひ方をしては不可い英吉利が、先年獨逸を向ふへ廻して戦つた時丸で平生のやり方と違つてきました、此點に於て、英吉利は非常に弱く、英吉利の陸軍海軍のみならず、其の財政經濟の遣方も無能千萬ぢや無いかと思はれた。併し、戦は平常とは丸で違ふ、戦時にも應ぜられるやうな豫算の立て方を、平常からして置く、戦時經濟に向つての準備と云ふものもして置かねばならないのであつた。此點は英吉利は最も非理想的の國です。常道、即ち王道のみをやつて居るので、霸道の研究は些ともして無かつた。今後はさうでありますまいが、今日迄はさうであつた。併し、あの戦を除けて、平常の社會、平常の政治、平常の國民としての點から言へば、英吉利は一番高い、否、一番も二番も無い比較の無い高い國であるといふことは、今申す豫算政治の國、豫算輿論の國であるからであります。政府も豫算を以て、其生命として掛かつて居り、政治家も豫算を以て其政綱を立て居る。其他實業家然り、宗教家・教育家亦然り、何れも皆經濟的の獨立、經濟的の自重といふものが出來て居る。従つて其經濟道德は美ましい程に發達して居るのであります。

## 第二章 經濟の本質

### 經濟の定義

以上今日の文明生活に於ける經濟の意義を實際に就て説明致しました。ソコで此經濟と云ふ概念は何を根本の本質として居るか、之を分解すれば如何なるものになるかを、少しく學問的に説明して見ませう。今經濟と云ふ概念に定義を下して見ますれば、人間が生活維持による厚生増進の爲めに、一定の計劃に基く目的を立て、其目的を達する爲めに得又は用ゆる各種の手段を、目的に對して比較判斷する秩序的行動、並に其行動の組織を經濟と申すのであります。

右の説明を少しく分けて申せば、第一に人間は生活を維持し、之れによつて我々人間としての生を厚ふする所以を増進する爲めに行動するものであります。我々は一生の大々部分を捧げて此行動に従事して居るものであります。所が此行動を爲すには必ず目的を立てることが必要でありまして、其目的はまた一定の計劃に基くものであります。何の目的も定めずに無暗に行動したとてソレは厚生増進に效がないのであ

ります。人間の生活は草木や獸類の生活と異つて、一々の行動に意味があり目的があるのであります。即ち單に生きて行くと云ふことのみが目的でなく、我々人間としての生存・生活を充實し、之を有意義ならしめ、之を進めて行くことを目的とするのであります。之を總稱して厚生と申します。即ち我々の生活維持は、之によつて厚生を増進するものであると云ふ所に、人間の生存の努力の目的に大に深い意味が存するのであります。ソコデ、凡そ目的があればまた之に達する手段を選ばなければならぬ、一定の目的を達するには色々な手段がある、其中に就て何れが一番適當であるか、何れが一番効果があるかを比較判断しなければならぬ、ソレをしなければイクラ目的がよく立てられても、手段の拙い爲めに目的を半しか達し得られないとか、不十分であるとか云ふことになりません。ソコデ一定の計劃に基いた目的をチャント立て、其れに對して取るべき手段の選擇を十分に致し行く爲めには、秩序的に行動しなければならぬ、同じ事でも秩序なくやれば目的と手段とを適合せしむることは六ヶ敷い。此の如き秩序的行動を總稱して經濟と云ふのであります。即ち前章に説明した豫算と云ふのが其の秩序であります、豫算の表に秩序を定めて置いて、其れに基いて行動するコレガ經濟であります、コレガ豫算生活であります。

此の經濟には國家の經濟もあり、府縣の經濟、市町村の經濟、團體の經濟、會社の經濟、組合の經濟もあり、又一家の經濟、企業の經濟があります、何れも右申した意味の秩序的行動であります。即ち國の經濟とは我々が國を立て、行く上に於ての秩序的行動のことであり、會社の經濟とは、會社なるものを立て、居る上に就ての秩序的行動、一家の經濟とは、一家を切り盛りして行く上に就ての秩序的行動の謂であります。

經濟は有形物にのみ限らず

生活の維持には種々な物が入用であります。食料・衣料・住居は勿論人の一生には千種萬様な物を要します。其れには有形物もあれば、無形物もあります。所が多くの學者は、經濟とは有形財、外界の物を得又は用ひることを指すに限ると説きますが、コレハ間違であります（私自らも嘗ては、其様な説を述べたことがあります、其れは、先輩學者の説を深くも吟味しないで受賣したのであります、今から見れば、御恥しい話であります）。手近い例を申せば、我々が今日生活するに、米も要れば魚も要れば野菜も要る、是は有形物である、衣服住宅も有形物であります。然し此等の有形物を以て我々の用に供するには、人の働きがなくてはならぬ、食物は調理しなければならず、衣服は裁縫せねばなりません、其働きは有形物ではなく無形の勞働であります。今日の發達した經濟上の生活に於ては、殆んど凡ての事に無形の働きが伴つて居ります。又有形・無形の物を得たり用ひたりするには、又人間相互の間に種々なる關係が起り

まして、其關係を支配しなければ、我々の目的を達すること能はざる場合が多いのであります。人間相互間の關係は有形物ではありません、無形の事實です。であるから、經濟とは有形物を得たり用ひたりすることのみに關係すると云ふのは、生活の實際状態に全く合はぬ誤謬であります。有形たると、無形たるとを問はず、生活維持による厚生増進に關して我々が目的を立て、其目的を達する手段として選ぶものは、皆經濟に關係があるのであります。此を學問上の術語で財(又は富)と名づけます。財とは西洋の言葉では善と云ふのと同じ字を以て表はして居ります。即ち英語では「グッド」good 獨語では「グート」Gut 佛語では「ビアン」bien 伊語では「ベネ」bene と申します。我々人間の厚生生活を進むるもの、又は我々の生活に害あるを取除くものが善でありまして、財とは其手段たるものを云ふのであります、我々の生活を害するものは悪であります、コレハ經濟上には別に定まつた語はありませんが、學者によつては非財といふ字を使ふ人もあります。又富と云ふのは我々の生活が充實した有様を云ふのであります。即ち生活の維持が十分に出來て居る状態が富であります。コレト同時に此の如き状態を作り出す手段をも又富とも申します。此意味に解釋しますれば、經濟とは財(又は富)に關係する事なりと申す世間普通の書物によく書いてある定義も、まんざら當らない譯ではありません、唯だ甚だ言ひ足らぬのであります。適當に云はうとならば、經濟とは、生活維持の充實による厚生増進(ヴォールプファールツ、又はヴォールシユタン

ツ・フェルデルング)に關することなりと申す可きであります。

### 經濟の本則に關する誤解を釋く

又經濟とは最小の勞と費とを以て、最大の効果を收むることなりと説き、これを經濟の本則と名づける人もあります。コレモ間違つて居るとは申されませんが、唯だ説いて甚だ不十分なのであります。經濟は、最小の勞と費とを以て、最大の効果を收むることには相違ありませんが、其れが即ち經濟の全部だと云ふのは當りません。人間が苟くも理智を具へて、意味あり目的に合ふ生活を爲して居る以上、何事を爲し何物に處しても、他に差支なき限りは、勞と費とを成る可く少くし、而して効果を成る可く大ならしむるは當然の事でありませぬ。然し經濟と云ふには、其に更に附加へた特色がなければなりません。經濟でない事でも、人間の行動である以上は、必ず最小の勞費と最大の効果を期するものですから、其れだけ申したのでは、未だ經濟の真相を言ひ盡くすことにはなりません。即ち、同じ最小の勞費、最大の効果と申す内に就て、厚生増進・生活維持の爲めに一定の計劃に基いた目的を定め、其目的を達する手段を選択するに秩序がなければ、經濟ではないのであります。所で其目的と手段とを對照するに、一定の計劃と云ひ、秩序と申す以上は、其計劃と秩序とを定むる標準がなくてはならぬのであります。其標準は、經濟には經濟



の標準があるのであります。技術には、技術の標準があるのであります。ソコデ同じ秩序的行動にも、詳しく申すと技術と経済との區別がある次第であります。

### 技術と経済の異同

技術と経済との區別は、何によりて定まるかと申すと、技術に於ては其目的が最終的のものでなく、常に中間的であります。従つて技術に於て目的と立つる所も、経済から申せば矢張り一の手段（進みたる手段）であります。故に技術とは、手段を以て目的とするものであります。唯其手段に進みたる程度の手段と、低い程度の手段とあります。假りに前者を高級手段、後者を低級手段と名づけますれば、技術とは高級手段と低級手段とを比較對應し、其間の調節を図ることなりと申して宜しいのです。経済は之に反し、最終的目的のみを目的といたします（但し其意味は、人生最終の歸趣などと云ふことでないのは勿論であります）。決して手段を以て目的とせぬものであります。即ち眞正の意味に於て、目的と手段との調節を図ること、是が経済であります。以上のことを學問上で次の如く申します。技術に於ては、目的は常に外部にありて内部に存せず、経済に於ては、目的は常に内部にありと。其意味は、技術の目的は常に有形的であります。一定の物であります。大工が家を造るといふ技術の目的は有形的の家であります。器械師が時計

を造る技術の目的は、有形の時計であります。然るに経済の上から申せば其有形の家、有形の時計は矢張り一つの手段に過ぎぬもので、最終の目的ではありません。最終の目的は、其家に住む、其時計を使用することによつて、我々の生活維持に用あらしめること是れであります。生活維持に用あることを術語で欲望の満足又は充足と申します。即ち家なり、時計なりは、之を以て欲望を満足して、始めて経済上の目的を達するのであります。

### 價値の略解

さて、斯く欲望を満足すること、即ち生活維持の上に用あるにも、種々の度合があります。此度合を術語で價値と申します。即ち價値と云ふ語の意味は、有形なり無形なりの財（又は富）が、我々の生活維持に用あり、人間欲望の満足を購ふに足ると認めらるゝ度合のことであります。生活維持に大に用ありと認めらるゝものを價値多しとか、價値大なりとか申し、其用少しと認めらるゝものを、價値少し又は小なりと申します。我々は生活維持の爲め、一定の計劃に基いて目的を立てます。而して目的を達する爲めには手段を選びます。此手段を選ぶに當つて、其手段が何れ程目的に合ふかを度合を以て計ります。即ち一の比較判断を致します。比較判断の結果が、則ち價値であります。故に此の如き比較判断のことを價値判断

と名づけて居ります。此の價值判斷があるから、秩序的行動が出来るのであります。故に前に申した經濟の定義は、次の如く云ひ直しても宜しいのであります。經濟とは價值判斷に基き、厚生増進の爲めにする生活維持の秩序的行動なりと。

### 經濟の目的も手段も共に價值なり

故に唯家が出来た、時計が作れたと云ふだけでは、未だ經濟は十分でないのであります。其家なり時計なりが價值判斷を受け、價值ありと認められて、始めて經濟となるのであります。家や時計があつても價值が無ければ、其は技術丈の事に止つて經濟とはならないのであります。であるから經濟と云ふ人間の行動は、家を作り時計を作りたるものを用ひるによりて、價值を生ずることなりと申して差支ないのであります。其家なり、時計なりは、價值を生ずる上から申せば、畢竟一つの道行、一つの手段に外ならぬのであります。之れを目的とすれば、最終目的でなくて中間目的と名づけるのです。經濟は、コレからモウ一步進んで、最終の價值と云ふことを目的として居るので、家なり、時計なりを作ることを手段とし道行として、さて其れによりて價值が生ずると云ふことを目的とするものであります。故に、經濟の上にては、目的は常に價值でありまして、有形の物ではありません、手段は有形物を用ひますけれど、コレモツ

まりは價值を生ずる爲めの手段（價值手段と名づけても宜しいのです）でありまして、有形上の手段たる丈に止るではありません。

### 貨幣價值の説明

さて、右申す如く、價值は多いとか少いとか大なりとか小なりとか申して、一の度合であります以上、其度合を何と加して示す方法がなければなりません。度合を示すことが出来なければ、大小、多少と云ふことは畢竟無意味になります。ソコで今日の文明生活におきましては、此價值の大小多少を言表はすものは貨幣でありまして、貨幣の額、即ち金額を以て大小の度合を指し示します。例へば此土地は一萬圓の價值あり、此の時計は五十圓の價值あり、彼の家は五千圓、彼の帽子は十圓の價值あり等と申すのであります。之によつて、價值の度合は明瞭に、また正確綿密に示すことが出来るのであります。斯く貨幣額（金額）で言ひ表はした價值を、貨幣價值と名づけます。従つて、今日では經濟とは貨幣價值を多くして、生活維持、厚生増進を致すことの謂であると申すことが出来ます。

### 經濟組織と經濟行爲

かく貨幣價值を得、又は之を多くする爲の秩序的行動は、其秩序を立てる爲に、色々な組織を喚起します。組織を離れても、一定の計劃を立て一定の秩序に従つて行動して行くことは出来ずし、又其場合も多いのでありますが、人間は極く文明の低い時代からして、既に多少の組織を立て、其組織の内外で此秩序的行動を營んで居つたものでありまして、今日の文明生活に於ては此組織は非常に進歩したもの、複雑なものであります。我々は何れも何等かの組織の中に住んで居て、生活の維持を致して居ります。即ち前に述べました國民の經濟と云ふのも國家の經濟と云ふのも、家の經濟と云ふのも、皆此組織であります。我々の厚生増進、生活維持は皆此等の組織内で行はれて居ますが、又同時に組織の外に涉つても行はれるのであります。一家族の中にある人も、必ず日常の生活に於て其家族の外に出で、家族以外のものと色々交渉し接觸して居ります。一國の國民は、國の内にあつて經濟して居るに止まらず、國外に出で外國人と通商貿易して居ります。即ち我々の經濟生活は、組織内の生活との兩面から成立つて居るのであります。先づ概して申すと、生活維持の爲めにする手段を得るのには、組織外の生活が大部分を占めて居ります。例へば商人や工業家は家族の外に出で、又は國の外に出でて、品物を作つたり買つたりしますし、給金や賃金を得るのも大抵家の外でしまして、之を家へ持つて歸ります。其反對に、得たものを使用するのは大部分組織内の生活で致します。外から買つてきた反物を家へ持つて歸つて裁縫したり、

外から買つた米を家で炊いて食べたり、又外で稼いだ収入を家へ持歸つて家族一同で之を使ひます。術語では、物を得ることを生産、之を使ふことを消費と申します。即ち生産は、多くは組織外で營まれ、反對に消費は、多く組織内で行はれるのであります。従つて組織と申すとは、主として物を使ふ方、即ち消費に關係があつて、生産の方は組織に束縛せられないのであります。所が今日に於ては組織外でする生産には、又其生産丈けに就ての組織と云ふものが出来て居ります。之を生産組織と名づけまして、前の意味の消費組織と區別致して居ります。畢竟我々が一定の計劃に基く目的を立て、目的を達する爲めに、秩序的行動を致すには、如何も組織がなくては不便でもあり、又事實不可能であるので、人間は到る所に於て、又凡て爲す事、營む事に就て、組織を立てると云ふ傾向天性を有して居るもので、人間は組織の動物なりと申しても宜しいのであります。組織を立てずしては、秩序的な生活は殆んど出来ないもので、文明の進むと共に益々左様なつてきたのであります。であるから今日では秩序的行動と云へば、直ちに組織を聯想するのであります。一々秩序的行動と云はずとも、組織とさへ云へば、必ず其中に秩序的行動が含まれて居るのであります。即ち經濟は秩序的行動、並に行動の組織なりと細かに申さずとも、經濟は組織なりと申せば、十分に意味を盡くすことになつて居るのであります。經濟は組織なりと簡單に言ふ人もあるのであります。然しソレは少し略し過ぎますから、説明を致すには、矢張り秩序的行動、並に行動の組織なりと、兩

つに分けて申す方が宜しいのであります。此秩序の行動の事を經濟行爲と申し、行動の組織の事を經濟組織と名づけます。ソコテ經濟は、經濟行爲と經濟組織と、此の兩者を綜稱するものと御承知を願ひます。

### 行爲の學と組織の學

右申す通り經濟には行爲と組織とがあります。今日まで經濟學と申すと、主に前の行爲の方を説いたものであります。英國流の經濟書は、今日でも大抵は經濟行爲の説明に限られて 組織の方の事はほんの附けたり論じたり、又は全く之を載せてないのであります。コレは無理もないことであります。英國で經濟學の盛んになりましたのは、如何にして國を經濟上進歩せしむ可きか、手近く申せば如何にして英國を富ましむ可きかと云ふことが中心の問題でありまして、富を作ることの考究に全力を注いだのであります。従つて富を作ること、即ち經濟行爲のみに力を用ひたのであります。所が段々研究が進んで、學者の眼界が擴まつて來るにつけ、ソレは不十分である、作つた富が如何云ふ作用をするか、同じ富を作つても國中の一部にのみ其れがかたまつて、一般に行渡らないでは何にもならない、又富を作るに就て、社會の制度が如何云ふ風になつて居るか、其制度の良否によつては、富は作れても人間の幸福は或は進まないかも知れない。少數の富者のみが幸を受けて、多數の人は其恵に浴せず、殊に下層社會には未だ澤

山の貧乏人があると云ふのではない。即ち富を作ると云ふ行動の爲めに起つて來た經濟組織の真相、其の利弊等を大に研究しなければならぬと云ふことが、段々諒解される様になつて來たのであります。ソコテ經濟學は、行爲論計りでなく、組織論もせねばならぬと云ふ事になりました。然しソレは未だ日の淺いことであります。現在と雖も組織論の方は整頓して居りません。

經濟行爲を論ずるのを經濟動學、組織の事を論ずるのを經濟靜學と名ける人もあります。併し今日の所、動學の方は中々進んで居りますが、靜學の方は遙かに後れて居ります。従つて動學・靜學と云ふ様に相對する二科に分けることは無用でもあり、無益でもありませんから、私は其分け方を取りません。

### 經濟單位及經濟主體の略義

今日の文明國に於ては經濟組織の一番大きいのは、國民の經濟であります。之を國民經濟と名付けます。國民經濟とは一つの國家の下に於て統一的の國民を形作つて居る人々の一切の經濟行爲及び經濟組織の總稱であります。日本には日本國民經濟があり、英國には英國國民經濟があります。我々は何れも此國民經濟と云ふ大きな組織の中に在つて生活の維持を營んで居るので、何れの組織にも屬さないと云ふ人間はないのであります。此國民經濟は甚だ大きい組織でありまして、其性質は極く茫漠たるものであります。

即ち此の組織には、一定の計画と云ふものはないと申さなければならぬのでありますが、秩序的な生活と云ふ方面は大分備はつて居るのであります。尤も國民經濟の中には、國家の經濟、即ち政府の財政と云ふものがありまして、個々の事に就ては計画を與へて居り、且つ之を指導して居るのであります。サリトテ國民が厚生生活の維持を爲すに就て、一々之を指導するのでもなく、又保護監督するのでもなく、責任を負ふのでもありません。所謂産業・職業の自由とか自由競争とか申す語で表はして居る通り、國民が生活を立てるのは其人々の責任であります。其代り又何の職業に就き如何なる生活を致さうとも、公の秩序と善良の風俗に害なき限りは、各人の自由であります。

右と反對に、經濟組織の最も小なるは家の經濟即ち家族の經濟であります。之を家族經濟と申します。家族經濟は國民經濟と違ひ、嚴重に一定の計画を立てた秩序的な生活を營むものであります。ソコデ此組織は、茫漠たる大組織の國民經濟の中に於ける小組織で、恰も組織を構成する器官の様なものであります。又家族よりも稍大なる組織は、前に説明しました生産組織でありまして、之を今日は企業經濟、又は多く單に企業と名づけます。ソレカラ又組合とか團體とか一の經濟組織を立てることもあります。凡そ此等の組織は、家族經濟と同じく、何れも國民經濟と云ふ最大の組織の中にあるものであります。其故區別を立てまして、最大の組織に對して其中に在る所のより小なる組織のことを經濟單位と申します。つまり組

織の中にあつて恰も其器官、其單位たる組織と云ふ意味であります。單位も亦組織たるには相違ありません。唯だ區別の必要のあるとき、大組織に對して單位と申すのであります。單位には必ず主體と云ふものがありまして、之を經濟主體と名づけます。即ち家族經濟には世帯主(家長・戸主)があつて、家族經濟なる單位に一定の計画を立て、之に基いて全體を主宰して居ります。企業には企業の主體があつて計画を定めます。組合・團體亦然りであります。政府の財政も、亦一つの經濟單位でありまして、之れにも立派な主體があつて一定の計画を立て、居ります。ソコデ、此の單位が單位だけで凡ての事を濟す場合と、單位の外と交渉する場合、組織内の生活計りと、組織外にも出でて生活する場合とがありまして、此區別は經濟上甚だ重要であります。次章に於て説明します。

### 第三章 自足經濟と流通經濟

#### 兩語の意義並に説明

我々が厚生生活の維持を致すに、主として單位の中で用をすまず經濟組織を自足經濟と名づけ、單位の

外に出て他の單位と相交渉して厚生生活の維持を圖る經濟組織を流通經濟と申します。此區別は甚だ肝要なものでありまして、あらゆる經濟現象を了解するに先以て心得て置かねばならぬ所であります。單位の中で凡て用を濟ますと云ふ意味は、生活維持に要するもの即ち財(富)を得るのも使用するのも、言葉を改めて申せば、生産も消費も皆同一の小組織、同一の單位の中計りで行はれると云ふことであります。コレが自足經濟の真相であります。之と反對に消費は單位の中で行ふけれども生産は他の單位に頼み、他の單位で作つたものを貰つたり買つたり又は借りたりして來て、之を自己經濟の消費に充てると云ふのが流通經濟であります。

流通經濟の中で最も著しく發達を遂げたものを、貨幣經濟、或は營利經濟と名づけます。同じ秩序ある計劃に基いて生活を維持し、其生活維持、厚生増進の爲に色々行爲をなしたり色々組織を作りますが、夫等の行爲及組織の自足といふことを主義とするのと、流通といふことを主義とするのに依つて、全く違ふ。自足と流通とは相對して丸で違つた處の主義であります。歴史的に申せば自足から始めて漸次流通に赴いて來ました。今日は流通經濟の最も發達した有様に於てあります。併ながら今日と雖も、未だ自足經濟が全然無くなつて了つた譯ではないのです。自足は自給とも言ひます。或は二つ重ねて自足自給經濟とも言ひます。

### 自然經濟と云ふ語は不適當

學者又自然經濟とも言ひます。何れも英語の『ナチュラル・エコノミー』Natural economy 獨逸語の『ナトゥラル・ヴェルトシヤフト』Naturalwirtschaftの翻譯でありまして自然經濟でも宜しいので、私も嘗つて用ゐたことがあります。考へて見ると日本語としては少し可笑しいのであります。何故と申すと、自足自給若くは自然經濟と云ふ言葉の英語『ナチュラル・エコノミー』と云ふ語も、實は本當の英語ではありません。獨逸語の『ナトゥラル・ヴェルトシヤフト』Naturalwirtschaftを英語に直譯したのであります。それを又日本で自然經濟と譯したものです。成程『ナチュラル』Naturalと云ふ字は自然と云ふ字です。併ながら斯く用ひます場合の『ナチュラル』と云ふのは英語の自然 Nature と云ふ字の形容詞ではないのであります。此字は元拉丁語の『ナトゥラ』Natura と云ふ字から來て居るのであります。此『ナトゥラ』と云ふのは天然自然と云ふ意味でもありますが、又た物・實物と云ふ意味があるのです。即ち金錢・現金に對して、金錢でない實物と云ふ意味なのであります。即ち金錢の支拂ではなく實物を給與することを『ナトゥラ』の支拂と申します。英語で之を『ナチュラル・ペイメント』とも申しますが、正しく申せば『ペイメント・イン・ナトゥラ』Pay ent in natura です(同じ事を『ペイメント・イン・

カインド』とも申します。例へば今日でも我々の家の中に使つて居る労働者、即ち下女下男は半は此實物給與即ち『ペーメント・イン・ナトゥラ』を受けて働いて居るものであります。給金を一ケ年に幾らとか、一月に幾らとか、定めて見ましても、此金銭で給與する給金は彼等に與へる報酬の全部ではありません。其外に物を給します、即ち給金の外に給物があるのであります。彼等は家の中に居つて食物を貰ひます、又夜は寝かして貰ひます。此食物を貰ひ住居を與へられ、寢所を給せられ、其外又た盆や暮に御中元や御歳暮が出る。偶には主人の御供をして花見にも行かれる活動も觀に行ける。是れは嚴格に報酬とは申されないやうですが、事實は一種の報酬であります。金銭に見積れるものもあり、見積れないものもあります。是れ即ち『ペーメント・イン・ナトゥラ』實物給與、給物であります。昔は工業上の労働者の給與も一部分は此の實物支拂ひが多く行はれて居りました。今でも農家の作男・農業労働者は全然金銭ばかりで無くして、御飯を喫べさせて貰ふとか、麥を貰つて歸るとか、一期稼いで歸る時には反物を一反貰ふとか云ふことが行はれます。日本ばかりでなく西洋でもさうであります。唯だ今日の工場工業の労働者だけに、嚴重に給金が行はれて居ります。錢で拂ふばかりで、實物給といふことはよく無い、弊害が多いと看做されるやうになつて來ました。さて此の給物の事を『ナトゥラ』と申すのであります。従つて重に此實物給與・實物交換のみによつて、貨幣の支拂をしない經濟の事を『ナチュラル・エコノミー』と申すので

あります。其意は、實物經濟・給物經濟と云ふことであります。ですから、コレを自然經濟と言ふのは可笑しいのです。

### 實物經濟又は物々交換は特色にあらず

右申した次第故文字通に名を附けて實物經濟と譯す人もあります。或は物々交換と言ふ人もあります。物々交換は中つて居りません。『ナチュラル・エコノミー』は交換に付てのみ云ふのではありません。唯だ呉れ放しの時でも金がなくて物で呉れれば、それが即ち『ナチュラル・エコノミー』でありまして、物々交換と申しては適切ではありません。即ち物と物とを遣り取りする場合で無く、今申す女中に給金をやる代りに食物を喫べさせると云ふ様な場合は物々交換とは申されません。女中の方から何も物を寄越す譯ではありません、女中から寄越すものは働きて、是れは物々交換とは申されません。働きて物との交換ですから物々交換であります。斯く自然經濟と申すも、物々交換と申すも、何れも適切でなく一部分のことを言表はすに過ぎません。自足(又は自給と申しても差支はありません)經濟と申すのが一番宜しいと思ひます。

## 自足と云ふことが特色

其意味は物計り用ひて金錢を使はないといふ事よりも、自ら他に其特色があるのであります。其特色から貨幣を使はないといふ事が附帯して起つて來るのであります。其特色本領は何であるかと申すと、字の示す通り自給自足といふ事でありませぬ。即ち成る丈け自分で足して自分で給する、他人から物を買つたり他人から物を得たり、又此方から他人に物を賣つたり、他人に物をやつたりしないで、自分に使ふ品物は成る丈け自分の處で、全部作るか或は大部分作ることと是れであります。昔は皆是れでありました。

## 農家は主として自足經濟を営む

今でも田舎の農家は大部分、是でやつて行ける。又段々左様でなくなつた所でも、やつて行かうと思へばやつて行けるのであります。己の田で作つた米麥を喫べ己の畑で作つた物を織つて衣服として着て居る、要る物はと云ふと赤毛布・蝙蝠傘位、是れも無くて濟む。菅笠を被つても雨は凌げるのであります。然しコレハ段々變化して來ます。都會に出て來て見た物を買ふ様になりました。是れは見方に依つては農村の疲弊の原因だと云ふやうにも云へますけれ共、百姓だけは赤毛布を被つちや不可い、都會の人丈け赤

毛布・白毛布、何でも被れといふのは無理な話。都會の人が毛布を被れば、田舎の人も被りたい。それを身分不相應だから不可ぬ、百姓だから赤毛布を着ちや不可といふのは無理な話であります。百姓でも相當な金があれば白毛布でも黒毛布でも被つて差支ない。處が日本では百姓となると菅笠・蓆を被つて居らねばならぬと云ふやうな考へが抜けませぬ。即ち無理にも自足經濟でやれと云ふ思想が中々普及して居る様であります。従つて毛布を着たり蝙蝠傘を穿たりするのを直ちに贅澤と言ひます。安んぞ知らん、菅笠や蓆と云ふ物は永く持たない、度々取換へなくてはならぬ、それよりも少し丈夫に出來た洋傘・赤毛布であれば何年も保ちます、孫子の代まで保つかも知れませぬ。却つて經濟的でありますが、此處までは打算しないので之を農村疲弊の原因だと申す人もあります。併し先づ大體に於て百姓といふ者は、日本でも西洋でも何處の國でも、餘程自足的の生活を營んで居る者であつて、又それで差支ないのであります。問題は何處までも自足經濟主義を墨守せしむるか、或は強ひて之を破るか、或は強ひて命じもせず、強ひて破りもしない、事物の發達に任せるかといふ點に在ります。それは人の見方に依つて色々違ふが、兎に角大體に於ては農家の經濟といふものは自給自給的のものである。何處の國でもさうであります。

## 昔は皆自足經濟なり



昔農業の外、殆んど産業と云ふものがなかつた時代におきましては、人は皆自給自給の經濟を營んで居りました。昔と雖も人間の生活維持には秩序があり計画がありまして、之に基いて色々な行爲をし、色々な組織を立て、居ましたが、夫は悉く自給自給のものであります。此現象は日本では殊に近く目前に在ります。西洋でも是が改まつたのは、そんなに古いとは無い、十七世紀、否十八世紀に入つても未だ自給自給の百姓が澤山あつた。今でも英吉利の百姓こそモウ全然自給自給で無くなつて了つて居るが、佛蘭西の百姓などは未だ自給自給のものが少くない。獨逸に至ると遙かに多く自給自給であります。是れが集まれば國の自給自給といふことになるのです。國の中に自給自給經濟を立てゝゐるものが多數を占めて居れば、國はどうしても著しく自給自給的になる。我々の經濟が寄つて群つて初て國の經濟が出来るのですから、我々の多數が自給自給の經濟をやつて居れば、國の經濟も自給自給が主となります。

### 自給自給ならざる英國と自給自給なる獨逸

今日現在の英吉利の國民は百姓と雖も自給自給經濟をやつて居りません。即ち英吉利全體の經濟は自給自給の經濟ではないのであります。是が此度の戰に最もよく現はれて來て、大變好い點もありませんが、

又甚だ困つた點もあるのであります。世界第一の富、世界第一の文明、世界第一の國民道徳の發達した國である英吉利が、而も佛蘭西・露西亞・日本と云ふやうな強い國と聯合して、獨逸・奧太利・土耳其と戰つて居ますが、動もすると却つて反對に敗られて居ります。世界の物産を集めることは譯なく出来る英國が、食料品を始め生活維持の必需品に著しく困難を感じて居ります。世界の金權を倫敦に集めて居る英吉利が財政困難を感じて居ります。其一例には、英吉利で要る金は、英吉利で供給が六ヶ敷いので證券動員と云ふことを始めました。證券動員と云ふのは英國の金で外國の事業に投じてあるもの又は外國に貸付けてある金を動員して英國へ回収するとであります。其のみならず今迄は英國に對して借金國であつた亞米利加から金を借りました。米國から借金しなければ軍費の支辨に困ることになつたのであります。ツイ此頃までは借金國であつた亞米利加が、今日では世界の大貸金國になつて、今度は英吉利の方から借りに行く。財政上は此の如くであります。それよりもモツと困ることは、英吉利で食物が不足するところであり、否食物以外に無くてはならない生活維持の必需品に、大缺乏を感じました。世界第一の大海王國、世界の制海權を殆んど全く掌に收めて居る英吉利が、食物に困つたのであります。然らば反對の獨逸はといふと、食料に窮して一年も戰はない内に降参するといふ様に、度々英吉利や佛蘭西から日本へ電報が傳はりましたが、五年近くも戰つて兎に角瘦我慢をして中々永く堪へました。四面に敵を受けて世界中の

強い國といふ強い國を揃へて向ふへ廻して戦つた獨逸が、兎に角五年近くもドウヤラコウヤラやつたのであります。世界中の強い國を揃へて味方に持つて、世界中の海を支配し、植民地を其處ら中に持つて居り、其の領分には太陽の没したことが無いとまで言はるゝ英吉利が、却つて食料に困つたと云ふは誠に面白い現象ではありませんか。

### 獨逸の強みは經濟上にもあり

英吉利は全然非自給・非自給的經濟を營む國であります、其反對に獨逸は未だ國として餘程自給的の所があります。尤も獨逸も段々英國の有様に近づいて來まして、モウ二三十年も経つてから戦が起つたならば、獨逸は英吉利と同じになつて居るか、或はモツと酷くなつて居つたかも知れません。其點は獨逸の爲に甚だ仕合せな事で、未だ自給主義がスツカリ廢り切らない中に此戦が出来たのは僥倖と云ふ可きであります。獨逸は海上陸上とも封鎖せられて四面に敵を受けて、非常の窮境に陥つた場合、自給經濟をやらうと思へば未だどうか斯うかやつて行かれたのであります。然るに英吉利はどんな工夫をしても、自給は出来ない様に出来て居る國柄であります。之を我々個人に例へて見ると、自分の處で以て多少米も作り菜も作り大根も作つて居る。處が何が事變があつて米を買つたり野菜を買つたりすることが出来なくな

つて了ふと、どうかして自分の處の田圃で作つた物で間に合せようと思へば、平常のやうな暮しをしては出来ないが、非常に切り詰めれば兎に角出来る。處が都會に居る我々の如き、米一粒でも自ら作ることは出来ない、大根一本でも自分の處で出来る次第でない、悉く他處から買つて經濟を立てゝ居る、非自給的の經濟を立てゝ居る。此の我々が若し交通をスツカリ絶たれて了つて、米屋も入らぬ八百屋も來ぬ何も他處から供給を受けることが出来ないとなつたら、一日も生活を支えることは出来ない、餓死に瀕しなければならぬ（大正十三年九月附記。昨年今頃の我々は即ち殆んど左様でありました）。英吉利が丁度さういふ有様に近かつたのであります。完全に制海權を持つて居る積りでも、潜航艇の爲にボン／＼沈られる、だからどうしても英吉利が是等の食料品や生活の必需品が足りないで困難だから國內でどうか間に合せると言ふた處でテンで無い、無から有を生ずることは出来ない。半分でもあれば、それを色々工夫して、獨逸風にどうか斯うか間に合せるといふことも出来るが、其れが出来兼ねました。是れが自給經濟と自給經濟で無いとの違ひであります。

### 東洋の英國は御免を蒙る

然らば我々は何時までも獨逸の眞似をして、成るだけ自給經濟を變へない様にす可きかと云ふにそれは

出来ない。何も英吉利が早まつて非自足的になつて来たのでは無い。自然の發達の趨勢、なつたので、獨逸は未だ自足的であるといふのは進歩が遅れて居るからであります。戦をするといふ野蠻な、文明の逆戻しといふ時に於ては、餘り文明の進んで居ない國の方が色々な便利を得る、餘り進んで了へば、戦といふ様な野蠻の行爲に向つて、不適當になるに定まつて居る。田舎から東京の如き都會に出て来て、スツカリ都會生活に慣れ切つた人が、俄かに零落して、復た田舎へ歸つて、農事をやらうと云つても出来ない。都會に在つても、半ば勞働しつゝ半ば高尚な生活をして居れば、一朝零落して田舎へ引込んで、元のやうな働きは出来ないが、半分や四半分の勞働は出来る。獨逸が今戰の出来ると云ふのは、未だ〳〵本當の文明人になり切らないで、野蠻と申しては少し語弊があるが、マア野蠻です。粗末な生活をやるといふことになつて居るからである。處が文明の進歩から言ふと、さう云ふものゝ年々無くなつて行くより外仕方が無い。是れが實に經濟上の大問題。我々は今までは英吉利のやうになりたい、東洋の英國だなど言つて、而もそれが非常な名譽であるやうに考へて居つたが、今日では東洋の英國は御免を蒙らなければならぬ。世界の英國でも厭だ、世界の日本で今の儘の方が、東洋の英國より宜い。

## 我日本の經濟上の強み

今の日本ならば世界萬國を敵として戦つても、海軍が全滅して了へば兎に角、海軍が全滅して了はぬ限り一年や二年は喰ひ延ばして行けます。勿論樂な譯にはいれないが、どうか斯うか出来る。況や朝鮮或は臺灣との交通聯絡さへ絶えなければやつて行ける。夫が今日ですから甚だ日本の強味と感じます共、今より十年も前のハイカラの日本人は非常な弱點と考へた。何となれば彼等口を開けば直ぐに曰く舊弊だと、彼等は明治維新の改革が非常に偉いものであるといふことは見るけれ共、明治維新の前の徳川氏二百年のあの鎖國時代と云ふものゝ意味が殆んど分らない。徳川氏が鎖國した爲に、惜しいかな日本は進歩が遅れて了つた、ペリーが我々の迷夢を覺して呉れたのは、開國の恩人だと考へる。成程徳川氏二百年の鎖國には種々な弊害を伴つた。伴つたが併ながら國が自足經濟を立てる、英吉利と正反對の行き方を行く。今獨逸がやつて居るやうな事を、モツと秩序的計劃的に國全體を擧げて、本當に自足主義を履行したのは徳川時代である。而も二百有餘年の長きに亘つてやつた。外國から何か漕ぎ付けて來ればドン〳〵追拂つて了ふ。此方からは行かない、向ふからも來るな、日本の經濟は日本文だけで立てゝ行かれた。元より充分とは行かないが、大體に於て行けたのです。それは經濟上の非常な強味で、經濟的獨立は徳川氏二百餘年の間は出來ました。今日はさうで無い。歐羅巴に戦争が始まると、直ぐに染料が無くなる。鐵が足りない、子供迄鉛筆が無くて困ると云ふ有様である。日本は發達した國で鉛筆など自分で出來さうだが、さうで無

い。日本で出来てもピチ／＼折れる鉛筆しか無い。幾ら國産奨励をしたくても、仕様が無い。だから従前十五錢した鉛筆が四十錢乃至五十錢になつても仕方が無いから買つて居る。徳川氏の時にはそんな事は決して無い。徳川時代には鎖國の夢を破らなくて不可かつたが、今日は開國の夢を破らなくては不可ぬ。開國して非自足主義を採るなら採るやうにやれば宜いが、さうなつて居ない。是れは丁度田舎から都會へ出て来て都會の一方の方面だけ學ぶ、併し何も出来ないことは矢張り依然として田舎漢であると違はない。併し乍ら一朝事あれば未だ強ひてやれば自足が出来た。少くとも食料の上に出るといふのは、是れ徳川氏二百有餘年の御蔭だ。それが急度宜いとは限らない、色々不可い事はあつた。モツと早く國を開けば、宜かつたらう。宜かつたかも知れないけれど、今の自足の強味と云ふ點から言へば確かに非常な強味を我邦は今では持つてゐる譯であります。其點は少しも考へないで、唯徳川氏の時代が如何にも國民の海外發展を害したといふ點のみを言つてゐるのは一を知つて二を知らざるものと存じます。私は徳川時代は之を名づけて國家自足經濟時代と言つて宜からうと考へます。此の如く日本のやうに思ひ切つて充分なる國家自足經濟主義の行はれた國は世界中未だ嘗て何處にも無い。併しながら之を理想とし之を主義としてやらうと云ふ考は、歐羅巴に於ても或る時代には普く存して居たのであります。

## 第四章 經濟と云ふ語と思想の成立

### 國家自足經濟の理想

抑も國の經濟（即ち國民經濟）と云ふ考へが起つた時は、即ち歐羅巴に於て各國が、出来れば今言ふ様な國家自足經濟にしやうと熱望した時でありまして、經濟學も其時に出来たと云つて宜いのであります。其は西洋紀元十六世紀・十七世紀・十八世紀の頃であります。即ち中世が終つて、近世に移つた時であります。西洋近世の第一の特色は有らゆる社會上、政治上公的生活の一切を網羅する理想として、國家自足經濟を立てようとしたこととあります。其一番先に興つて来た國は西班牙である。西班牙は十六世紀に於て一番富んだ、一番文明の魁に立つた國で、アメリカから澤山の銀が移入した、アメリカへ植民地を持つて居れば、他の國へ交渉しなくても、西班牙だけで一大帝國が出来た。それで他の國と少しも交渉しない、西班牙だけで自足經濟を拵へやうと努めた。其の次は和蘭です。其次は佛蘭西です。最後に英吉利です。處が西班牙でも和蘭でも佛蘭西でも一時ホンの僅かの間目的に近づいたけれど、直きに破壊してしま

た。歐羅巴の大陸に居り乍ら他國と少しも經濟上の交通をしないで、自足して行くといふことは逆も出来ない。世が進めば進む程出来ない。獨り英吉利に至つては國家自足主義と云ふものが幾分か出来た。英吉利が出来たのは島國であると云ふことが第一の原因であります。出来たけれ共之を我邦の徳川時代に於ける國家自足經濟の状態と比ぶれば、それは大變な違ひであります。

### 侵略的の國家自足經濟即ち植民地帝國

英吉利に於て國家自足經濟が割合に理想に近く出来上つたと言ふけれ共、それは唯或方面に付いて言つたので、國の全體が全く海外と關係が無くて、國の中に要する物は、皆國の中で作り出すことが出来ると云ふ状態には決してなつた事は無いのです。唯英吉利の生産が大變に豊である其爲めに國內の必要を充たして、未だ餘りがある位であつた。其餘りを用ひて外國を侵略することを始めました。即ち此時に於て植民政策と云ふことが起つて來ました。對等の外國とは成る丈け附合ひをしない其代り自分の國の植民地・屬國領地、是れを自分の國の爲に利用する爲めに獲得しました。其獲得した處の植民地は極度まで本國の犠牲に供したのであります。故に英吉利に於て成功したと申す國家自足經濟は我徳川時代の退嬰的・保守的なる正反對に侵略的の國家自足經濟でありまして、侵略した土地所屬の人民を全く自分の物にして

つたから國家自足經濟が出来たのであります。英吉利は島國であつて大陸との交渉は割合に薄くも濟む、他方には島國であるから早くから海運が発達して、遠く海外へ遠征する。其結果未だ充分開けてゐない國を取る。島國であるといふことに關聯して海上權を制して外國を侵略するといふことが英吉利を助けて、國家自足經濟を形造らしめたのです。當時の言葉に Trade, Piracy and War 「貿易と海賊と而して戦争」と云ふのがあります、コレが事の實際を能く言ひ表はして居ります。然るに我日本の徳川時代の國家自足經濟と云ふのは、全然それと趣が違つてゐる。少しも外國を侵略しない、全然受動的で、偶に外國から船が這入つて來れば、寧ろ之を近寄せない工夫に汲々たる受身の國家自足經濟であります。故に國家自足經濟と云ふ意味から言へば、此位充分な國家自足經濟は無いと申す可きです。其れと共に、此位世界の平和に無害な時代はなかつたのであります。徳川氏は、他の點には、色々悪い事を致したでありませうが、世界平和の消極的維持者としては、確かに『ノーベル』賞を追贈せられて然る可きでありませう。

### 國民經濟と云ふ思想の起り

歐羅巴に於ては英吉利が侵略的の國家自足經濟を築き上げたと共に、モウ國家自足經濟といふものは維持が出来ないそれは却つて不利益であるといふ事を悟つて、侵略といふことは依然として繼續するも、國

家自足といふことは全然之を捨てるやうになつて了つたのです。此時に於て國の經濟と云ふ考へが英吉利に大變盛んに興つて來ました。國の經濟をどういふ風に立てたら宜からうか、國の經濟を進めて行くに、どうなふ風にしたら宜からうかといふことに、國民舉つて注意を致すやうになつた。それまでは西洋に於て經濟といふものは一個人の經濟、即ち家計豫算の切り盛と云ふことの意味が主であつて、國までも同じやうに家計の切り盛をするといふやうな事の考へは發達して居なかつた。處が外國と自國とを判然と區別して、自分の國は自分の國丈で出来る丈けやつて行くといふやうになると、どうしても豫算の切り盛といふことの必要を感じて來た。此れは東洋と西洋とは正反對に進んで來たのであります。

東洋に於ける經濟てふ思想の發達

東洋即ち支那・朝鮮・日本で用ひる經濟といふ言葉は、初めは國の切り盛といふ意味にのみ限られて居つた。經濟と云ふことは、經國・經世・經綸・經營等といふことと殆んど同じ意味に用ひられて居たのである。經國・經世・經綸・經營等といふことと、殆んど同じ意味に用ひられて居たのである。國の全體を切り盛することを經濟と言ふのです。即ち今日の言葉でいふと、政治といふ事と殆んど同意味である。之を一個人の家計の切り盛に適當嵌めるやうになつたのは、ズツト後の事で、本來の意味では無いのです。支那に經濟類編と云ふ書物があります、我邦にも徳川時代

の學者の著述で經濟を題名としたものは、有名な太宰春臺の經濟錄を初めとし、井上四明の經濟十二論、佐藤信淵の經濟要錄、青木昆陽の經濟纂要、大塚昌伯の經濟五策、大江季彦の經濟新論、古賀精里の經濟文錄、本多利明の經濟放言、正司考棋の經濟問答秘錄、中井竹山の經濟要語等可なり數多くあります。其内容は、今日所謂經濟のことも含んで居りますが、其以外のことを澤山載せてあります。社會政治一般の意味であります。我邦では西洋の經濟學が這入つて來たとき、初て經濟と云ふ字を今日の様な意味で用ひました。多分其は神田孝平氏「經濟小學」と云ふ本、英國人イリス氏の經濟書を和蘭語から重譯した本ですが、其が一番初であらうと思はれます。(近頃竹内謙二氏は瑞典のトーンベルジュと云ふ人がスミスの國富論刊行の年即ち一七七六年頃既に我邦に經濟學を傳へたと云つて居られます。併し其は農業經濟學とありまして、或は農業經營學か農業に關する自然科學かのことで經濟學のとはではないかも知れません)。其後明治廿年頃になつてからは、他の字を無理に拵へて、成る丈け經濟といふ字を使ふまいとすることが一時流行しました。即ち理財と云ふ字の如きは其です。經濟と云ふ字は政治の事、國全體に關するところから、之を唯一軒の家の切盛とか一事業の經營とか云ふ意味に使ふのはどうも當を得て居ないと云ふ考へがあつて、外の字を使ひたいと思つたのは無理はありません。併し今では最早理財といふやうな、後から作つた字は自然淘汰せられて、矢張り經濟と云ふ神田孝平さん時代の字のみが行はれて居ります。私の考

へでは是は元の意義とは異つて居るけれ共、國の切盛、一軒の切盛、詰り同じ道理に基くのであるから、同じ字を以て言ひ現はすは甚だ妙、寧ろ當を得て居ると申す可きかと思ふのです。詰り大きなものから段々小さなものに移つて來たので、西洋に於て小さなものから大きいものに移つたのと丁度反對であります。

### 家政と經濟

今日の考へから申すと一軒の家の切り盛の事も國の切り盛の事も均しく政治で、國の切り盛も政治と言へば、一軒の切り盛も家政と申す、家計を司どる家政、此政の字は初めは一軒の切り盛の意味では無い一國の經營を言つたものです。世間で經濟と云ふ字を大きいものから小さいものに推し及ぼして使ふやうになつて居る今日に於ては、又、此政といふ字を家政學といふやうなことに致して、大きなものを小さなものに使つて居る。大きなものを小さなものに使ふのは宜しく無い様に見えますけれ共、經濟學の眼から言ふと、是は大變に面白い事であつて、國の宰相が國の政治を司どるのも一軒の家の主人が一軒の家を司どるのも同じ事です。大小の違はあるが詰り同じ原則に基くのである。斯う云ふ事實を言ひ表はすに、同じ字で即ち大なる字を小なる場合にも當嵌めるといふ事は差支ないのみならず、寧ろ宜しいと考へます。

### 西洋に於ける經濟なる語の變遷

處が西洋に於いては其正反對で、經濟と云ふ字は元と一軒の切り盛といふ支けの意味しか無いのである。之を國の切り盛と云ふ事に使ふやうになつたは、今申す國家自足經濟主義の時代、十六世紀から後の事である。であるから之を小なる一軒の切盛と區別する爲に形容詞を付けます。政治的經濟（ポリチカル・エコノミー Political Economy）或は國家經濟（スターツ・ヰキルトシアフト Staat wirtschaft）今日では國民經濟（ノオルクス・ヰキルトシアフト Volkswirtschaft）或は社會經濟（ソーシアル・エコノミー Social Economy）と云ふ様な言葉を使ひます。其中で從來一番廣く使はれた言葉で、現に英米では未だ行はれて居る言葉は政治的經濟といふ事でありますが、國民經濟と云ふ方が當を得て居ります。さて、西洋で經濟と云ふ事は今日の文明國、露西亞は別であるが其他の國に付いて言ひますと、拉丁系統の國に行はれて居る字と、チュートン系統、即ち獨逸系統の國に行はれる字と二様あります。

### 拉丁系統の經濟なる語

拉丁系統の字は獨逸系統の字と並行はれて居ます。拉丁系統に於ましては、經濟と云ふ字は *oeconomia* で英語では *economy*、佛蘭西語では *economie*、獨逸語では *Oekonomie*、和蘭語では *economie*、伊太利語では *economia* と云ふ様に皆拉丁系統であります。此 *economia* と云ふ字は、二つの語から出來て

居ります。ecc) と nomia である。ec) といふは希臘語の oikos の拉丁化したものであります。nomia は nomos から来て居ります。oikos は希臘語で家 (house) の事であり、nomos と云ふのは則、或は憲、或は法、或は倫理學で規範と云ひます。ソコデ『エコノミー』と申せば一軒の家を治めて行くの法則又は規範と云ふことであります。此希臘語は皆拉丁系統の國に傳はつて、希臘語から拉丁語になりまして佛蘭西へ行つて economic 伊太利へ行つて economia 英語で economy 等となつたのであります。元とく國の政治と云ふものには些とも關係が無い。一軒の家を切り盛する道、家則、若しくは家憲、家法といふ意味の字であります。故に之を擴めて國も矢張り一つの家と見做して、國の經濟即ち國民經濟のことを言ひ現はすのには、どうも此字では少しく足らないと云ふ感じが誰にも起る。そこで政治的と云ふ形容詞を付けて英語で Political Economy と申す様になつたのであります。即ち政治的又は國家的、社會的と云ふ形容詞を付けて、東洋で本來云ふ經濟と云ふ意味に始めて成つたのであります。併し何れも十分とは云へません。然るに、獨逸に於て國民經濟 (Volkswirtschaft 英語に譯せば National Economy です、獨逸語でも Nationalökonomie と申すこともあり) と云ふ字が段々用ひられて、舊來の國家經濟 (Staatwirtschaft) と云ふ字は國全體の經濟のことを指すに用ひず國家の經濟即ち政府の財政のことと云ふを意味する様になつて來ました。此れが學問的に一番當を得て居りますし又實際の事實にも能く適

合して居ります。殊に今度の歐洲大戦争は國民經濟と云ふ思想の大きいに肝要などを證明したのであります。蓋し一つの國民は一つの組織たる經濟を立て居つて、他の國民經濟とは判然區別す可きもの、區別せられあるものであります。然るに學者によつては社會經濟 (Social Economy) と言つた方が宜いと申す人もあります。詰り社會をなして居る一の經濟組織と云ふことで、日本なら日本と云ふ社會の全體の經濟であると申すのです。然しコレは餘り漠然として居りますのみならず、今日に於ては國民を形作るものが即ち社會を成す所以であります、従つて國民經濟と云へば、其れは社會經濟たることは自明の事であり、さら、漠然と社會經濟と云ふよりも、寧ろ最も簡明に誤解の起らぬ國民經濟と云ふ語を用ひた方が宜しいと思ひます。

獨逸語にての經濟

獨逸語では經濟のことを拉丁系統の字を用ひて『エコノミー』とも申しますが、元來の固有語では『ヴワルト・ウィアフト』Wirtschaft と申します。ヴキルト Wirt とは主人・家長・亭主等の義で今日では普通には宿屋の亭主のことを「ヴキルト」と申します。(西洋の宿屋では亭主が食卓の中央の席に着き其左右にお客が席を取つて食事する習慣があります、獨逸・伊太利などを旅して、田舎の小さい都會の宿屋に泊り



ますと、今でも時々此習慣のある宿屋に泊り合はすことがあります。亭主は中央に座を取つて、給仕の持つて来る大きな骨つきの肉を客の數丈に切つて、自分が先づ其一片を取り、然る後順に御客へ廻します。而して其間亭主は、様々な浮世話や、土地の名物・名所・名人などの物語りをして、御客の興を助け、又案内を知らぬ旅人に参考になることを話します。私なども此を度々経験致しました。此は中々趣味の深い親しみのあるもので大いに旅愁を慰むる助けともなります。此食事の事をヴキルツ・ターフェル即ち亭主の食卓と申し、コレデ食事することをヴキルツ・ターフェルに着くと申します。佛蘭西語でターブル・ドート table d'hôte と同じです。英語でも此佛語を其儘用ひて居ります。今日では亭主は出て来ない方が多くなり、ターブル・ドートと申すと一品選りの好みでない定食のことを申すことになつて居ります。其一軒の亭主・家長・世帯主の經營する道のことを「ヴキルト・シアフト」と申します。即ち亭主道・家長たるものゝ守る可き常道・家長の職務などと云ふ意味で、其が即ち經濟のことになります。一軒の家の經濟は世帯主が其主體となつて立て、居る一の單位であります。家長・世帯主は此經濟を掌つて行く所の責任を有して居ります。故に家長・世帯主の道は即ち一家の經濟の事と同一に歸するので此語を用ひるであります。故に言葉は違ひますが、拉丁系統の家則・家憲の意味の『エコノミー』と全く同一であります。何れも一軒の家の切り盛り、齊家の道といふことでありまして、一國の政治、一國の切り盛りと云

ふ意味は元來含んで居らないのであります。然るに經濟なる思想が擴張して一國の切り盛りをも經濟と申すにつけては、拉丁系統の語と同じ様に何か形容詞を付ける必要があります。ソコデ始めは國家經濟（スターツ・ヴキルトシアフト）今日では國民經濟（フォルクス・ヴキルトシアフト）と申すことになつたのであります。

### 世界經濟の思想

さて右申す通り西洋に於て經濟と云ふ思想も言葉も元々一軒の家に就て起つたものであります。既に社會が進歩して來るに伴ひ眼を放つて見渡しますと、家と同じ様な經濟がイクラも外にあるに氣が付いてきました。組合も一の經濟なら地方團體も一の經濟、會社の如きも矢張り一の經濟をなして居ります。其他縣の經濟もあれば郡の經濟もある。而して進んでは一國民も亦或る意味の經濟を成して居る。否、或意味に於ては世界の間人が寄つて一つの經濟を立て、居るとも考へられる。ソコデ獨逸の學者中には今日では世界經濟（ヴェルト・ヴキルトシアフト Weltwirtschaft）と云ふ事までも言ひます。世界の表に在る我々が世界の産物を以て矢張り切り盛りを色々に行かねば、生活が立たぬ。其爲め成る丈け各國各々其出來る處の生産を有無相通じ、長短補つて經濟が立つて行く。國民、國家の眼からのみ見たら、長短相

補ひ、有無相通すると言つても、それは國の中丈でやる、自國に於て出来ないから全く止して、他國に供給を仰ぐなどと云ふ様な考へは起らない譯であります。世界を一つのものと見ると其は出来る。國家經濟時代には、世界經濟など云ふ考へは無論無い。それが廢れて今日に於て世界經濟となる。處が今度の歐羅巴の大戦争で、世界經濟などと云ふことは容易に談す可からず、談ずるとは却つて危険である。成程世界が全體として進むといふとは美しい思想に相違ない、又其利益も多に相違ないが、それが爲に一國の經濟の獨立を亡ぼして了つて、今の英吉利のやうな有様に陥つて仕舞ふならば是は危険である。英吉利の憂は國の經濟と云ふ考へが餘り薄くなつて、世界經濟にかぶれ過ぎた世界經濟思想中毒の結果だと言ふ人が有る位であります。少くとも此戰の濟んだ後、若干年の間は國民經濟と云ふ考へが益々強くなつて世界經濟思想は著しく變化を受けるのであらうと思ひます（大正十三年九月附記。今日果して此傾向の強いを見るのでありまして、私の豫斷は杞憂でないことになりました）。

## 聯合國經濟同盟の事

先般問題になりました經濟會議の爲めに、佛蘭西の巴里に各聯合國の代表者が集まりまして、日本からも代表者が行きました。其決議も新聞に出て居ります。是れは從來の世界經濟を妨げやうと云ふ一の現象

で、聯合國丈で一の經濟團を作つて獨逸・埃太利は何處までも敵として打潰してやらうと云ふのであります。コレハ世界經濟に逆行せんとする一の現象であります。言を換へて申すと、英吉利が從來の世界主義思想の非を世界に向つて告白したものだとも申せません。千八百四十六年以來英吉利は所謂自由貿易主義を採用し之を實行して、今日ではモウ七十年に及んで居ります。之が爲めに世界に於ける世界經濟的思想を餘程進めたのであります。處が戰をして自分の國が危くなつたから、急に宗旨を變へて、今度は經濟會議・經濟同盟主義、今までの傾向を著しく縮めやうと云ふことになつて來たのであります。英吉利の爲め、是は甚だ不面目だが、併し今までは餘りに國民經濟といふ考へを無視し過ぎた弊に陥つて居ります。一つの國を一つの家と同じ經濟から見ると云ふとから餘りに断け抜けて了つたのであります。前に申したやうに英國に於ては豫算政治が非常に發達した結果、一つの國を以て一つの家と同じ經濟と見るのみならず、世界を擧げて一つの經濟と見やうとまで考へが進んだが、事實世界は未ださうなつて居らないのであります。向後も又た容易にさうなりさうもないのであります。ソコデ跡へ戻つて中心點を、國民的統一と組織の上に求めねばならぬことになりました。中心點としては何處までも一つの國を一つの經濟と見て英國は英國、日本は日本で、一つの秩序的計劃に基づく生活維持に伴ふ統一體一大組織となし各國夫々立つて行かねばならぬ。之を徒らに混同して事實ありもせぬ世界經濟の思想に深入りしてはならぬと云ふこ

とを悟つたのであります。我邦もまた維新開國の國是を益々進めて行くと共に、他方には日本の國民經濟の自立と發達とを圖らねばなりません、單に同盟國への御附合だの、一時的の外交手段の爲めに此大事を忘れて、所謂經濟同盟などに輕々しく賛和すべきではありません。殊に獨逸の利己的同盟などは以ての外の事でありませぬ。

## 第五章 流通經濟の本質

### 經濟の獨立は孤立にあらず

前章に於て國民經濟と云ふ考への甚だ重要なこと、從つて無暗に世界經濟の思想にかぶれて國民的統一と獨立とを輕視するは誤りなる事を説明しましたが、さりとて今日の文明世界に於ては、昔の徳川時代の鎖國の如き、又は獨逸のチューネンと申す學者の唱へた孤立國の理想の如きは到底出來ない相談の空想であります。此度の戰爭で獨逸のゾムバルトと云ふ人は獨逸（並に奧地利を合して）一の自足的經濟を立つる覺悟を要す等と唱へて居りますが是は飛んでもない謬説であります。今日の文明國たるものは何れも

皆國を開いて外國と交通して外國貿易の利益を益々収めなければならぬのであります。乍併それのみ走つて自國の立場を顧みなくなると云ふ事は危險であります、即ち一方に盛んに門戸を開放すると共に他方には常に一國の經濟と云ふ中心を忘れてはなりません。兩者を適度に調節せなければならぬのであります。一國は一つの組織を成す經濟であつて、他の國の經濟は又別な統一體であるといふことは何處までも認めて方針を立てなければなりません。其如く一軒の家は一つの經濟であります、田舎の農家の自足經濟のやうに、米も買はず芋も買はず悉く自分の田畠で出來た物を以て生活すると云ふやうな状態は、國民の大多數に向つては、モウ望む可きことではありません。ソレは進歩の道がありません。有らゆる供給を外より仰ぐことは必要であります。さりとて又自分の經濟と人の經濟とを混淆しては不可ないのであります。矢張り我が經濟、一軒の經濟は何處までも獨立を維持して行く様に、全力を注がなければならぬ。即ち一軒の經濟の收支を適合して行くといふ、是れが大體の着眼であります。其大體の方針を妨げない限りに於ては、幾らでも門戸を開放す可きであります。然し門戸を開放した爲に收支の適合が出來なくなるのは宜しくない。一軒の家も一つの國も其道理は同じであります。此點から申しても一國民の經濟と一軒の經濟とを同じ經濟と云ふ字を以て言表はすは甚だ當を得て居ります。

流通經濟は大勢なり

今日の經濟は一國の經濟にしても又一家の經濟にしても、共に最早自足的では有り得ない。其反對の流通經濟でなければならなくなつて居ります。故に元來の經濟と云ふ意味と著しく違つて來たのです。前に申した拉丁系統の *economia* と云ふ字も、獨逸系統の *Wirtschaft* と云ふ字も又日本支那に於て小さな意味に用ひる經濟と云ふ字でも、元來は自足的と云ふことが主になつて居りました。一軒の家の切り盛りと云ふことは、即ち一軒の家で要る物は、成る丈其中で作らうと云ふことを前提として居るのです。それに背く者は經濟の道を誤つ者といふ風に考へて居りました。此思想は經濟と云ふ事に何處までも附いて行きます。乍併、其適用は大變に變つて來ました。適用の變つたといふ事はつまり經濟の進歩であります。然るに依然として昔の意味と昔の適用とを其儘今日に使はうとすると誤つた經濟思想に陥るのであります。是れは公的並に私的にどの位害をなすか分りません。

物に付ての收支適合

抑も昔の經濟と云ふのは物の上に就て收支の適合を圖ることが根本の趣意であります。其れが昔の經濟

即ち家政の要領でありました。誰がさう定めたと云ふ譯ではありません、事實上是非認めなければならぬ可からざる根本の事實であつたのです。何故となれば經濟上の色々な設備が發達して居ない時に於ては、他から買へる他人から供給を受け得るといふ事を當てにすることが出来ません。大抵の場合には賣りに來るであらう、市場へ買ひに行つたら賣つて居るであらう、併し物資の供給は充分で無いから、時として絶えることもあり得ます。然るときは收支適合は直ちに破れて、生活の維持に困ることになります。故に非常な場合に際して狼狽しないやうに豫め備へて置く事が必要です。第一何に就てそれをしたかと申すと、日本で言へば米、西洋では麥でありました。他の物は無くても生活が出来るけれど日本人たる我々は米が無ければ生活上大に不便を感じます。従つて昔は家々戸々必ず多少の米の貯へを持つて居る必要がありました。又政府としても國民をして常に多少の餘穀を持たしめるやうに勉めたものであります。併し人民が餘穀を持つて居るのみでは未だ不安心であるから、國費を以て國家の機關として常平倉、或は支那で言ふ平準倉といふものを置いて、豐年の餘穀を貯藏して凶年に備へたのであります。

支那の平準の政

史記に平準書と云ふものがあります。抑ち、以均天下郡國輸斂、貴則糴之、賤則買之、平賦

以相準、輸歸三千京、都、故命曰「平準」とあります。其平準書は一つの經濟書云は、當時の經濟史です。平準といふは史記を編纂した時代の支那の經濟の一番の眼目でありました。洪範の八政、一に曰く食貨で、其食貨の政の最大任務は食物の供給を安全にするにありませぬ。ソコデ平準といふは今日の言葉で言ふと調節と云ふ事に當ります。今日我邦では米價調節とか物價調節とかいふ語が流行ります。今更の如く調節と言つて日本では騒いで居るが、支那におきましては遠く昔から平準といふことを言つて居りました。而して平準の役所といふのが有り、平準の爲の官吏が有りまして是が非に研究されたものであります。漢書以後になつては平準書といふものはありませぬ、其代り食貨志といふものが歴代の歴史の中に大抵あります。二十四史大抵食貨志といふものを載せて居ります（此は、私の提案が嘉納せられまして、帝國學士院に於て加藤繁、和田清兩氏に依頼して邦譯を作り、註釋を附加したものを作ることになりました、目今（大正十三年九月）既に五六種の邦譯が出来て居ります。何れ數年の後には、刊行の運びになることであらうと存じます。然る上は支那經濟史の研究に、大なる助となることであらうかと存じて居ります）。是は何れも一の經濟史であります。而して其要領は矢張り平準の事に存して居ります。歐羅巴邊でも同じ事です。支那程古く發達して居りませんが、前申した通り十六世紀國家自足經濟の起る前に於ては、平準調節といふことは幾多の政治家が心を勞した所であります。

平準書の國譯「近刊」商學研究  
に試刷を載せて置きました。

### 調節の今昔

今日は米價の調節物價の調節即ち物の直段を調節しやうと言ふのですが、人間の勝手で定めたのでない處の直段を人間が調節しやうと言ふ、出来ない相談、出来ない事を出来さうと言ふ是れは間違であります、けれ共、物を調節するといふ事は或程度までは必ず出来ることでもあります。米價の調節と云ふとは米穀の調節とは違ひます、一石十四圓のものが十四圓五十錢・十五圓・十六圓と段々に騰る、其が餘り高く困るとか、或は餘り安くて困るとか云ふ時に、之を調節しやうと云ふのが米價調節であります。米の分量をどうすると云ふ譯では無い、即ち物に就ての收支適合では無いのです。價に就ての調節を圖るにも多少物を左右せねばなりませんけれども、要は其物を調節するのでは無い、米穀調節ならば物に就ての調節、平準で其價如何は問はないのです。國民の喫べる丈の米が無くては困る。一朝凶作に會つた時に、此常平倉を開いて供給してやればそれで適合する。其爲にやる物を皆持つて居なくてはならぬのです。であるから此平準と云ふ時代には、他の物は兎に角穀物に付ては、今日各國のやつて居る處と正反對のことをやつて居りました。

今日英吉利は自由貿易國だから別だが、其他の國は各國共農業保護の爲に、外國から穀物の輸入を成る

丈け止めたいと勉めて居ます。日本でも外國米に對して税が掛けてある、餘り高くは無いが先年來兎に角掛けた。それは外國から米が這入るやうになると、日本の米の出來高が減つて困るから、國內で米の出來るやうにしやうと云ふので、是は物に付ての調節であります。處が昔の米に付ての調節は反對で、外國からの輸入は全然自由にし、之れを獎勵して米なり麥なり成る丈け這入るやうにする。反對に米なり麥なりの出て行くことをナカク、喧しく言つて取締りました。必要に應じては全然それを禁止しました。

支那で言ふ處の防穀が其れです。今では支那は苛め付けられて居るから防穀令の勵行は出來ないが、以前は防穀令で米の輸出を禁じて居りました。今でも、上海あたりでは、米の輸出は禁ぜられて居ります。但し其を餅に搗いたものは差支ないので、嘗て日本の米價の高い時私の知人が支那餅の輸入を企てたことがあります。朝鮮も日韓合邦になるまでは屢々各地の地方長官が防穀令を出して、中央政府に相談なくしてやつて居りました。米を朝鮮から買つて日本へ持つて來て賣る商賣人は、其れが爲めに商賣が止まつて困つたことがあります。防穀令は今言ふ意味から外國へ穀物の出るのを止めるので其代り這入るのは自由任せます。

今日は穀物が外國へ出る事は幾ら出て行かうとも構はぬ。否寧ろ出ることを獎勵するので、前申した時代とは正反對であります。と云ふのは昔は何でも穀物が無くては不可ぬ、喫べる物が無くてはいけぬと云

ふのでありました。其故は外國へ出て行けば自然にそれが減つて困る。其不足に依つて又價も高くなり、それを食ふ人が困るから、度を計つて出て行かないやうにする、爲に國內の供給が充分だから何時でも安心である。其上米が多く價が安くなり、國民が安い米を食へるといふことが政治の根柢であります。今日所謂米價調節は寧ろ高い米を國民に食はせても農家を保護しやうと云ふので右とは正反對であります。即ち昔は總て物が其處に充分あることを主眼として、物に付ての收支適合をやつて居たのです。國全體としても一軒の家としてもさうであります。一軒の家では今日の様に電話を掛ければ酒屋も菓子屋も魚屋も何でもかんでも間に合ふ、否チヨツと一町か二町往來を歩く中に、一切の品物は皆調つて了ふ、どんな御馳走でも出來るといふ有様で、物に付て收支適合を圖る必要は無い。否タント買つて來れば反て損になりません。一つ例を以て申しますと、神戸の脇に二樂莊と云ふ大きな別莊がありました。本願寺の法主様が御拵へになつたものです。此和尚様は非常な偉い人であつて、何でも大規模の事が好きだ。或は嘘かも知れませぬが、色々新工夫をなさる中、どうも牛肉を少し宛買ふのは不經濟だ、濠太刺利亞から氷詰の牛肉を何千斤とか何百斤とか一度に買ふと大に安く附くと言つて取寄せた。處が取寄せたは取寄せたけれ共、二樂莊へ來てから保存法が宜くなかつた爲か、段々味が變つて、何百斤といふ牛肉は其一部分しか喫べないで跡は皆打遣つて了つた、爲に却つて一斤何圓といふ高いものに附いたと云ふ話を聞いたことがあります。生

の牛肉が直き神戸に澤山好いのが有るのに氷詰の高い牛肉を喫べたと云ふ。是は甚だ可笑しな事に聞えませんが、昔何時牛肉が得られるか分らぬ時には氷詰の牛肉でも澤山取寄せて買ふのが宜い。今日はそんな事をしなくても、氷詰の牛肉でも生の牛肉でも普通の處に於ては直きに得られる。澤山買つて置かなくても食ふ丈け宛買つて置けば宜い。樽で呑んだ酒が旨いと言つて一樽取寄せて置けば、段々味が變る。それよりも一升徳利に酒を買つて來る方が旨い酒が飲まれる。醬油を樽で買つたら大變安く付くといつて、夫婦差向ひの家で一樽買つたら、成程家計簿記の上では安く附くかも知れませぬが實際は却て高く附く、儲が生へる味が悪くなる。それよりも一升常り高くても、矢張り一升か二升小買した方が結局旨い醬油が頂ける。何でも澤山買つて置くといふことは、今日では寧ろ不經濟で、小買に刻むやうになつて居る。即ち物の上に於ける收支適合に付ては最早左まで苦心を要しない。自分の家に保管して置くより、自分の家には錢さへ保管して置けば宜い、錢さへ持つて居れば何でも得られる。米だの醬油だの味噌だの家に貯へて置くより、錢にして置くが一番安心だ。錢も自分の家で保管するよりも銀行に預け、郵便局に貯金にして、貯金の帳面一冊持つて居れば済む。昔の人は倉を幾戸前も建て、藏つて置いた。今日は通帳一つポケットに入れて歩く。之を以て倉の三戸前も四戸前も物を持つて居ると同じ働きをする。従つて物に就ての收支適合の必要は其範圍が極めて少いとなつて了つた。約めて申せば昔は物に付ての收支適合を主とし、今日は物の價に付ての收支適合を主眼とする様になつたのであります。

### 金錢上の收支適合

日は物の價に付ての收支適合を主眼とする様になつたのであります。

此價に就ての收支適合といふは分り易く申せば、金錢上の收支適合と云ふことであります。金錢を以て買ひ金錢を以て賣る。金錢の上に於て收支適合を立てるといふ事が主である。而して金錢に付て收支適合といふからには、必ず人と相交渉しなければならぬ。物を賣つたり買つたり遣つたり取つたり貸したり借りたり、廣く世の中に出しますことで自足で無い孤立で無い即ち之を流通經濟と申す所以であります。昔は自足經濟の世で、今日は其反對に流通經濟の世であります。流通場裡に於て收支の適合を圖るといふことが、今日の經濟の極意であります。一軒の經濟も國の經濟も共に左様なつて居ります。國家自足經濟は最早望まれない。世界といふ大きな流通場裡に處して、さうして其の收支適合を圖る。餘りに外國から輸入し過ぎてもしけず、餘りに輸入しなくても不可ない。そこに即ち收支適合の妙がある。又國家から言つても、人民から税を取つて之を使ふのですが、是れは人民から強制執行しても取れるから、幾らでも取れさうなものだが、さうはいかぬ。民力を涸らしては不可ぬ。と言つて唯徒らに民力休養民力休養と言つて、只管に税を取らない様にせねばならぬとなると事業は出來ない。事業を充分に擧げ様とすれば、それ

に對して使ふ處の費用も自然多くなる、人民の負擔を軽くして、負擔の度合とそれを使つて出來す事業との割合が調和の取れる様に勉める。此の收支適合が國家經濟の極意であります。凡そ經濟たるからには收支適合を以て生命とすることは何れの世でも變りはありません。處が從來の收支適合は物に付ての收支適合に限られて居つて、今日の時勢の進歩に伴はないのです。經濟と言へば即ち物に付ての收支適合と考へるのは今日は當りません。今日は是れより遙かに肝要なるは價に付て、即ち金錢上の收支適合であることを忘れてはなりません。是れを忘れる爲めに經濟上種々の間違ひが起るのであります。

## 收支適合の眞意

さて收支適合と申せば二つのことを含んで居ります。即ち收と支、出るものと這入るもの是であります。出るものを全く無くして了つても、這入るものが全く無くなつて了へば矢張り零です。出るものが殖えても、這入るものが多くなれば收支は適合します。我々の經濟は、常に收と支と二つの力から成立つて居ります。處が我々の眼に觸れ易いのは、收の方でなく支の方であります。どうも出るのは目立ちます。そこで經濟と云ふ時には、支の方から先づ着目すると云ふのが何處でも始まりであります。即ち經濟といふことは儉約と云ふ事と同じ意味である様に屢々使はれます。彼は非常な經濟家だ、非常な節儉家・理財家だ

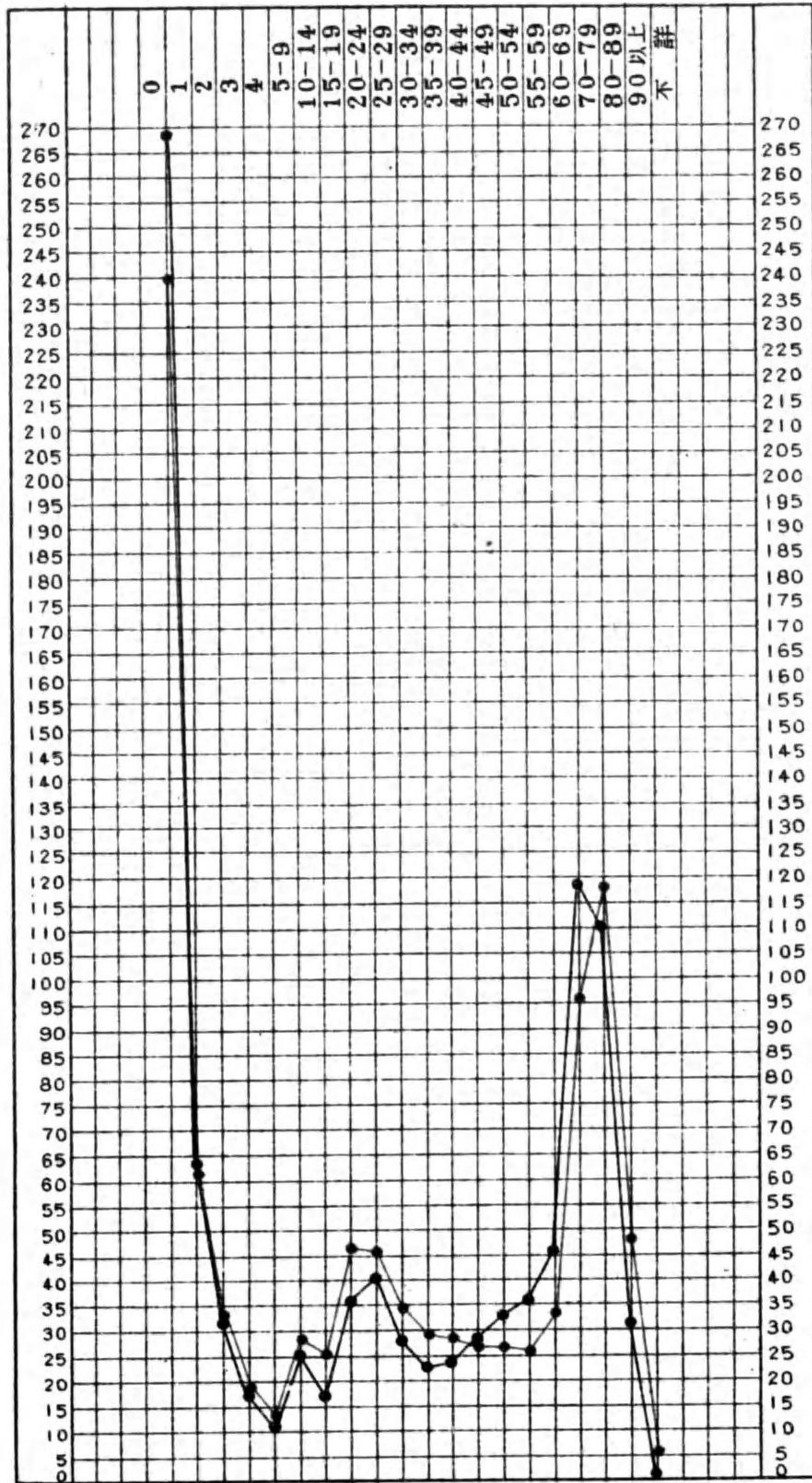
と申すと、這入る方を多くする人のことではなく、唯だ無暗に物を使ふまいとし、吝嗇坊だと言はれる程までも儉約して出る方を抑へる人の事を指すのが常であります。唯だ費用の掛らない様に勉める、電燈よりもランプの方が經濟だ、ランプよりは種油の方が宜い、種油より蠟燭の方が經濟だ蠟燭よりは魚油の方が經濟だ、否、燈火を些とも點けず眞暗闇でポカンとして居る方が一番經濟だと考へる。其の代り何も仕事が出来ない、之は宜しく無い。量入制出と申す語がありますが、此の如き人は實は量入は度外に置いて只管制出方に計り心を用ひます。唯使ふものさへ少ければ宜いと言ふは所謂握飯主義です。握飯に澤庵で食事を濟ますと云ふ人が随分あります。然し多くは外へ出たとき人の前丈けで家へ歸れば相當の物を食つたり着たり呑んだりして居る。否無駄な物まで使つて居る人でも、役所や會社に勤める時は竹の皮に握飯で衆に模範を示す。茲の社長さんは竹の皮に握飯だア、偉いなどと言つてゐる。それは家へ歸つて旨い物を食べても兎も角、其事が善い事なら偽善でもやるが善いが、握飯に澤庵丈け食つて居つてそれで人間が充分な働きが出来るならば、斯んな簡單な經濟はありません。我々は三食悉く握飯と澤庵にして他の物を止して了ふとなれば、費用は確に著しく省けます。然しソレは出來ない相談であります。嘘であります。能く世間では斯う云ふを申す。日本國民が一人に付て一日一錢宛費用を省いたならば、一年に三圓六十五錢だ、それを六千萬人に掛けると何千萬圓となる。それに利息を積ると五十年にして幾



ら、百年にして幾らと言ふ。それは成程積んで置けばさうなる。問題は積んで置けるか置けないかといふ點にあります。最も分り易く申せば我々は何も食はないで居たとするならば一番費用は掛りません、裸體で何も食はないければ何も要らない、皆貯蓄して皆利息を生み出す、五年か十年で日本の二十億の借金を返して了ふことは譯無いことです。然しソナ事は空の空談で勘定する丈馬鹿らしいことであります。握飯主義もさうであります。成程人の前でチョット一週間や十日は握飯と澤庵でやつて行かれるが沖も永く續くもので無い（大正十三年附記。九月一日丈けか米を喰つて其れで大に記念になる功德をしたつもりで居た人がありました。これは丁度御節句に豆入りを食へるつもりなら面白いかも知れませぬが、眞の經濟から云へば無意味な話であります）。澤庵を食つて居る人間は澤庵丈の仕事しか出来ない。それが出来たら早速それはやるが宜い。歐羅巴の大戦争で、獨逸では戦時麵包といふ物を拵へました。K麵包と名づける非常な粗末な物ですが之を食べて我慢して居ます。人間は偉いものです。心の働き一つで國家の爲なり、國の存亡に關する時となれば、一年二年に亘つて、粗衣粗食をして働きの出来る、然し平常はそれは出来ない。あの戦争に遭遇して居るから出来る。我々日本が獨逸と同じ地位に立つたならば、我々は或はモット偉い辛抱をすることが出来ると思ひます。何れも國の大事といふ時だからやりますが、平常はそれは出来るものではありません。火事の際には子供でも重たい物を擔ぐ、火事で無い時には出来ない。火事に出

會つた積りになつてやつたらと言つても、假りに其積りになるといふことは出来ません、眞に其場合に臨まなければ出来るものではありません。國家非常重大の時に會つたと思ひ火事に會つたと思つて見ると言ふのは無理です、却つて極端な節儉の爲めに國民の活力を減殺します（大正十三年附記。現護憲内閣とやらの儉約の宣傳、殊に贅澤品關稅の無鐵砲な引上げは確かに此の非難を免れません。私が初めて此言を茲にのせてから數年後の今日、エライ大藏大臣だと云はれる人が、こんな履き違ひをやつて大得意で居られるのです。私は私の説法を未だく休むことの出来ないのを残念に存するものであります。我邦に於る幼児死亡率の高いことも、其原因の一つは茲にあります。就中寒心に堪へないことは、我邦青年死亡率の高いこと、取り分け青年婦人の死亡率の高いこと、是れであります。内閣統計局の二階堂統計官は、深く此問題に心を潜められて、綿密な研究を遂げて、其結果を『本邦青年の死亡率』と題する一文に記して國家學會雜誌に掲げられ、又た『大正二年人口動態統計略說並に死因統計略說』といふ内閣統計局の出版物 大正六年 中に詳述して居られます。今最近の統計即ち大正十三年刊行の『大正十一年日本帝國人口動態統計記述篇』中から、一表を引いて御目にかけませう。

大正十一年死亡者男女年齢別 (千分比例)



(統計局編纂大正十一年日本帝國人口動態統計記述編第三〇頁ニヨル)

死亡者男女年齢別 (大正十一年)

年齢	實數		千分比例	
	男	女	男	女
0	655,740	151,947	267.9	240.7
1	41,919	40,162	63.9	63.6
2	21,736	21,520	33.1	34.1
3	11,736	12,139	17.9	19.3
4	7,374	7,900	11.2	12.5
5-9	16,833	17,999	25.7	28.5
10-14	11,221	16,223	17.1	25.7
15-19	24,351	30,017	37.1	47.6
20-24	26,365	29,631	40.2	46.9
25-29	18,587	22,108	28.3	35.0
30-34	15,249	18,815	23.3	29.8
35-39	15,861	18,394	24.2	29.1
40-44	18,957	18,166	28.9	28.8
45-49	22,089	17,190	33.7	27.2
50-54	23,991	17,501	36.6	27.7
55-59	30,353	21,500	46.3	34.1
60-69	77,583	60,718	118.3	96.2
70-79	73,018	74,520	111.4	118.1
80-89	21,357	31,486	32.6	49.9
90以上	1,514	3,257	2.3	5.2
年齢不詳	19	8	0.0	0.0

右の中千分比を圖表にして示せば、左の通りであります。

大正四年三月臨時刊行『巴奈馬太平洋萬國博覽會出品日本帝國人口靜態及人口動態統計描畫圖並該描畫圖の基づける統計表』と云ふ統計局出版の冊子には左の圖と説明とが載せてあります。七六一七頁 挿入前圖

又大正十一年の人口動態統計記述篇には、肺結核に因る死亡に就て左の通り記してあります。

本病に因る死亡は八萬五千五百十五人で總數死亡の六分六厘を占め、前年の六分四厘に比し、二厘を増加した。男女の割合は、男六分五厘、女六分八厘で、女は男より少し多い。

年齢は十五歳以上十九歳及二十歳以上二十四歳の兩階級に於て最も多く、之より若年及高年齢に於ては少く、本病死亡者の過半は青年及壯年である。然も大正十一年と九年との比較に於ては、二、三十歳の本病死亡割合増加し、大正十一年と十年との比較に於ては、十歳乃至三十歳の本病死亡割合の増加しつゝあるのは誠に寒心に堪へない現象である。

職業關係は、鑛、工業者、商業者、交通運輸業者、公務自由業者に多くて、農業者、漁業者は少い。

本病に依る死亡率最も多いのは東京で、同府總數死亡の一割二分二厘を占め、之れに亞ぐは、沖繩、神奈川、大阪、京都、兵庫、静岡等、最も少いのは岩手の三分で、東北の諸地方より茨城、千葉、山梨、長野、高知、宮崎等亦少き地方である。(四一—四二頁)

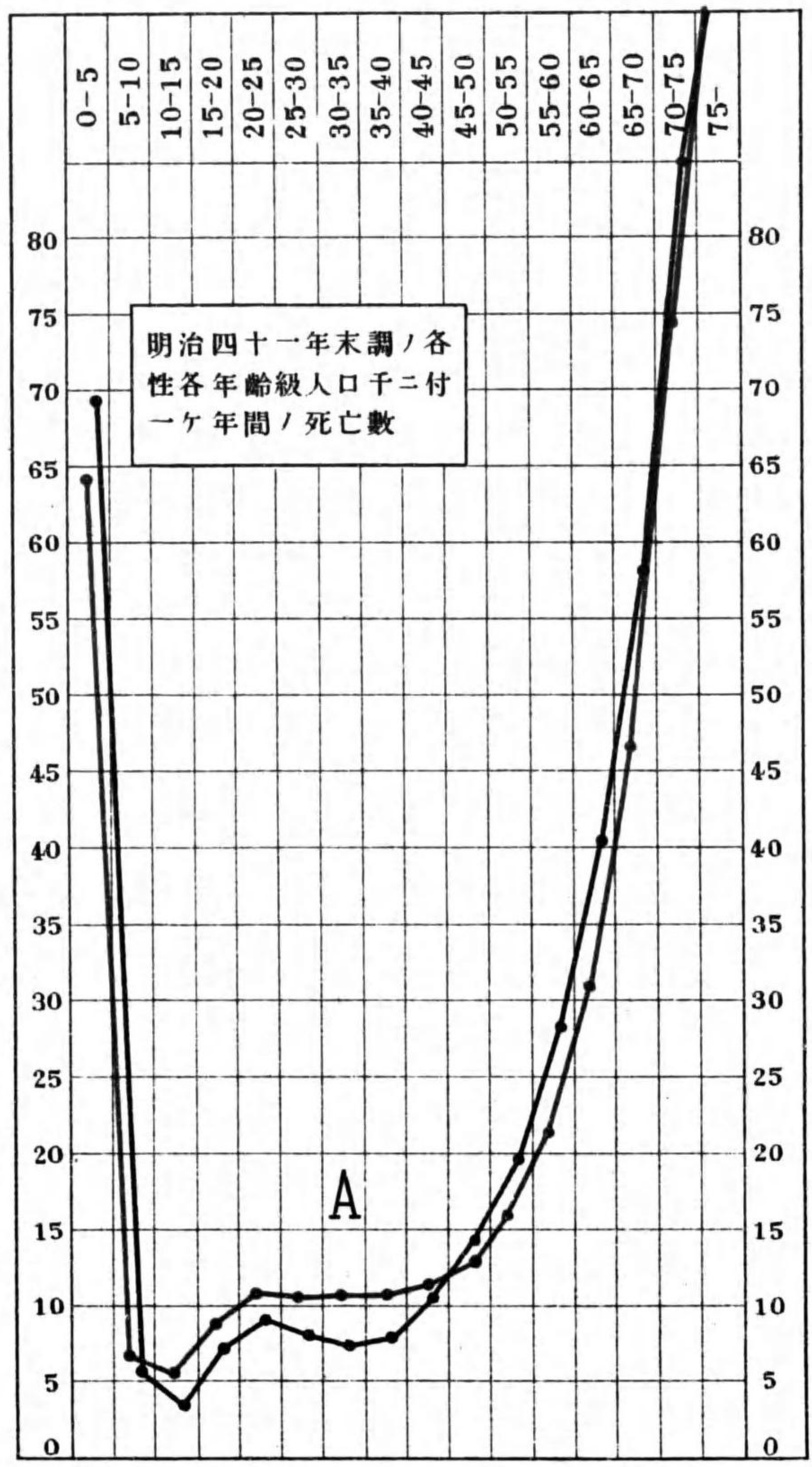
右書に掲げた圖は甚だ參考となりますから、左に模寫して掲げて置きます。七六一七頁 挿入後圖

### 支なければ收なし

さて、話は前に立返りまして、收支と申す支がなければ收も亦ありません。相當な支出が無ければ收入

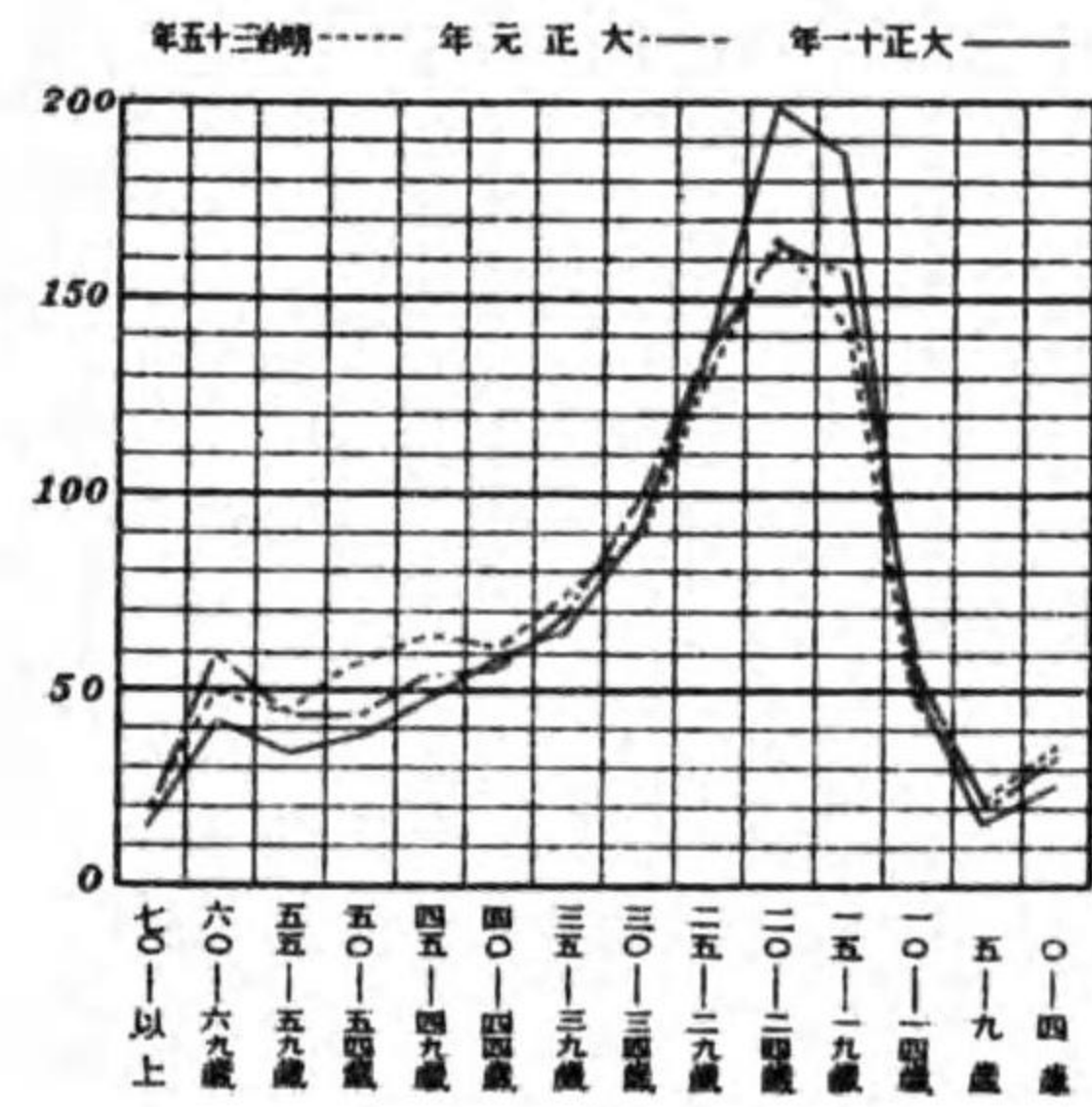
は得られません。人間の働きはそれ相當の物を費さねば用を爲さないのです。文明の高尙なる發明發見、夫機械の應用はそれだけの生活の程度を保つて初めて出来る。唯だ出る方の儉約のみに熱中し出る方を節しさへすれば宜い、入る方が非常に減るのは些とも考へないとなれば、出ること成程減るだらうが、働きの亦少い。經濟とは此の如き謂ではありません。出る方も減す、併しながらそれが爲に若し入ることが減れば何もならない。反對に出るものが殖えても入る方が更に多く殖えれば其方が經濟に合ふのです。收と支とは必ず伴ひます、別々に考へられませんが、處が世上に言ふ經濟とは唯だ一方のみを見る傾きがありまして單に儉約と申す。儉約も確かに經濟の貴ぶ可き一面であります。乍併其れ支では眞の經濟とはなりません。否、收入を殖やすこと即ち人の富を作る力を殖やすといふことが、遙かに肝腎であるのです。自足經濟の時代にはさうで無い。自足經濟に於ては出るものを減すといふことが大抵の場合に收支適合を來す所以でありまして、收支適合上の結果を好くしやうと云ふのには、十が十まで殆ど支出を減すことを意味します。何となれば其時代に於ては人の働きは大抵皆均一であります。人の働きは極めて限られて居り其能率は甚だ低いものであつて收入は別に殖やす道がありません。従つて費用を節する外方法は無い。收と支と二つに就て工夫するを要しない唯一つの支出の方丈け氣を付けければ濟むし、又其れより外に道がなかつたのであります。入る物は定まつて居りました、入るものは十なら十と限られて居ります。

性別各年齢級死亡率



日本人ノ年齢級別死亡率中十五歳以上四十五歳迄ノ數階級ニ於テ女ノ率著シク高シ從來此ノ現象ヲ解スルニ主トシテ女ニ妊娠及産アルニ原因スト爲セリ、然ルニ近キ研究ノ結果ハ女ニ固有ノ疾患及不慮アルノ外日本人ノ女ノ特徴トモ見ルベク此年齢級ニ著シク結核多キニ原因スルコトヲ證明シ得タリ

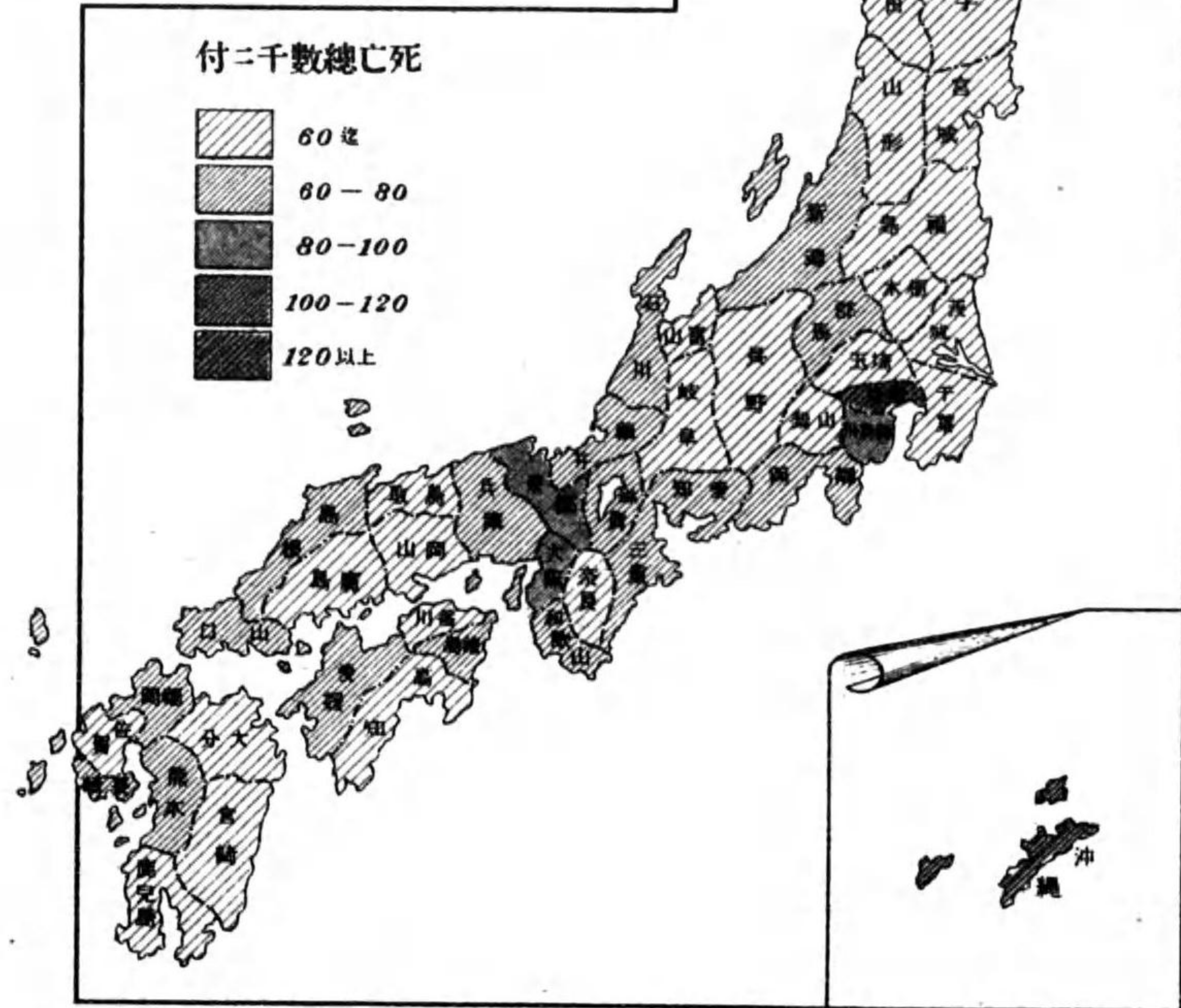
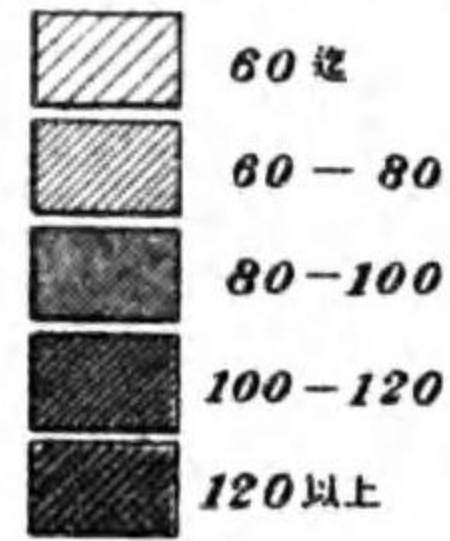
別齡年者亡死核結肺  
(例比 分千)



亡死核結肺  
(年一十正大)



付二千數總亡死



従つて九つ使ふよりも八つ使ふ方が宜い、八つよりは七つ、七つよりは六つの方が宜いといふ事になつて居ります。片方が變らないものですから其他方を約める外に方法はなかつたのです。

### 農民と流通經濟

自足經濟は多く農業時代に行はれました。農業と云ふも今日のやうな耕作方法の非常な進歩、肥料の改良、或は耕地整理・灌漑排水法と云ふやうなものが殆ど無い。誰が耕して見ても一反歩から採れる米は大槪定まつて居ります。芋を作れば採れる芋の分量は定まつて居る。蕎麥を作れば蕎麥の分量は定まつて居る。是れを増し度くも増しやうがありません。農業といふものは常に土地を相手の事で、人が幾ら骨を折つても、土地はそれに應じた丈の報よりしらない。是は先きに行つて更に詳しく申しますが、人が益々骨を折る程土地の報ゆることが減つて來ることさへある。其外に農業には氣候が重大な關係を有つて居ります。此の氣候は人間の力でどうすることも出來ない。降る雨は防げないし、降らない雨はどうしても降らすことは出來ない。雨乞といふこともあるけれど、氣休めの方法に過ぎない。又氣温の寒熱といふことは、如何に文明が發達しても左右することは出來ません。日本で申せば二十日に風が吹き、二百二十日に風が吹くといふことはどうする事も出來ない。もう世の中は大正になつて居るが二十日は依然として二十

日です。法律を以て雨を廢止することは出来ません。其れ故に農業に依つてのみ立つて居る國民位、天然の支配を受けて居るものは無い。天の一つの現象に依つて自分の運命に非常な違ひを來す。さう云ふ果敢ない世の中に於ては、唯だ出來るだけ費用を減じて置いて、眞逆の時に困らないやうにするのが經濟上第一の要領であつたのであります。今日は農業以外の生産が多くなり、又農業の上でも成程日光を左右することは出来ない、雨の分量、風の吹き方まで動かすことは出来ませんが、人力を以て之に抵抗することは出來る様になりました。雨が降つても作物が腐らない様に、風が吹いても作物が倒れないやうな工夫は段段凝らすことが出来る。斯く天の打勝ち難きを人力を以て打勝つて行くには、唯だ費用を減する一方ではいけません、天然に打勝つ設備をしないではなりません。其れには金が要ります、費用が掛ります。耕地整理をすると言つても餘程無駄な事に金を使ふやうで、馬鹿な事、抛つて置いて米は出來る、耕地整理をしたとて收穫が二倍にも三倍にもなるものではない、無駄な金だと言ふ人もある様です。尤も日本の耕地整理は大分無駄をやつて居ますが其れは耕地整理が悪いのではなく、日本の耕地整理のやり方が悪いのです。耕地整理をすれば收穫が殖える。併し二年や三年では結果が擧げられない。其間澤山の借金をすれば利息を拂つて行かねばならぬ。今日勸業銀行農工銀行が百姓の借金が出來る様にとやつて居る。それでも未だ百姓が借金をして呉れないと言つて識者は大に嘆じて居ります。處が百姓は借金して使つた、その使つ

た利息を拂つて餘りが有るかといふとそれが無い。幾ら農工銀行を拵へても、只で借して呉れると云ふ譯は無い。矢張り利息が附く、百姓の業といふ者は元々非常に利が薄い業であります。非常な低利資金と雖も尙利を拂はねばならぬ。利を拂つた上に元も返せるやうな農業の經營といふものは、相當頭腦の有る人で無ければ出來ません。農民の頭と力が進んで來ないのに、唯だ農工銀行だけ拵へて、百姓が之を利用しないと言つて小言を云ふのは是れは無理であります。資本を使つて其れだけ収入を殖すといふことは、流通經濟にスツカリ這入り切つた人に付いての話です。未だ今日の日本の農業の状況の耐へ切る處で無いのです。我邦の農民はスツカリ未だ流通經濟に這入つて居りません。世の中の一般は最早自足經濟で無くなりましたが、地方の農民だけ置き去りにされて居ります。是即ち所謂農村問題が起る所以であります。

### 舊藩の經濟

昔は百姓が自足經濟を營むのみならず、此百姓を治める殿様も自足經濟に依つて立つて居ました。茲は金澤ですから加州藩の例を以て申して見ませう。加州藩は藩の領分内だけで出來たもので其經濟を立て、居りました。外へ出るも這入るもナカ／＼嚴重に止めて了つたといふ話です。仙臺・薩摩・長州等も同様でした。従つて日本でありながら藩によつて物價等も著しく違つて居りました。加州の物價と江戸大阪の

物價とは大變違ふ。舊幕時代の一番偉い經濟學者と言つても宜しい海保青陵といふ人が、金澤へ来て、加州藩の經濟と天下の經濟と大に違ふことを見て其事を書いた意見書が傳はつて居りました。私は一本を藏して居りますが其中には餘程面白い事を書いてあります。彼は米の事に就て斯う云ふ事を述べて居ります。

『加州米と云ふのは殊の外悪しき米にて、口へ入れればグシャ／＼して一向膏のなき米にて甚だ悪き米也、鶴(青陵の名)杯も加州は善米は出来ぬ處にて悪き米許り出る所なりと心得て居りし也、御當地へ來りて見れば天下第一の膏地にて美梁也、これは悪き米を大阪へ廻して能き米を喰つぶす法也』日本經濟叢書卷「御當地へ來りて見れば出津、入津共に御制禁ありて六ヶ敷也、今加州の善米を大阪へ不殘廻して越後の米を御買ひなされば二十萬石三十萬石は忽ち出てくる事也、値段は金澤の半分位なる可し、米も悪しからぬ也』

五七と申して居ります。又鱒に就て面白い事を言つて居ります『一體北海の鱒は膏殊の外に多し、江戸の鱒を十匹喰たるより、金澤の鱒を三匹喰ひたる方腹へもたれて何時までもオクビに出る様にて、顔も手も唯ヌル／＼する程膏強き也、扱鱒を擔ひ棒のシナル程にかたげて賣歩く、夜分も五ツ半四ツ時迄賣歩く其より栗ヶ崎・宮ノ腰へ歸る也、金澤の人喰ひてもサシテ飯を喰ふに不自由なこともなければ餘り安き物なりとてムダ喰に喰ふ也、ムダ喰の錢は栗ヶ崎・宮ノ腰へ落れば他國へ出づるよりは増なれども、ムダ喰を止ても苦きことなければ、あの鱒を他國へ出したる程ならば四國九州の鱒の倍も膏氣あれば値段も

高ふ賣れることなる可し。何故に俵物にせぬとぞ、夜分迄賣歩くは餘る故なり、國の寶をムダ喰にするは天帝の思召にも合ぬこと也、承はれば近年鱒の多く取れたる年に勝手次第に出津被三仰付たる由也、此年に干鱒不足にて百姓大に迷惑したる由、其後鱒津出を制せらるゝと云ふ事也、鶴竊に考ふるに是百姓の懶也、御政の悪しきにあらず、鱒多く取れば津出勝手次第に仰付らるゝこと尤も千萬也、百姓といふ者は己が田を作りて米を拵ゆるが己の業也、此鱒の津出し有るをウツカリヒョンと見て居てコヤン時節に至りて鱒不足なりと云ふて騒ぐは人情にあらず、是は愚なるのか巧智なるのなる可し、大愚は人情に合はぬもの也』五八一・五八二頁

とて大に加州人を罵倒して居ります。是れ即ち舊幕時代の自足經濟の最も著しい例であります。今日と比較して殊に興味ある現象です。

### 今日の農村生活の矛盾

今日は大變に違ひました。併し未だ我邦の農民は著く自足的な生活を營んで居るのです。所が其上に立つ所の經濟は最早自足的ではありません、發達した流通經濟です。私の考へでは、是が所謂農村疲弊の大原因だらうと思ひます。兩者の不調和の爲に依然として自足的なる農村は苦んで居ります。今日は百姓は自足經濟をやつて居りましたが、上は流通經濟であります、農民を治める知事は俸給を政府から貰つて



居つて、何時轉官轉任するかも知れない身分の人であります。以下の官吏も皆さうであります。譜代恩顧の關係も何もありません。之に反し昔の殿様は凶作に會へば百姓が困ると同じに自分も困ります。凶作で百姓の取るものが少ければ殿様の収入も少くなります、従つて成る丈凶作を防ぐことに注意して、常平倉なり何なり拵へました。今日の知事にはそんな必要は無い。青森縣が如何に凶作であつても、青森縣知事の俸給は些とも減りません。青森縣で米は一粒も取れなくても自分の収入には關はりません。他所から取寄せて食べて居られます、少しも生活に影響を被りません。昔の殿様と比べ物にならぬのであります。昔の殿様は百姓と利害の關係が深い、今日は百姓の利害は知事の利害と同じであります。少くとも知事の臺所には關係が無く、立關だけの關係であります。立關的利害關係・臺所的利害關係といふものは其都合に於て餘程違ひます。一方は自足、一方は流通、是れが調和して居ないのであります。此點から改めなければ農村救済を徒らに騒いでも何の效もありません、即ち百姓をして進んで流通經濟の進歩發達に浴せしむることが根本的必要事でありませす。斯くの如く自足經濟の上から見ると流通經濟の上から見るとで、大變違ひます。此點は經濟學を學ぶ方に能く腦中に入れて置いて頂かねばならぬのであります。

## 第六章 貨幣經濟及營利經濟

### 貨幣經濟の説明

以上段々説明致した通り、今日は流通經濟の世であります、而して流通經濟と云ふことの誰人の目にも最も見易い點は、我々の經濟を立てるのに凡て貨幣金錢に換へて物の遣り取りをすることはであります。我々の經濟上の仕事は始終錢といふものに直接又は間接に關係がある。自足經濟では錢といふものに全然無關係であります。百姓は錢など持たなくても宜い。百姓は自足經濟をやつて居りますから、買ふことも賣ることもせなくとも濟みます。今日流通經濟に居る我々は必ず賣買せねば濟みません。毎日兎に角銅貨か銀貨の二枚か三枚何がしかの金が入用であります、それが出たり這入つたりします。又實際遣り取りする金錢以外に我々が經濟上の事を見るに始終金錢を通じて見て居ります。凡て己の授受する物を金錢の價として見て居ります。物事の取扱ひは總て金錢でメ括りを附けます。

## 今日の生活は萬事を貨幣に見積る

最も極端な例を申して見ませう、此頃大阪の新聞で見たのですが東京の電車が近頃時間遅れの結果ドク走り、能く人をひきます。御客が足を踏み掛けても構はず行つて了ふ。所が何處かの六十幾つかになる阿爺さんが自分は巧く乗つた積りでありましたが、電車がヒヨイと出ましたから外づれて落されて、頭を打つて氣絶して自宅へ擔ぎ込まれた。其處へ電氣局から人が来て朝から晩まで病人の枕元に坐つて居て病氣の事は言はないで三十圓とか二十五圓とかで所謂示談を申込んだソウです。病人の家では厄介で仕様がなからマア何でも宜いから判を捺くと言つて捺きますと、御爺さんは其晩に死んで了ひましたソウです。是れが今日では人の生命を金錢として取扱ふ極端な一例でありませう。三十圓・二十五圓、是れさへ出せば電氣局は人を殺して置いても其責任を免れるのです。コレハ甚だ無情な仕打だと攻撃してありますが、兎に角さう云ふ風に物を見るのが澤山にあります。支那の詩にも商人重利輕別離といふことがありますが、今日では別離などは別に考へない。利を重んずるといふ譯でもないが、總て問題を皆金錢にして取扱ひます。それは人情が薄情になつた、世が澆季になつたからではありません、世の中が發達してカウなつたのです。之を昔の漢學者流に言ふと世が澆季だと申すでせう。

## 法律も亦た貨幣見積を本位とす

今日の法律、日本の民法に於ても總てのものを皆金錢に引直すといふ主義を取つて居ります。民法は大抵な問題は皆金錢の價値に見積るものと看做し、金錢の利益に見積り得べきもので無ければ、殆んど權利の主張が出来ない様になつて居ります。通常權利の侵害に對して救済を求めるに、大抵は金錢價値に換へて請求します。例へば人が我輩の頭を撲つた、昔ならばどうも苟くも男子の頭上に手を加へる、怪しからんといふので、腹を切ると云ふ。今日では腹を切らないでも宜いが損害賠償をしる錢を拂へとなります。或は何處の人か我輩の事を悪口を言つた、有られも無い事を言つて中傷して名譽を毀損した、名譽回復の方法は新聞に廣告して謝罪書を出すとかいふ事もあるけれど、重大な訴へは名譽を回復する爲に一定の金額を拂ふ。又近頃大審院で新たに開かれた判例では婚姻の豫約が破れたのを、破られた方から相手方を訴へて慰籍料として金錢の請求が成立しました。是れから大分さう云ふ訴へが起るでせう。昔の考ではそんな事は金錢で如何することも出来る問題では無い。婦人の貞操を金子に見積るなどといふことはどうも甚だ怪しからん事と看做されました。今日は法律が之を認めるやうになつた、大變な相違であります。

## 貨幣見積りと經濟道德

右の如く、我々の爲す所我々の考へる所の大部分は直接又は間接に金錢に換へられ、若くは金錢に換へて考へられる可きやうになつたのです。これには悪い點も随分澤山あります。之が爲に道德を引下げる人情を破る虞も随分有ります。乍併それは詰り金錢に換へるといふことの濫用が悪いので、金錢見積りと云ふこと其事が悪いのではありません。電車にひかれて死にかゝつて居る人の枕元で示談金の事ばかり言つて怪我を治すとは考へない、コレは濫用の甚だしきものです。如何してでも法律問題にならない様に、如何にしても二十圓か三十圓置いて來て了へば宜いといふ金錢的の取扱を以て萬事それで御仕舞としやうとする、是れが大惡弊であります。或は名譽毀損でも或は貞操の蹂躪でも、唯だ金を取つてそれで御仕舞にして平氣で居るといふに至つては弊害であります。併ながら人を傷け人の面目を害し、人の名譽若くは貞操を蹂躪して唯だ黙つて居る、或は謝つた丈けで済ます是れは猶更不都合であります。經濟上自分から犠牲を供し金を拂つて迄も、向ふの顔を立てる、又自分の爲した事の責任を充すといふことは大變好い事です。兎も角是非善惡の判断は暫く措いて、今日の我々の生活は一目見ても少しも經濟關係の無いやうなことでも、最後には何れも貨幣・金錢の價を伴ふと云ふことは事實であつて、之を認めない譯には參り

ません。そこで我々の立つ道德の立脚地は餘程考へ直さねばならぬことゝなります。

## 今日の經濟道德の見方

今までは唯物と物、人と人、人と物の關係に付いてのみでありましたが、今日はそうで無い。大抵の事物や關係は何れも金錢の價値を通ずる事になりました。昔見て道德上申分の無い行爲でも、今日の眼で見れば甚だ申分がある。例へば清廉潔白と云ふ事は大變宜しいとあります。乍併清廉潔白にして清貧に安んじ家に儲餘なし杯といふ人も、段々に實際に就いて吟味して見ると必ずしも左様でないことがあります。本當に清廉潔白で清貧に安んじ家に儲餘の有りやうが無いので、それで無いと云ふならば、其れは昔も今も結構です。所が實は大變錢使ひが荒くて、パツパと使つて了つて清貧で無く濁貧に安んずる、無くなつて了つて貧となる、有る間は色々な事をするといふことでは、今日の經濟生活の道德から言へば甚だ不可ないのです。人が世に處して立派であるといふことには、又それに伴ふ金錢上貨幣價値の上の道德の法則に従はねばならぬのです。其意味は必ずしも金儲けをせねばならぬと申すのでは無い、人が金を儲けないといふのは、今日の經濟から言つても咎む可きでも無い。併し人として何等の收入の無い人はありません。多少の收入を以て支出をして居るのです。然る以上は收支の適合は必ずやつて行かねばならぬ、收

支適合を按排して行けば、多少の備餘は有る筈であります。備餘の無いのは收支の適合が無いからです。非常な場合に備へる處の貯が無ければ、非常な場合に收支を破壊して了ふのです。又他人の給與を受けて經濟を立てると云ふ人もあります。是れは今日の經濟の立場から言ふと道德上甚だ劣等な階級に屬するのであります。如何に豊富な暮しをしても、他人の恵みに依つて生活を立て、居る者は、如何に貧しい生活をして己の收入に依つて己の支出を成して居る者に比ぶれば遙かに劣るのです。是れは餘程慎重に言はなければならぬ、輕々しく私の申したことを文句其儘御採り下さると間違ふ。

### 働く貧者は働かざる富者に勝る

例へば貴族は祖先傳來の財産を持つて居り土地を持つて居り種々な收入が有ります。恒産ある者は恒心ありでありますから、従つて寛裕として人品も高尚であります。社會も之を尊敬して居ますから、どうも活動の出来ないことが起ります。何となれば若し活動して損でもしては不可ぬといふので田舎へ引込んで田園生活、花園でも作つて居て他の人の眼からいふと實に羨ましい理想的生活のやうに思ふが、經濟道德の眼から云へばコレは極低級に屬する人々であります。例へば先頃我邦へ來た詩聖タゴールは印度の非常な金持、親代々の金持の家、澤山の奴隷が居つてこれが營々として稼いで收入はタゴールの手に這入りま

す。タゴールは白い着物を被て詩を作つて居ります。日本へ來ると聖人だと言はれ詩聖だと言はれ、誠に高尚な人であります。けれ共今日の經濟の眼から見れば是れは一番低級に屬するのです。彼は印度の經濟に一の貢獻を致しません。彼の持つて居る財産は誰が持つて居つても其丈の用はなすので彼の働きは少しもありません。彼は文學の上には偉大な貢獻を爲しつゝあるでせうが、彼の財産は彼が持つて居る爲に、それが國に餘計働いて居る譯ではありません。土地は之を作る百姓が有つて、貴族なり大地主なりは何もするものではありません。山林は之を伐採する人が役に立つ、公債證書や株券を有つて居る人も何も爲さないのです。會社の成績が好ければ配當が有り、悪ければ配當は無い。誰が持つて居つても同じ事でありませう。だから之を持つて居るといふものゝ、何も經濟上國や社會に盡しては居ないのです。其反對に極く貧しい一家舉つて、夫婦共稼、幼い子供までも工場へやつて生活を立つて居るが足りない、足らないから動もすると組合の世話になつたり警察の世話になつたり、或は慈善家の救を受けなければならぬといふ厄介な人が澤山あります。斯んな人は厄介だと言はれます。成程足らない處は厄介ですが、全部足らないのではありません。彼等の費す所の或は半分だか三分の一だか知れないが、其れ丈は彼等はどうか斯うか稼いで行つて、それでも足りないから人を煩はすのです。全部煩はすのもありますが、それは別であります。さうすると彼等の使ふものは成程十で作るものは五か六かしか無いかも知れませんが、全部十の物を使つ

て居るでは無く、兎に角、六丈けのものは社會に加へて居る。彼等はどうせ何もしなくても使ふ。汝働かないからモウ死んで了へといふことは出来ないのです。土地を持つて居る有價證券を澤山持つて居る牛を百も二百も使ふ、収入が何千圓も、何萬圓も有ると言ふ人でも、何も働かない人があります。其家の隣れな一家でも彼等の使ふ一錢でも五厘でもは皆彼等の汗と血の結果で出来てゐる。それは全體から言へば誠に僅かな貢献ですけれ共、所謂貧者の一燈でそれだけの富は作つて居ります。故に此等の方が何も爲ないで財産収入で暮してゐる人よりは遙かに上にある譯です。況んや政治家などと言つて、利權漁りや結託でポロイ金を取つて居乍ら、表面にはエラサウなことを言つて、其實國の經濟に何も貢献しない人、歳費は始終高利貸に差押へられ、家賃は何年も滞りになつて居乍ら、豪然として、政界の革新などと高言して居る人に比すれば實に天地霄壤の差ありと申す可きであります。此の如くに經濟道德は總て金錢の價値を殖すものを善しとし、金錢の價値を減するものを惡いと見るのであります。元よりは計りが一切の道德であります。今日に於ては其の最も重要な一點であります。

### 拜金主義は蔑む可し

さて右の如く貨幣を中心にして立つると言ふと、拜金主義、徒らに金錢を崇拜する主義と同じやうに考へら

れるかも知れないが、それは大變な違ひです。拜金主義と云ふのは何れの國何れの時代に於ても排斥すべき極端な行ひであります。自足主義の極端なものも不可いが、金錢を尊重することの極端なものも不可い。けれ共不可いならば自足主義の方が未だ社會に害毒を流すことが少い。拜金主義の害毒に至つては、片寄れるものゝ中の一番悪い例である。所謂浪費濫費よりも拜金的貪慾の方が遙かに社會に害が有ります。

### 流通經濟と貨幣經濟

流通經濟は大抵の場合に貨幣經濟と同じ意味であります。何故といふと今日流通といふことは前申した通り必ず貨幣の助を藉りて行はれます、従つて性質から言へば流通經濟であります、其の藉りる所の手段から言へば貨幣經濟であります。それで從來の自足經濟に對しては流通經濟と言ふよりも貨幣經濟といふ方が廣く行はれまして、自足經濟と貨幣經濟と此二つを對立せしめます。併し是れは少し當を得て居ないと思ひます。貨幣經濟と申せば貨幣に依ると云ふので間違つて居りません、けれ共其性質を能く言ひ現はすには、自足と云ふことの丁度正反對を言はなければならぬのです。自足經濟の正反對は貨幣經濟と云ふことでは現はれて居りません、流通經濟と云ふ方が遙かに適切に意味を言ひ現はして居ります。故に私は自足經濟對流通經濟とし、流通經濟を説明して大抵の場合に於ては貨幣經濟であるとした方が事實

に合ふと思ひます。

### 營利經濟の説明

次に説明を要するは營利經濟と云ふ事であります。今日の世の中は營利經濟の世の中である。これは營利經濟的の現象である、營利經濟的事實であるといふ事を人が言ひます。其の營利經濟といふことの意味はどう云ふものであるかと言ふと、是れ亦、流通經濟又は貨幣經濟と云ふのと、殆ど同じ意味のものであります。殆ど同じだが重きを置く處が違ひます。字で現はされた通りに營利、利を營むといふことに重きを置いて居るのです。今日の流通經濟は事實に於て皆營利經濟であります。併しながら事實さうであると云ふ丈であつて、道理上は二つの者が必ず同じもので無ければならぬ譯は無いのです。従つて流通經濟であつても、必ずしも營利經濟で無いといふ事も有り得るのです。唯營利經濟は必ず流通經濟であります。自足經濟に在つては營利經濟と云ふとは無い。營利經濟であるからには必ず流通經濟であります。何故と申すと、營利と云ふことは詰り利を餘ますといふことでもあります。營利と云ふ字は、從來支那日本に在る字を使ひました。是れは些と當を得ないかも知れませぬけれども、是れよりも適切な字がありません。營利と云ふ字を使ひます。字本當の意味は餘りを拵へ出す處の經濟、即ち餘利經濟と云つた方が或は

適切です。其の餘りを拵へ出すといふことが、營利經濟の骨髄であつて、それは自足經濟とは丸で正反對の極端に立つたものです。貨幣經濟でも無論餘りが出来ませんが、其の餘りは貨幣經濟に於ては結果として出来るのであつて、それが目的とは言へないのです。流通經濟に於ても無論餘りが出来ませぬけれども、餘りを作り出すといふことが流通經濟の目的とは言へないのです。流通して、自分丈で自足自給して居ないで、廣く一般社會に出て他人と交渉して、經濟上の物を遣り取りする、有無相通じて經濟を立て、行くと云ふ丈けの意味であります。貨幣經濟はそれと同じく貨幣に換へて賣つたり買つたり、又た物を見積るに貨幣の價で見積るといふことであります。同じことを言ふのですが、重きを置く處が違ひます。營利經濟に於ては、目的として餘りを生ずるやうにやるのです。流通場裡に立つて貨幣見積りを本位として而して餘利を作り出すのを最高の目的とする、それが營利經濟といふことの意味であります。

### 營利經濟に於ける收支適合の意味

經濟と言へば必ず收支適合といふことを含んで居ります。これは自足經濟に於ても流通經濟に於ても貨幣經濟に於ても、將た又は營利經濟に於ても共通の一事であります。併し乍ら此收支適合の方法範圍は、各經濟に依つて違ひます。ソコデ物に就ての收支適合で無く、價に就ての收支適合と云ふ事が、流通經濟

の目的であることは前に述べました。營利經濟に於ては、收支適合といふことの意味が更に又た深くなつて居るのです。即ち唯收支を適合するに止まらず、適合した結果、収から支を引いて、其處に餘りを作り出すのを目的とするのです。所謂入るを量つて出るを制す、這入つた丈け出て行くと云ふのは、營利經濟で無い。營利經濟に於ては、必ず這入つたものより出すものゝ方を少くする、出るものより入る方を多くする、さうして差引いた餘りを多くする、此餘りを多々益々多くするといふことが營利經濟の目的であります。餘りを多くする方法は前にも申した通り、收は其儘であつて支を少くすることに依つて餘りが多くなることもあり、支は其儘であつて收を大にして餘りを多くする方法もある。收も支も共に大とする殖し方もあり、收の方の殖え方が更に大なるが爲に、餘りが更に大になるといふ殖し方もある。之を約して申せば、左の如き三つの場合があるのです。

稱名	第一の場合	第二の場合	第三の場合
最小費用法	收 其儘 支 少くす 餘 多くなる	收 多くなる 支 其儘 餘 多くなる	收 多 支 少 餘 多
最大利益法	收 多くなる 支 其儘 餘 多くなる	收 多くなる 支 其儘 餘 多くなる	收 多 支 少 餘 多
最小費用最大利用併行法	收 多 支 少 餘 多	收 多 支 少 餘 多	收 多 支 少 餘 多

詰 どれも餘りが殖れば其が營利經濟の目的を達する所以であります。今日の文明國の經濟生活に於ては、常人は其を自覺して居ない場合が幾らも有りますが、其人を指導して居る處の經濟上の動機法則は此餘りを大にすることにあります。唯收入を増すといふことでも無く、唯支出を減すといふことばかりでも無いのです。何故なれば唯收入を殖すのみとか、支出を省くのみとか一方にのみ着眼する時には必ず偏することになつて目的を達することが困難です。達し得ても不十分であります。着眼する處は此兩項目其物にあらすして、最終の餘りの點にあるのです。餘りが多ければそれで宜しいのです、跡は途中の道行に過ぎません。是れが營利經濟といふものゝ真相です。

### 複式簿記に表はれたる營利經濟

扱て、此の如き道行は何に於て現はれて居るかといふと、複式簿記に於て好く現はれて居ります。複式簿記はどんな簡單な會計狀態でもどんな複雑な會計狀態でも必ず資本金勘定から始まります。或人が或商賣を始めるに一萬圓の資本を投じます。其一萬圓は資本金勘定といふもので、資本主から借りたものとして帳面に記けます。資本金勘定の貸方即ち事業主の借方に一萬圓と云ふ金額が載せられます。一方では資本主であり一方では事業を經營する事業主で二重人格になるのです。例へば、私が自分の金一萬圓を投

じて一事業を始めると致しますと、福田徳三なる資本主は福田徳三なる事業主に一萬圓を貸したことです。事業主なる福田徳三は資本主なる福田徳三から一萬圓の金を借りて商賣を始めます。借金では無い自分の金ですけれども、帳面の上では借金として取扱はれます。何故かといふと一萬圓を持って居る自分と、之を運用する自分とは資格が違ふのです。事業に一萬圓注ぐからには之を色々に運用した結果此事業から利益を生ずると云ふことが目的であります。従つて資本金を其事業に投ずるのは之を貸したものととして取扱ふのです。そこで色々勘定が起り勘定科目といふものが澤山ありますが、どんな複雑なものであつても一最終は必ず損益勘定といふものに歸着するのです。途中には色々變化がありますけれども、資本勘定を以て始まつて、損益勘定を以て御仕舞になるといふ事は、どこの帳面でも變らないのです。若しさうで無ければ其は間違つて居るのです。其兩極端を捉らへて置きさへすれば跡は唯だ技術の問題で間違なく記ければ其で宜いのです。事業と云ふものは何時も借方即ち借金を以て始まり、其反對に損益勘定は何時も貸方で残らなくてはならぬのです。其でなければ營業は失敗したものです。營業が目的通り行けば必ず損益勘定の貸方の方が借方より多い筈であります。假りに元金一萬圓を利用して三割の利益を得たとすれば三千圓といふものが損益勘定の貸方に記るのであります。損益勘定といふものは丁度一種の取引先で、其人は他の取引の相手方と丸で違まして、貸したものは貸放し、其代り借りたものは借放しにな

る取引先であるとして取れば一番能く分ります。例へば私の處の元帳に錢屋五兵衛殿といふ勘定がある。私が錢屋五兵衛から五千圓の品物を買つて代金を、拂はずに置けば、錢屋五兵衛の貸方勘定に五千圓の品物の代が記きます。錢屋五兵衛に三千圓の品物を賣つて其代をまだ取らずに置けば、錢屋五兵衛の借方勘定に三千圓が記くのです。此の如きを人名勘定と申します。人名勘定は何時か必ずそれを決済し、貸したものは取り、借りたものは返さなければならぬものです。若し錢屋五兵衛が我輩に對して三千圓の借が有りすると、何年かの中には必ず反對に貸方に於て同じ金額が記いて相殺にならなければ決済が附かぬのです。貸したものは必ず取り借りたものは必ず返す、是が人名勘定の性質です。處が損益勘定又は人名勘定みた様なものですが、其貸方は永久に貸放しで取りに來ない。ソコで此が營業の利益となるのです、其代りに其人に借りられた日には往生で何時まで経つても返しません、永久に返して呉れない。即ち此は營業上の損となるものであります。事業が拙く行つて損になると貸倒れとなつたと同じやうに帳面では取扱ひます。其代り事業の成績が良くて、三千圓の利益が有つたら、其利益勘定が我輩に貸放し、取りに來ないから安心して使つて宜しいのです。其三千圓で以て何を買つて使つてもモウ取りに來る氣遣は無いから大丈夫です。營利經濟とは此損となる借方を禁物とし、益となる貸方を成可多くすることを目的とする經濟の謂であります。手近く申せば營利經濟とは元帳の損益勘定の貸方残高を以て生命とするもの



と言つて差支ないのであります。どんな商賣でも色々複雑に取り引を致し或は手形を發行し、或は品物を買ふ色々な事をやつて、とどの詰り一會計年度の終りに至つて總メ括が必ず損益勘定に貸方残高となつて現はれなければ其事業は失敗であります。此利益は株式會社ならば株式に對する配當金となり、個人事業なれば個人事業主の収益となり利得となる高で、即ち全部使つても差支ないのであります。是れ以上は利得でありませんから其れ以上使へば其財産を食ひ減らすこととなります。所謂蝸配當で自分の足を食つて了ふ、永久に續きません。此損益勘定の貸方を配當して居る間は蝸配當ではありません本當の配當であります。

### 資本の遞増が生命なり

さて資本勘定は貸方から始まつて色々取引をしてト、の詰り損益勘定の貸方残高となつて残ります。所が此貸方残高が又た資本勘定の貸方に移ることが多いのです。即ち利益を資本に組入れるのです。茲に利益が三千圓ある。之は使つて了へばそれ切りであります。使はないで更らに之を増資として事業に入れるといふと、今まで一萬圓の資本のものが一萬三千圓になります。又モウ一年やつて五千圓加へると一萬八千圓になる。段々資本が殖えます。全部組入れる場合は少いですが、大抵は利益の一部分を資本へ組

入れます。資本といふものは雪達磨のやうに轉がれば轉がる程大きくなる。其處に營利經濟が段々膨脹して行きます。斯く殖えて行くには餘りが出なくては出来ません。餘り以外に殖やす道は無いのです。此道理に基いて出来て居るのが、複式簿記であります。複式簿記と云ふものは大變面倒臭いやうに考へるが、基づく道理は此の如く極めて簡單であります。所謂貸借の道の外に無いのです。跡は間違はずに帳面さへ記ければ宜い、普通の日本流の大福帳には此道理が無い。單式簿記には其道理が半分しか無い、複式簿記に至つて、貸借兩方相對してさうして終ひに至つて結末が附きます。此二つより外結末の附けやうが無いといふのが複式簿記であります。是れは商賣を經營する上に就ての話に止つて居ますけれども、凡ての經濟を通じて道理は同じ事でありませぬ。

### 一家經濟も道理は同じ

我々の一家の經濟でも、天下の經濟でも、右と同じ道理に依つて立つて居るのです。一軒を經營して行くのに収入があり支出があります。然るに収入丈け支出して跡に何も餘りの無い經濟は基礎の薄弱な經濟であります。家計簿記は無論複式簿記ではやりますがやつて出来ない譯ではありません。單式で事が足りますのです。單式でも矢張り貸でも無い借でも無いものを借方貸方と言つて記けます所以は、單式簿記は

元とく、複式簿記の簡單なる形に過ぎないからであります。基づく道理は一つであります。ト、の詰りに行つて成る丈け多く餘りを弾き出すといふことが、家計經濟の最終の目的であります。その餘りは必ずしも金錢額に見積れるでもなく又は商賣人のやうに營業資本にはならないもので、唯だ一個人一家の貯蓄となるに止まつて居ても、道理は同じであります。金額は見積られないものたりとも我々の毎日の經濟上の行動は始終此原則に依つて支配されて居ります。此原則の支配を免れやうと思つても出来ません。我々は不知不識の間に常に收支適合の結果、餘りを多くするやうにやつて居るものです。若しそれをやらす或は故意に之に反對したことをすれば、我々は直ちに經濟上の失敗者となります。

### 最大餘剰を得るための選擇

我々が一圓の金を以て此物を買はうか彼物を買はうか、甲にしやうか乙にしやうかといふことを考慮するのは、一圓といふ支出に對して得て來る物の收入の一番多いとを期する所以です。一圓の金を持つて町へ出れば實に色々な物が買へます。今日の貨幣經濟の難有さには、僅か一圓の金ですが其一圓に當る丈けは天下無数の物と換へられます。此の一圓を何か物に換へて了ひますと、其力は非常に限られて了ひます。私が一圓で此コップを買つた。扱て此コップを他の物に換へやうと思つてもチヨット換へられない、コップ

を一圓で買つたが、扱之を一圓で賣らうと言つても全然賣れないかも知れませぬ。賣つた處で一圓の物が僅か八十錢にしか賣れない、否三十錢にしか賣れないかも知れませぬ。一圓といふものをコップにして了ふと、此の如く力が限られて了ふ。コップにしないで一圓と云ふ金にして持つて居れば、瀬戸物屋へ行けば茶碗が買へるし、硝子屋へ行けば硝子の土瓶が買へる、化粧品屋へ行けば石鹸でも齒磨でも買へる。他の店へ飛び込めば其處でも色々な物が買へる、買つて了へばモウ其で限られて了ひます。買はないで貨幣として持つて居る一圓は實に萬能力を持つて居ります。一圓だけの範圍に於ては、此に對して換へられるものは無數であります。ソコデ問題が起つて來るのです。今一圓を何かと換へようといふ時に問題は自分に取つて一番役に立つものと換へるには如何にす可きやと云ふ點にあるのです。金が有るからと言つて手當り次第、行當りバッタリ物を買つて行く人は、即ち金の使ひ方を知らない浪費家である、不經濟家である。容易に萬能力の有る一圓を手放さないで充分吟味に吟味し、選擇に選擇を重ねて、是れなら一番大丈夫、是れ以上の使ひ方は無いといふことを確かめて初て一圓を放し、之に換へて物を得て來る人、即ち十分に道理の判斷を下す處の人が、餘りを一番餘計出す人である。使ふものは同じ一圓であるが、得て來るものが餘計の用を達する、差引き餘りが多くなる。其れが即ち人の富み家の富み國の富む所以であります。必ずしも金額の安い高いではありません。處が使ふ一圓に對して得るものゝ少いといふことは、決して一定

不變では無い。此物は何時でも是丈の用がある。彼物は何時でも彼れ丈の用があるといふもので無い。其時其場合其人に依つて違ひます。例へば我輩が今腹が極めて空つて居る。一圓を何に使ふべきか、一圓で帽子を買はうか時計を買はうか、それとも飯を喫べやうかと云ふときに、腹が非常に空つて今飯を喫べなければ倒れると云ふ時には、無論一圓を以て飯を食ふのが一番大なる利用を得る所以であります。併し飯を食つて了へばモウ跡は飯を食ふには使ひません。さう何遍も飯を食ふことは出来ませんし必要がありません。幸ひにして又他に一圓持つて居るとすると、其一圓は喰物で無い他の物に使ひ度い、ソコデ考へます、我輩が今持つて居る物の中で帽子が一番時勢に遅れて居る、改良を要することが切である。此夏の熱いのに未だ冬帽子を被つて居ると、自然と頭が悪くなる。靴も改良を要し洋服も改良を要する、色々改良を要する中で、帽子の改良が一番急である。然らば一圓を投じて帽子を買はうと定めます。併し帽子も一つあれば宜い。今では帽子を買つた爲に我輩は百の満足を得られたが、第二の帽子を買はうとなると、其半分、五十の満足しか得られない。或は帽子は一つあれば役に立つ、二つあつて取換へして被るといふことも一つの方法だが、そんな事をしなくても宜い。懷中に餘裕があれば其も結構だが、未だ色々足りないものがあるのに帽子ばかり二つあつても仕方が無い。ソコデ今度は下駄を買はうとなります。此くの如く其時々々の事情に依つて違ふのです。又我輩は右の通りであつても、我輩の友人はさうで無いかも知れません。彼は帽子も幸ひ持つて居り、下駄も幸ひに持つて居る。併し彼は書物を持つて居らぬ。書物を買ふことが彼に取つて最も役に立つ所以であるかも知れません。決して萬人一樣の用があるもので無い。萬人悉く違ひます。違ふから流通経済といふものが成立つのです。

### 人の必要は夫々に異なる

總ての人が皆同じやうな必要を感じて居れば、一つ處にのみ殺到し、其物のみが賣れる、其値が上つて到底總ての人が満足を得るとは出来ません。處が幸ひにも物に對する需要は或人は或物を求める、他の者は又丸で違つて他物に對して需要を持つと云ふ風に銘々に分れるので自ら適合して行くのであります。或物にのみ對して非常に澤山な人が之を欲しいと云ふ念を起し、殺到して來ますと、不法に價が高くなる

と云ふことが起ります。

### 株式相場の一例

例へば、株式の相場などと云ふものは、實際それに対する需要が有つての話で無く、多くは人氣問題たる場合が澤山あります。百圓の株券が五百圓もするといふやうな風に、想像以外に馬鹿々々しく騰ること

もある。取引市場以外にはさう云ふ馬鹿々々しいことは少いが、取引市場には随分あります。例へば米の價が亂高下し上がるかと思ふとズツと下り、下がるかと思ふとズツと上る。米の需要はそんなに變らぬ。今まで日本人は五合食つたのに急に八合になり、又急に二合で済むものでは無い。日本人は餘程變り易いと言ふけれ共、米を食ふ分量はさう二割も三割も増減するもので無い。然るに米の價が三割も五割も上つたり下つたりする。今十四圓二十錢のものが十六圓になり、段々に十九圓になると思ふと、復た下つて十圓になる。是れは真正の需要供給の道理で以て動いて居るかと思ふにさうで無いことがあります。唯だ人氣でドツと人が集つて来てワーツと言ふ、丁度賑かな町の中で何か事件が起りましたかと思ふと猫が犬に噛まれたと云ふやうな有様であります。江戸は物見高い處で、何か有ると直き人がパツと立ちます。是れは理由は分らぬ。所謂群集心理で何でも無いのに提灯行列、電車の燒打をやります。實は燒打したいと思つて居らぬ人でもツイやり出す。跡で考へると實に馬鹿らしい、止せばよかつたと思ふが自分は結果を知らぬやつも、法廷に曳き出されて可なり重い刑に處せられる、馬鹿々々しい詰り猫が犬に噛まれたのを寄つて群つて見ると同じことです。米の上がるのも株の相場の上がるのも同じ原理によることが多くあります。人間に免る可からざる彌次性・彌次根性と云ふものは極端に働きます。然し此の如き異例は時あつて局部的に起るのでありまして、一つの市場に於ける處の市況は人の心が銘々に違つて居るから、それで

一舉兩得安排して、所謂流通が誰人にも利益あるやうになるのであります。

**賣買交換は價異なる物に就て行はる**

同じ物と同じ物との遣り取りするに止まつて居るならば、互に利益する處は甚だ少いのです。我々が一圓出して一圓の帽子を買ふ。若し一圓の金と一圓の帽子と取換へると云ふ丈けの事ならば取換へなくても宜い。一圓の物を一圓に買ふならば何も利する處は無いのです。帽子屋は一圓の帽子を賣るのでは、何の利益もありません。私は一圓で帽子を買ひ、帽子屋は一圓で帽子を賣ります。實は帽子屋は一圓で無い帽子を一圓で賣り、私は一圓以上の價を持つて居る帽子を一圓で買ふのです。帽子屋の賣る一圓の價は必ず彼の費した價よりは大である。私が拂ふ處の一圓の價は之を買はんと欲する價よりは必ず小であります。例外の場合には別ですが、原則としては、物の賣價は賣手の價より必ず大であり、買手の價より必ず小であります。分り易く示して見れば

P	物の賣價
BP	買手の價
BP > P > SP	
SP	賣手の價

の如くであります。即ち八十五錢掛けて作つた帽子を一圓で賣ると、十五錢儲かる。一圓掛つた帽子を一

圓で賣つたのでは商賣になりません。

### 賣手の餘剰と買手の餘剰

其處に餘剰が必ず無ければならぬのです。之を賣手の餘剰と申します。買手の方でも又た金額に見積れないかも知れないが、買手の餘剰がなければなりません。餘剰が無ければ買ひません。一圓の金を今此處に持つて居る、其持つて居る一圓の金の用と、買ふ一圓の帽子の用と私に取つて全く同じであれば、其の帽子を買ふことは無駄であります。其帽子を一圓出して買ふと云ふからには一圓の金で持つて居るよりも、一圓の帽子を買つて被つた方が今役に立つからです。一圓の金を頭へ載せても帽子の代りにはなりません。之を帽子にして初めて被れるのです。一圓で下駄を買ふ一圓の錢を持つて居るよりも下駄の方が役に立つのです。往來を跣足で歩かないでも済むやうになる。其上に一圓の下駄であれば多少體裁も好い彼は一圓の下駄を穿いて居る哩と言はれた方が一圓の貨幣を懐に持つて居るよりも利用が多いから買ふのです。何物にしる或物を買ふ時には、其拂ふ代よりも買ふ物の方が自分に餘計役に立つからです。一箇の帽子は一圓で買ふが、第二の帽子は只でも厭だといふ、第二の帽子は利用がないからです。即ち我々が經濟を立て、行くのは必竟皆一舉兩得であります。賣手も利し買手も利するのです。其選擇を誤らないやう

にすることが眼目であります。

### 他人の考へ及ばざる利用を案出す

或は他人が役に立たぬといふものも、自分に廢物利用の方法を案出するとか或は所謂掘出し物を致します。他人は役に立てることを知らないでも、自分は役に立てる方法を知つて居るから、人の拂はない高い價を出してそれを買つても、未だ自分に餘剰が有る、それが經濟の妙と云ふものです。世間普通の遣り方は人より餘剰の餘りを生み出すことは出来ない、必ず工夫を要します、創造力を要します。何か人に優れた働きをするといふことは、經濟上に於て言へば、新餘剰を發見し、新しい適合を見出すといふことであります。營利經濟は商賣人や事業家許りの事ではなく我々の今日の經濟生活に於ては、殆ど總ての經濟は多少なりとも營利經濟で無いものは無いのです。之に背いて營利經濟で無く經濟を立てやうとすれば、其經濟は立たないことになるのです。相手が營利經濟を立て、居るのに自分獨り其仲間外れをする譯には行かないのです。彼も我も營利經濟に依つて餘剰を生じ、己の身を富まし、國の富を多くするのが今日の實際であります。是れが營利經濟の本質であります。

## 第七章 經濟學の意義・分科・研究法及發達

## 經濟の研究は過去・現在・將來の三に分る

さて以上今日の文明生活に於ける經濟の意義から説き起して、今日に於ける經濟は自足經濟でなく、主として流通經濟であることを稍々詳しく説明しまして、其流通經濟なるものは又貨幣經濟であることも明瞭にした積りです。此の流通貨幣經濟を左右して居る根本の力は營利と云ふことでありますから、之を營利經濟とも名づけることも、又御分りになつたことと存じます。コレが今日我々の到達致して居る立場でありまして、昔はコレとは著しく違ひます、又今後未永く此の如くに繼續して行くものなりとも云へないのです。否今日に於ては、既に此意味の流通經濟を改造しやうとする要求が起つて居るのであります。ソコデ學問として研究するには、過去・現在・將來の三つに涉ることも出来ずし、又其一つに限ることも出来るのであります。過去の經濟を主たる題目として研究する學問は、經濟學史並びに經濟史であります。將來の經濟のことは、今日では未だ之を一科の學問として研究するには進んで居らぬのであります。

今日有る所で申せば、社會主義の學問は、主として此將來の經濟といふ所へ着目致して居るものであります。他日は或は一科の學問となるかも知れませんが、今日の所では將來の經濟を研究する一の端緒として置くのが適當であります。ソコデ、私が今講述する所の經濟學は、何を研究する學問であるかと申せば、即ち今日現在の經濟を研究する學なりと、明白に御答をすることが出来ます。

## 過去の經濟研究の必要

今日現在の經濟とは、即ち前章までに段々説明致した所の流通經濟であります。殊に貨幣經濟として發達し、今日に於ては専ら營利經濟となつて居る所の、其の流通經濟であります。其組織は即ち國民經濟となつて顯はれ居るものは是れであります。尤も、今日の國民經濟を研究するには、過去の經濟の事を知らないでは濟みません、今日の國民經濟は、何れも過去數百年の發達の結果でありますから、如何して斯く成り來つたかと云ふことを、先づ十分に究めなければ、今日の有様は到底其真相を得ることは出来ないであります。今日丈けに目を限つて見ますと、丸で譯の分らないことが澤山あります。否、今日の國民經濟を形成して居る根柢は、何れも過去の發達の賜であります。一つ例をあげて見ますと、今日は、土地は何れも私人の有に歸して居りまして、之れを澤山持つものもあり、少しく持つものもありますが、又之

を丸で持たぬものがあります。社會の大多數の者は土地を持つて居らないのであります。我々の生活を維持するに、是非無くてはならぬ土地の事だから、何人も皆少しなりとも持て居た方がよさうに思はれますが、扱實際の社會に於ては、左様はなつて居らないのであります。此は何故であるかと云ふ説明は、今日の事丈けを見たのでは分りません。此は畢竟各國に於ける歴史的發達の結果でありまして、殊に國夫々の發達の有様の違ふにつけて、國中極少數の人々が澤山の土地を壟斷して、大多數の者は少しも土地を持たぬ英國の様な國もあり、又反對に國中の百姓の多數は小さい乍ら居付地主である佛國もあると云ふ有様であります。此れは如何しても、過去の經濟の研究即ち經濟史に依らなければ諒解することの出來ぬ事柄であります。故に、經濟に關する學問として、先づ第一に來るものは必ず此の經濟史でなければならぬのであります。

### 經濟學史の研究

而して歴史的發達に就ては、其時々々の經濟思想と云ふものが、重大な關係があります。此思想の變遷を研究するのは即ち經濟學史であります。さて過去の研究を土臺として、次に來るのが現在の國民經濟の研究であります。此研究は過去の發達の結果として、今現に成立つて居る我々の國民經濟の生活を主題として

て研究するものであります。我々は今俄に思立つて、自分一人で研究を始める譯ではありません。過去に於て先輩が段々研究して置いて呉れた結果を基礎として、其誤れるを正し、其足らざるを補つて行くので、其れでなければ、今俄かに思立つたとして、逆も研究の大事業を成し遂げ得るものではありません。従つて今日の國民經濟に關する研究にも、過去の學說と云ふものは、極めて重要な關係を持つて居るものであります。此點から申しても、經濟學史の主要文は、現在の經濟研究にも是非缺いてはならぬのであります。

### 將來の經濟の研究

他方に於て將來の經濟に關する事は過去の事の様に、密接なる關係はない様であります。既に今日の國民經濟の中に顯はれて居る發達の傾向のことだけは、是非知らなければならぬものであります。加ふるに、今日の國民經濟の改良進歩を圖ると云ふ上からは、我々は眼を現在にのみ狭く限つてはなりません。善き進歩と認む可きことは之れを歓迎し、其實現に力を盡さねばならず、又現在に於て行はれて居る事柄であつても萬全とは申されません。否缺點弊害は尠からずあります。従つて此を矯正改良して行くことに意を用ひる必要があります。前の例を以て申しますと今日に於ては、土地は甚だ色々な有様に分割せられ

て、夫々に持主が定まつて居りますが、此有様が果して宜しいかと云ふと、決して左様でない種々の弊害があつて、社會の健全なる進歩の爲めには之を改良することが必要であります。斯くの如く、遠く着眼點を將來に及ぼして、缺點の矯正改良の實現を期するものは、今日の學問として社會政策是であります。社會主義は將來の經濟を直ちに實現するものと見ての研究でありまして、無論我々には大に參考の助けにはなりません、之を直ちに我々の學問とするとは、御互の立場が全く違つて居りますから出来ません。之に反し社會政策は將來の經濟を今直ちに實現しやうと云ふのではなく、今日の國民經濟の範圍に於て、改良進歩の方法を考究するものでありますから、我々の立場と全く同一であります。經濟學と社會政策とは切つても切る能はざる關係を持つて居るものであります。

### 現在の國民經濟の研究

扱、今日の國民經濟を主眼とする學問は、經濟學中の經濟學とも申す可きもので、我邦で單に經濟學と稱するのは此の國民經濟の學問のことでありまして、之を獨逸の學者は國民經濟學と名づけますし、英國では多く政治的經濟學と申します、又社會經濟學と云ふ名を附ける學者も、英獨佛伊共にあります、我邦でも金井博士は社會經濟學と云つて居られます。近來は我邦でも、獨逸流に國民經濟學と申すことが稍々

行はれて参りました。此を我邦で書物の名に附けたのは、拙著國民經濟原論が始めてあると思ひます。續いて津村博士の國民經濟學原論があります。私は此名稱が一番適切だと信じて居ります。前申した通り社會經濟と云ふのは漠然過ぎますし、國民を形作る社會と云ふものは今日はありません、態々漠然と云ふよりも、誰人にも直ちに氣の付く國民と云ふ語を以て顯はす方が適切であります。政治的經濟と云ふのは、社會經濟と云ふよりも尙漠然として居つて殊に國家經濟と云ふ昔の名稱と混同の嫌があります。他方に於て此度の歐洲大戦争によつて、我々は、國民經濟と云ふ考へを大に力説する必要を認めました。國民經濟の統一と獨立とは今後各國が益々力を用ひる所であると確信します。我邦も亦今後一層國民經濟思想の發達を圖り、英國が陥つた國民經濟輕視の誤りを繰返さぬ様にせねばならぬことと思ひます。從つて經濟學殊に狹義の經濟學に於て論ずる事は、常に國民經濟と云ふことを中心とするものなることを記憶して居る必要があります。故に此講話も特に此語を標榜する次第であります。但し單に經濟學と言つたとて其意味さへ間違はなければ別に差支はありません。

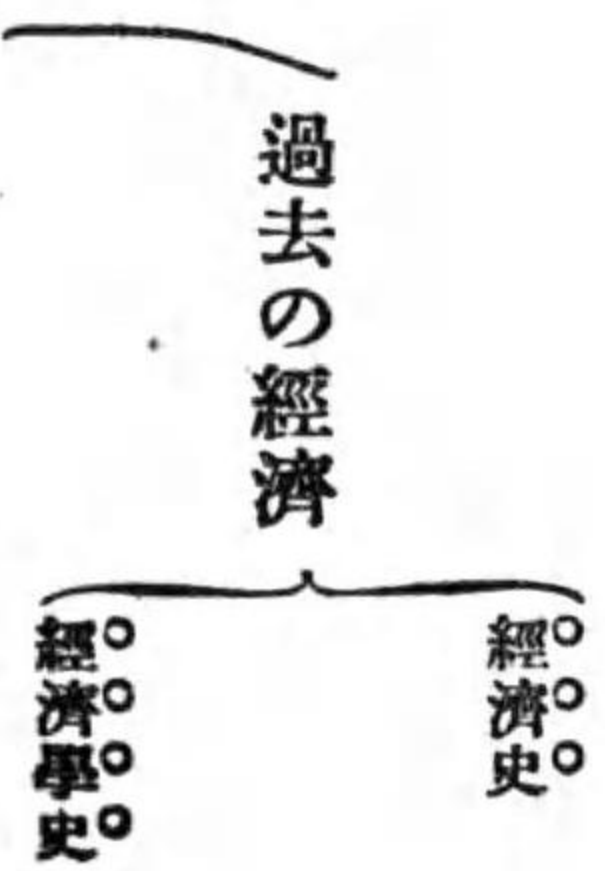
### 經濟學の分科

此今日の國民經濟の研究する經濟學は、大別して二つと致します、一は國民經濟原論と申し一は國民

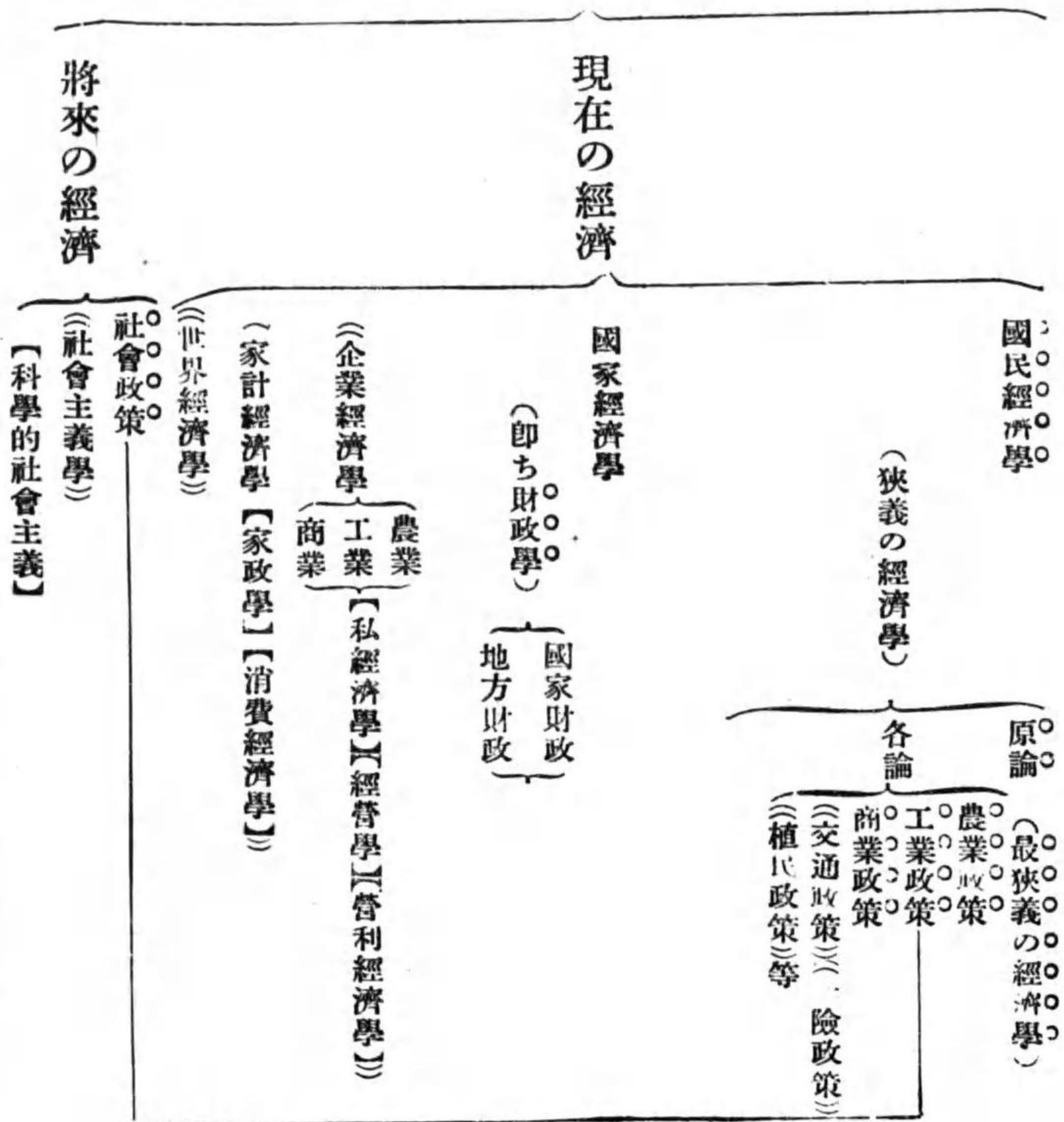


經濟各論又は經濟政策と申します。一般の原理原則を研究するのが原論であります、之を主な職業に分けて各別に研究するのが各論又は政策であります。此二つが狭い意味で申す經濟學であります、更にモツト狭く經濟學と云ふ字を使つて經濟原論丈けのことを指すことが往々あります。英國や米國あたりでは、此の最も狭い意味で經濟學と云ふ字を使ひます。コレハ道理のあることで、經濟に關する研究の數々ある中に就て、一番中心たるものは經濟原論であるからであります。右申したことを約めて申すと、經濟學には廣義（經濟に關する一切の研究）、狹義（原論と各論）、最狹義（經濟原論）の三種の使用法があるものと、御承知を願ひます。

ソコデ廣義の經濟學を分り易く經濟諸學と名づけませう。其中に含まれて居る分科を表にして御覽に入れると左の通りであります。



(學諸濟經)學濟經の義廣



(二)を附したのは未だ學問の體を成す迄に至らず唯だ専門家の參考となるに過ぎざるものであります。右の如く中々澤山の分科がありますが、其中今日の所で學問として立派に成立つて居るものは經濟史・經濟學史・經濟原論・各論中の農工商政策・財政學及社會政策であります。其中でも學問として最も態を備へて居るのが最狹義の經濟學であります。私が今講述致すのは、此最狹義の經濟學即ち國民經濟原論であります。此にも色々な別名があります、即ち理論經濟學とか、一般經濟學とか、純正經濟學とか云ふのであります。何れに致しても、此が經濟學中の一番根本的な基礎的な學問でありまして、最も重要な地位を占めて居りますし、又た一番進歩したものであります。他の研究は、何れもコレを土臺として居ります、従つて一般經濟學とか、原論とか申すのであります。他の研究に屬することも一般的立場から必ず論及するのであります。其れと同時に、此原論を十分に究めるには、又た他の諸研究の結果を度外に置く譯に行かぬのであります。従つて研究も一番困難なものであります。其代り此原論の知識をシツカリ備へて置きますれば、他の研究に方り、大に助けを得るのであります。否原論を十分頭へ入れて置かないで、或は經濟史或は經濟政策又は社會主義學などの研究に従事すると、飛んでもない誤りに陥るので、其例は數へ切れぬ程澤山あります。

### 學問は統一的知識

經濟學は一の學問であります。學問と云ふことの意味は何かと申すと、是は其昔希臘の哲學者アリストテレースと云ふ人がチャンと定義を致して置いたのであります。即ち統一體の正確なる知識(近頃の學問の術語で申せば Identitätsprinzip (統一原則)の下に立つ又は Eidentiges Zuordnungsprinzip (一貫的排列原則)に導かるゝ知識の一體)を指して學と申すのであります。統一體を成すには、一種類の正確なる知識でなければなりません。乃ち、色々な種類の知識がゴタ／＼集つたのは學問ではありません。是が學問と、左様でないものとの、根本的の相違であります。之を専門の言葉で申すと、學問と云ふのは一つの認識對象を持つて居るもので無ければならない。色々なものを認識の對象とするのは學問ではありません。一つの學問と言ふからには其認識の對象が一種類で無くてはならぬのです。換言すれば一の學問に屬する知識は如何に多様多岐に涉つても、其一切が一つの統一原則の下に立ち、終始一貫一の排列原則に導かるゝものでなければならぬのであります。

### 經濟學の意義

扱、經濟學は經濟と云ふことを統一的の認識の對象とする學問であります。經濟と云ふ一つの種類の認識の對象に付ての知識の統一體が經濟學であります。乃ち最も簡單に言へば經濟學といふのは經濟の學問だと言へば宜いのです。換言すれば經濟學の統一原則は、經濟と云ふことであり、經濟諸學として前の表に掲げた中には、未だ此意味の學問に成つて居らぬものがあります。嚴密に申すと、經濟原論を除く外のものは、皆統一的に認識對象を持つと云ふ點に於て、不十分な廉があります。經濟原論は、今日の國民經濟の態に於ける流通經濟殊に貨幣經濟を統一的認識の對象と致すもので、此は十分の意味に於て學問たるを得る統一的のものであります。

### 貨幣・自足兩經濟を統一するは困難

然るに、貨幣經濟以外自足經濟までも悉く取入れて説明を下すとすると、此統一を維持することは餘程六ヶ收いのであります。其故は貨幣經濟には、貨幣を以て言ひ表はした價值と云ふものがあつて、一切の經濟は皆此の貨幣價值で言表はし、又見積ることが出来ますが、自足經濟には之がありません。自足經濟に於ては何を以て收と支とを計るか、大抵の場合には労働を以てすれば出来ませう、例へば十圓の支出を以て十三圓の收入を得たりと今日申す所を、自足經濟では十日の労働を費して十三日の労働に當る物を得

たりと申すことが出来ますが、コレは強て應用する丈けでありまして必ずしも左様し得る場合計りとは限りませんし、又た實際に左様したのではありません、總べて假定的であります。ヨシ又た労働で言表はし見積るとしましても、其れは貨幣價值で言表はし見積る様に、正確ではありません。知識の統一が眞に統一たるには、必ず此の正確と云ふことが入用であります。不正確では統一しません、正確なもののみであつて、始めて皆一に歸することが出来るのであります。貨幣價值は、凡てのものに此の正確を與へて之を統一します、労働は其れが出来ません。労働は一日の労働と申すも、人によつて大變に違ひます、場合によつても、又た仕事の性質によつても違ひます。同じ一日の労働と云ふも、或職工は日給三圓五十錢も取り、或人夫は三十錢か三十五錢しか取れません。之を同一と見るのは甚だ不正確で昔人皆農業に従事し、各人の働き振りが粗同じであつたときには、粗同一と云ひ得る丈けで、今日にはとても適用出来ません。否昔に在つても、決して完全に同一と云ふ労働はなかつたのです。故に労働を以て見積り言表はし得るのは極めて、大ザツパの所丈けであつて、精密正確な所は逆も表はれません。従つて之を集めて眞正の統一體の知識となすことは出来ないであります。其れが本當に出来るのは、今日の貨幣經濟殊に國民經濟と云ふ組織を形作つて居る經濟に就てのみであります。

## 經濟政策の説明

狭義の經濟學には經濟原論の外に經濟各論があります。普通之を農業・工業・商業・交通・植民・保險等に細分致します。此各論は今日我邦では獨逸流に之を政策と稱へます。即ち農業政策・工業政策・商業政策・植民政策・保險政策等と申します。其故は經濟各論は専ら政策を研究するからであります。農業・工業・商業に付ての經濟論と云ふのは、農・工・商に付ての經濟政策論を主とします。併し政策ばかりでは無い譯です。政策の外に矢張り農業なり工業なり商業なりに付きまして、其理論的方面は有る譯ですが、それは大抵經濟原論に於て大要研究して了ひますから、農・工・商の事を論ずる時には、重に政策の方面を研究するので、従つて政策と名づくるのであります。

## 政策の意義

そこで政策といふことの説明を致します。今日政策と云ふ語は、經濟政策・社會政策・又刑事政策・道徳政策・教育政策・倫理政策・衛生政策などといふやうに廣く用ひられます。是は獨逸流であります。英吉利・アメリカ・フランス・伊太利等では餘り用ひません。獨逸の學問が世界に蔓延つて、他國殊に我日本で其眞似

を致したのであります。元來政策と云ふ字はチョツと聞くと餘り好い感じを與へません。ポリシー、ポリシーを弄する人杯と申すと決して其人を褒めた言葉ではありません。處が經濟政策・社會政策といふ時の政策と云ふ意義はポリシーとは大變違ひます。所謂ポリシーは政策です。尤も政策と云ふ字も、政略と云ふ字も支那の字としてはそんなに違ひ有る譯ではありません。字義の上から言へば違は無いが、我々は政略と政策とは別の物として分けまします。若し之に定義を下すならば、或特別な人々の利益を全體の利益と混同して之を不當に助長しやうとする手段を名づけて政略と言ふのです。國全體或は一地方全體といふものが茲に在る。之に對して一個人の利益あり或は一黨派の利益あり一町内の利益があります。何れも全體の利益より小さい利益であります。其一小部分の利益を恰かも全體の利益の様に觀せ掛けて、全體の利益を圖ると號して、實は少數の利益を圖る爲に色々の手段を施すのが政略です。乃ち彼はポリシーを弄するとか、或はどうも今の政治家はポリシーが多いとか云ふ政略です。實は國全體の利益を圖ると云ふことが政治家の任務であり、それが尊い處であります。さう云ふ人は無くてはならぬのですが、さう云ふ名の下に於て、實は一地方なり一局部の一部分の人の利益ばかりを圖るからそれを政略と名づけて賤しめまします。一部分の人の利益を圖るならば一部分の事として爲す可きであります。若しそれが多數の利益を害するならば止めるといふ覺悟を持つて居らねばならないのです。正々堂々と自分の利益を主張するのは宜しいが